【下山逸蒼特集　総集編】第十四回から第十九回にて再編集

自由律句報

常磐（ときわ）ネットワーク・増刊号

下山 逸蒼 特集　総集編　目次

○種田山頭火や尾崎放哉が『層雲』誌上で活躍した同時代、カリフォルニアに居住して自由律俳句を日系社会や日本の層雲誌上に発表し続けた下山逸蒼の日米に残した膨大な数の自由律俳句から日本で閲覧できる句を十四名の選者によって選句して、時系列に沿って掲載いたしました。……２頁

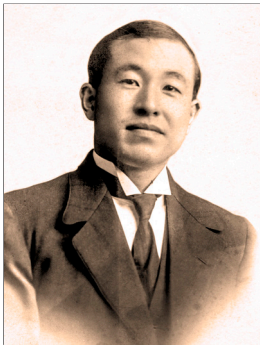
【私の心に残る下山逸蒼の自由律俳句　選者一覧】

白松いちろう　千葉県・前田　和子　福島県・根本　啓子　奈良県・平岡　久美子　東京都・いまきいれ尚夫　東京都
棚橋　麗未　東京都・村井　洲　三重県・小山　智康　栃木県・野田　麻由可　茨城県・高木　架京　福岡県
那須田　康之　静岡県・大迫　秀雪　埼玉県・小山　貴子　大阪府・松岡　月虹舎　茨城県・荻原　井泉水　神奈川県

○ＵＳＡ移民一世の絆 ―逸蒼とカリフォルニアの俳句仲間たち……１８頁

○下山逸蒼略歴・種田山頭火と尾崎放哉の略歴を併記いたしました。……３３頁

○下山逸蒼が、カリフォルニアで出版した五冊の句集と以降の作品を層雲本誌から。
第一句集『逸蒼句稿』原本……３６頁　第二句集『下山英太郎句集』抜粋７８頁
第三句集『沙漠の旅より』抜粋８４頁　第四句集『霧笛』抜粋９３頁　第五句集『海へだて』抜粋１０７頁
第五句集以降から瞑目までを層雲本誌より句と関連記事……１２３頁　『下山英太郎歌集』……１４５頁



下山　逸蒼
写真：盛岡市先人記念館

私の心に残る下山逸蒼の自由律俳句

１９１２（明治４５）年から１９３５（昭和１０）年

1916（大正５）年頃の逸蒼
写真：盛岡市先人記念館

下車人は闇に消ゆ黍（きび）畑の蟲に

故郷雪解の鳥の歌など恋しかろに

露の如くころがりて果つる我とこそ

狐火なりと燃えよ眼前の此の闇野

夕焼くろずむ枯野よりふるひ来る口笛よ

オリブ林の冬の灯にかそけく裁縫（ミシン）鳴れり

一つの灯に跟（ひ）きながながと貨車の曳かるゝ

暗き野天幕（テント）の灯に浮く我影に咽ぶ冷めたき土の香

急雨の底より赫ッと射る斜陽が満開の桜に

埠頭に吊れる一つ灯はひっそりと黒き海へ

鐘楼の壁吸う青蔦をしめじめと濡らす雨

霧に悲しく心とけ二人添い行けり

海へ海へと誘う夜霧に夢のごと二人

月の光にさぐり飲む火酒のするどき味

眉間をするどく射る星にフッと死にとなる

落葉さむざむ、泣き濡るる瞼を吸ひつつ

別れて一人海の碧さにをののけり

みごもる人の有明けの灯さへ消えんかと

新月見出せし青麦の中を行く

雲れんれんと別れしが二つとも消えたり

日々伸ぶる青麦の路日々通う仕事なれ

鐘鳴る光り塔はなれ舞う白鳩なり

君が影なき鏡ににじむ灯を見もる

病葉のひとひらが冷めたく帽をうつ

酒場（バー）を出て、棒立ちに海の入日見る

真赤な花びら文より散りし胸さわぎ

積み牧草（くさ）に倚り、夕星見居る

船待つベンチへただよい匂う潮なり

いらいら本とぢ車窓の雲に君おもう

濤音の闇さぐり布団かさねたり

砂に書きし君が名さらい煙むる波

うつつなく別れ来し夕波むせぶ

掌にひつきをるひとつの魚鱗（うろこ）がひかる

灯にひらく手帳より砂こぼるる

はるかベニスの灯よりはるかなるこひびと

本屋でて、あてどなく灯に消え行く

深夜ひらく歌集よりひとすぢの黒髪

軍艦一艘の灯のみの秋の潮鳴る

君が文もて夜寒のともしハタと消す

秋の沙漠の昼の月白ろくたたずめり
いのち寂しくひとり倚る枯木の銀光

働き靴の紐しむる早天の鐘さやか
返事も書かず絵葉書すこし送れる

ゆあみの湯提ぐる春の月夜のバケツの湯気
女の一人は沙漠の涯の煙を見つめ

睫毛にそよ吹く二日の月のはてなき白砂
つばめつばめ汗みどろのもんどりうち

バアを出づれば煤煙匂う都会の夕空
我は我たりこの心を秋天にとぎすます

電車終点より草枯るる丘となりゆく
砂にまみれし手を手をにぎるほほえみ

はかなきえにしのふたりのまえのうなばら
都会のどん底の寂しさにつちかういのち

フリーランチのセロリ裂き咬む孤独のタ
トンネルロの朝寒に叫ぶ新聞売子ら

張りつめしこの海をべりべり裂いて大船
われらの恋を葬りしこの海の青さは

落ちぎわの冬の陽へ爪屑を吹きつくる
鯉の眼玉ぞまざまざ生きて動かぬ

正覚坊（アオウミガメ）の動く甲羅を叩きし掌
人形は日本の女の児胸押せばひいひい泣き

春の陽いただき働かんアヒナパンツ（インディゴジーンズ）の香

言いそびれ別れ来し星空となり

会うて別れて春の日はうつろに暮るる

旅に果てゆくジプシーの風光る耳環

啄木鳥木つつくこの不孝者の胸つつく

君がテントの焚火めざして踏む夜露

大露の葡萄摘むみんな素晴らしい元気

海は久遠の悩みを湛えのたうつ

月夜あやしく死をそそるレールの光り

みんなであつめた焚きもので焚く火のきおい

河岸の乱杭に今日も陽落ちて働口なく

旅の短夜の酒つがせ女に話させ

仕事帰りのたそがるる喉へ酒場のビア

野墨（けし）粟よこの野のレールの中に咲かむとす

われら労働者に枯野に響く工場汽笛

きようも一つぶ一つぶのオリーブ搾り暮れ

児を抱きあげて枯野の涯てのタ紅見せ

枯草いろの仕事着で枯草に触れゆく

土工ら賭けるレールの中の地べたの銀貨

海の歎きの千切れては啼く鴎となり

炎天の錠あけて入る部屋にちらつく蜥蜴

異国の夏野枯れつくし蛇のみつやめく

一人の友の訪いくるる時刻の靴音

とんぼは流るる我が白き寝台の空より

無辺の闇へ息詰み堕つる頭の重さ

深夜の灯ともせば松葉杖よ影つくる

刈る髪さらさら白ろき病衣の肩に落ち

瓦斯の灯暗らむ天井仰ぎまじまじ人待つ

フリージアの花ただ白うなぐさめもなき一つ灯

一本の手紙も来ずなりし寒夜の星星

椅子寄せ病者ら一つの窓の冬陽分け

一つの林檎をたんねんにむく病者の夜

時雨る夜の病室でこごえの賛美歌

冬雨じとじと病む身の髪のび

松葉杖つく我が影に凩の影もつれ

白ろきカーテンをへだつる海のあけぼの

封じた手紙をずたずたに裂く嵐の夜

松葉杖のさきでのけてやるでむしころげ

黒人等うららかに弾き唄いとろけあい

神をたたえてうららかな光の子となる

冬の夜明けの街燈を消しゆくロ笛

寒夜の魚のあら煮がこごりつける皿

義足鳴らして冬晴を汗みどろの旅人

波の底よりよみがえり家路さす漁船

枕辺の黒い小型な聖書の星空

まつ黒ろき鬱屈の石炭が噴くほのほ

朝の焚火の雪ちらちらす聖書の一章

おのがとぼせし街燈の一つ一つを消しゆく

灯を消せば枕辺の花薫りをつよむる

朝日をゆさぶりゆさぶつて一人のぶらんこ

日の出の光りがこのでむしの角にまで

銀の十字架重もたげな尼たちの若葉みち

水平線限るまま帰らぬふるさと

松葉杖に倚り仰ぎ見る星空はひろし

夜霧に立ち濡るる我が外套の長さぞ

深夜の灯ともせば松葉杖よ影つくる

吾に離れぬ松葉杖の夜の影ながく

鳩ほうほうと啼けば吾を待つひとりの祖母よ

青い鳥青い鳥口笛吹けば影消え

野芥子よこの野のレールの中に咲こうとす

遠山うす青く消えのこる愁いを

虹噴きあぐる緑野の涯てなき明るさ

働き帰る路よぎる蛇をよぎらする

曠ら野に働く吾らの運命の星星かがやく

アメリカへ来て足なへとなりベッドの蝿打つ

水平一線の烟堪えざる郷愁

悲しき愛の桜んぼをほろほろ摘みため

酒場のでっかい看板のまともの荒ら海

一本の手紙も来ずなりし寒き夜の星星

海を前にし砂握り握り語ること

椅子によせ置く松葉杖へとどきし月光

冬陽にあそぶ雀をかぞえて笑ましき

オレンジの花薫る悩しき夜の姿見

満月の深夜の白雲が裂かるる海風

うつろの殻負いかたつむりの一途さ

君らに松葉杖の後ろ影見せ別るるよ

でで虫たゆまず明方の青芒まで

冬の夜明の街灯を消しゆく口笛よ

露の道にてとおくから彼女のほほえみ

あれ野を行くときもと賛美歌うたい別るる

秋の夜空のひんやりふるさとへつづくか

拭へば冬晴のわが松葉杖のつや

蝶よ冬晴れの光る命を惜み

今年も病室にて壁の暦を剥ぎつくす

病室の壁すべり三角の冬陽がのびる

かもめら全身をかがやかしあらそうえもの

焚火明りに聖書読むすがすがしき冬暁

焚火くわっと炎え聖書の細字

燃やしつくせし文がらも石炭がらも白し

稲妻しばしばする宵のちまたの伝道

セロ弾き悩ましく黒髪を掻きあげては弾く

船乗りよ異国の暖炉にかざせし大きな手

朝の焚火の雪ちらちらす聖書の一章

爐を焚くひとりにて火の音火の匂

虹たつ荒磯の貝殻の濡れいろ

鶴が檻より晴天を恋へるこえかな

おのがともせし街燈の一つ一つを消しゆく

チェリー摘み初めのチェリーがにじみゆく両の手

麦の穂そろい河船すぐるひたひた波

別れてひとあしひとあしとへだたる夜霧

壁の額まで月さして来て真夜のひとり

害虫とまでたたかって生きゆく生活

波音ほの白く寝息にかよい

ダリヤ咲きみだれ黒猫がうずくまるまなこ

一日の労働靴をごっとりぬぎすて

子供あやしに吹く笛がしだいに悲しく

秋晴るるちまたにて黒人は靴みがきつめ

秋晴るるしょせんはひとりびとりのこころ

焚火に背中あぶり立つ闇濃きうなばら

ターキー総身を怒らして鳴くまま陽炎

夜の海どす黒ろく脳みそにへばりつき

水平一線かぎるままかえらぬふるさと

山の頂とこそ岩岩の寂光

山はひそけし松葉杖を岩によせ

瞰下ろす眸にあまる太平洋のおお凪

一羽の鷹が陽を搏(う)つて遥かの峰さす

汐じめりするベンチにて船待つ星空

ばった跳んではわが松葉杖につかまるよ

夜更け一軒灯れる店の赤いアツプル

海の青さに透かしては拭える眼鏡

海月うちあげられしまま夜の光となる

木枯の夜を訪ね来てにぎる手

凍て空かぶさる癲狂院はしづまりかえり

冬晴の島さして波ある渡船

夜霧に落ちている花束拾わじ

異国の夜霧に濡れて生き通さんとす

すべてに背をむけ海の蒼さに対してひとり

まぼろしの蝶追ひそのまま

海へ陽入れば空はその海より青く

君を帰へした霧の夜の電車の花火

カンナの花が炬火かざし暑くする

沼底のしじまよりすいすい伸びるもの

茂りの底に持って来ている聖書

こぜにが夜長のめしいの帽子にたまった

山々さむし訴えようもなき移民

移民の汗で血で肥えたアメリカなんだが

がたがたフォードに妻子つみ落ちゆく移民よ

貝がら拾ろいためては捨てゆく

霜朝の崖がかぶさるレールの仕事

誕生日のわが顔をごしごし剃るなり

尖った屋根裏ずまいの思想

海からあがった流れ木に憩うて海見る

すり減った活字で滅入りゆく同胞励ます

夜霧に支那そばの小楊枝噛み捨てる

数えた雀がほろほろみな飛ぶ

いつからとなく吹かない口笛吹いた

校正刷を血みどろにしたインキで手も赤い

落葉するベンチにてうちあける

夜長めざめている人おもいめざめてる

波が持て来てくれた流れ木焚く冬

ポケットの空らっぽな感謝祭である

反り身に歩るけ秋高い大陸ぢゃないか

年の終りの海鳴聞いてる

年の終りの爪でも剪(は)さもか

除夜の人波に揉まれにゆく独り身

型の如く握手して別れたきり

マッチ呉れと朧ろ夜が手を出す

春の青空の窓拭く

日落つる渚の砕けた貝がら

道化の顔を洗ってしまった役者の顔

深夜の壁が咳する

雀こぼれきて足もと

蹴って蹴って蹴りぬいた球抱いて帰る

窓から月夜へ首出した

児のみじかいお祈りもすんでナイフフォーク

砂山で別れ話となった

遮ぎるものない大海も暮れ悩んでる

会いに来し夜のもろこしの葉ずれ

校正の筆がまだ海に揺られてる

初秋を遠めがねに入れる

病躯からまた立つ秋かよ

タンポポほほけ、なりゆきにまかせてる

梟がぶッ欠けた深夜の月よぶ

軍艦満月に碇おろした

月見草の砂丘の砂がほろおちる

田舎電車の冬ざれにぶらさがる

冬風すさんで連峰尖がらす

うそ寒い夜の会堂へ来てくれる

貨物車の屋根で働いて時雨れている

さすらいの冬草青めり

元日暮れゆく鋪道のコンフェティ

親の死んだもしらぬ児で椿を拾って

寝たあと闇が寝顔の型とる

ポケット空らっぽな夜空の蒼さ

高いとこから道説いていらっしゃる

渡って来たきりの太平洋がある

漂着木がある息ませてもらおう

私の一つの窓月さしている

月光の氾濫に身を投げる

暮れぎわの犬ころにからかっている

破れハモニカが青芝に濡れていた

べつべつのことおもふ手つなぎゆくなり

海とどろ底力沸(た)ぎらしてくる

その唇と唇が海隔てている

星が流れた自動車がまた轢いたのか

石壁の死相から蔦若葉する

胸の無人島に信天翁(あほうどり)が群れている

ポストの底の暗黒で手紙が落ち合ふ

枕木の月光踏みゆく
だだっぴろい海前に置き腕くむ
冬ざれのゆきどまりから海となる
沙漠にとりまかれ脈打つ孤駅だ
渚の砂へ児はなんぼでも大きく描くなり
大拳闘技も果てし天の川がある
並樹尽き別れる岐路へ来ている
流転つづける帽子のつば癖
長い夜の片隅が鼠に噛まれる
冬ざれのゆきとまりから海となる
アスフワルトの暗鬱を敷き延ばしてゆく

何んでも掴もうとするちッちゃな手がある
春陽の芝でとろり見た夢よ
あしてまといのない月夜をあるく
遥かな船の日の丸がめがねに入りくる
ぶらつくところもない邦人街をぶらつく
青芝の月夜を踏みて伴れ
ベンチにまだある夕陽の端に腰掛ける
海の心がどしんとぶつかった
銭乞う帽子おいて胴躰ばかり
暮れかけしかの丘の十字架はまだ見える
おちたペニーが枯葉いろしている落葉

手が足に灸(やいと)をすえてる

ひもじい犬が陽にくるまってねているほかなく

冬陽ぼんのくぼへくる

雨に冷えてやって来た手が握る手

終電車が終点の星空で待っていた

四ッ葉のクロヴア見つけたとしても

湖水にうつる此家のベル押している

アメリカ三界でつぶされる煎餅の辻占

夜霧の伴れが減って減って独り

一つきりない窓を開けて私の初空

むけば月夜の匂いがして青いバナナ

春の夜更けのトンネルをぬけてゆく口笛

太平洋とポケッに戻りの電車賃(カーヒエア)がある

異国で月光雫している尺八

水平線へ落ちてゆくあの船の乗合いよ

初空へミルクワゴンの蹄が冴えて通る

死面のような凧がある異国の夕空

金網から青空へさえずりつめてる

春ゆく角笛

風から帽子かえしてもろうた

素足が深夜であるスリッパ

犬狂おしく吠えて秋なる白波

ぐるりに蟲鳴かせ起きてるだろうか
砂漠つらぬくレールの月光跨いだ
アラスカサモンの鼻ばしを酢にして秋めく
この沼の死面からすいすい藺(いぐさ)が立つ
俺をふりおとさずに此一年廻った地球だ
握手したあの手のぬくみのもう世にいない人か
うしろ姿、運命があるいてゆく
飛行機おおきく通る土筆はぞくぞく
柩出て行った階段をいそがしく昇りては降り
異国の春夜へ開幕(まくあき)の木を入れる
嶋の夜の噴火明りで語らうことする

汐にただよう空ラ箱と渡船で暮れゆく
黒髪の匂い異国で虫の音更けてゆく
影、月夜匂うレモンの花へ近づく
この椰子に彫ってある日本語で秋晴
最後の一人となって、蝋燭ともしている
俺とびっこの影とが月夜だ
トラックのあとに乗っかって風景捨てて行く
よれよれなネクタイで帰る雁仰いでる
邦字紙の二三行に報ぜられて、もう居ない
蝙蝠翔けるころのジプシイの唄かよ
闇は車窓へ灯の美しさのみ見せている

くんで寝ている手の指輪の珠へ灯

ほころび縫ってくれて、糸切歯

灯を、君と、扉の外はただ霧で別れる

船へはお見送り出来ないという手を握っている

俺の肩に既(も)う亡い友の手がある写真で

舗道に木脚の音をさせてゆくも夜霧に

行く雁行かして了って、大空

異邦人同士がだまってベンチに、秋風

黎明のこの大通りを独り行く靴音だ

傘さす手がない松葉杖で行く

松葉杖つき荒涼の涯まで行く身か

春たそがれの草に道のある口笛

海へ入る陽を編んでる編み棒

松葉杖も脚も投げ出してかれしば

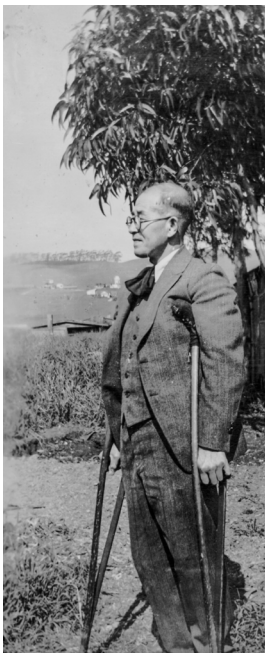
手の蟻も、別れの握手だ

松葉杖のさきで月夜からおとしたフルーツ

道づれと別れては、別れては行くしぐれ

くぢら汐吹くように病床で吐き上ぐる水

青空も見えて来た春風を入れてもらう



晩年の逸蒼
写真：盛岡市先人記念館

USA移民一世の絆
逸蒼とカリフォルニアの俳句仲間たち

【逸蒼俳句その独自の変化】

逸蒼が盛岡で最初に俳句を学んだ師は、旧派の一静庵逢雨（新戸渡仙岳：啄木の恩師として又書家として有名）、山口五雨（東北屈指の書家）等だった。句作の姿勢は「日曜日には、句を三百句作ってから起きると言って寝床の中でよく発句して、職場でも朝から発句ばかりしていた、そうしたひたむきな精進と深い教養が、渡米以前から旧派の伝統を破って新俳句に開眼し、ごく自然に正岡子規一派の俳句革新運動と軌を一にしたと見て良いだろう。」※1

子規の没した年に彼は、その年の十一ヶ月分の俳句六百五十余句を「一艸集」として筆書き直筆冊子に認めた。「されこうべ芒が下の細流れ」はその中の一句である。その翌年、一九〇三年九月アメリカへと旅だった。

逸蒼の第一句集となった「逸蒼句稿」には一九〇三年のサンフランシスコへの渡米第一歩の句「銅羅汽船入る湾の霧深し」から一九一三年に直原敏平等と紙燭会を設立する頃までの句が収められているが、上陸して五、六年は激烈な労働のためか掲載句は少ない。借金返済や母弟への仕送りの一段落する一九〇九年から日本語新聞各紙にいくつもの俳号でたてつづけに俳句を発表して、各紙上での年間掲載句数は常にトップで、一九一〇年加州朝日新聞創刊以後同紙の俳壇を指導する。

【文芸欄掲載数上位者名】

俳句結社『紙燭会』の面々　　1913（大正2）年

前列向かって右より木村 三斜、篠川 篁玲、下山 逸蒼、佐藤 一水、高橋 静波、直原 敏平、田原 紅人、増田 宇外、後列向かって右から、西條 木兆、小野 千里、加藤 泰山児

写真：盛岡市先人記念館

「霧の罅」『新世界』、「銀彩の森」『日米新聞』、などの文芸欄掲載数上位者名は、下山逸蒼（時に映朶桜、横月、笑春、夢逸、漁逸などの俳号）、田原 紅鳳子（田原 紅人）、岡 草志、小室 鏡太郎（海紅）、三輪 古絃、三宅 太郎、上利 与天地（海紅）、尾澤 逢嬉楼、奥野 吼雲主、青稲等々。

それはアップランドから始まる

逸蒼の句風はすでに季語の制約や五七五のリズムから解け溌剌とした新興青年俳句に変貌している。翌年、層雲創刊と同時に同人となり加州の俳句文芸の前衛として活躍、下村逸蒼の名は加州ばかりか日本でも広まり、加州同人の中心にいた。彼がいよいよ自由律俳句的に変貌するのは、アップランドでの直原 敏平との巡り会いから、俳句に対する心構えを学ぶ。

逸蒼の次々に拘わった俳句結社

『紙燭会』『レモン詩社』『湖畔社』
『北米アゴスト社』から『ポピイの会』の同人と句

直原 敏平（俳号、としへーまたは行人）※2―1・※6

下山逸蒼が伝統俳句から自由律俳句へと大きく変貌する切っ掛けとなった作家。

岡山県出身。病を得て医者から帰国を勧められながらも帰国しないうちに肺炎を患ったのでアップランドに移り「レモン園の仙人」と評される質素倹約生活を送りながら一九一五年ごろ自由律俳句結社レモン詩社をおこし『レモン帖』を編集発行した。（一八六九年生―一九二九年没）

『俳三昧六十日』より

かれくさのねもとまで、ふゆひのさす
しもふみならせば、ここのけむりいちじにふとる
おおしもの、ごごぬくし、むしすだく
ふゆのよは、かれきがふらす、あめのさえきく
あまぐもビンビン、ハミングバードのはおとひびく
むらびとみな、わがやにねむりふゆのよや
かれくさスクスクさすそらの、ゆーぼし
くさかるる、せかいひろし
とにあたる、ゆきのおと、さらさら、さらさら
まいにちもちやく、まいにちよきひなり
すいせんのはの、ぶあつなる、ふゆおもし
かれきのこずえの、くものさきの、あおぞら
こだますやま、こだますかれきふゆひおつ
てんとち、よのしじまに、われひとり、いきつく
はるひのすなに　かげつくるはなに　ことばかわす
みかんまるし　ゆうづきまるし
かんげつのひかり　いしをくだかんとす
てぶらのさびしきに　あんずのはなさけり

『ＴＯＲＣＨ』より

菊つぼみまじかに秋のあしおと聞ゆ
臥床しつらへ出でゝ孤独の夜の北斗を仰ぎ
きくあかりのひとゝきのたそがれすごす
もづだまりこどもがおらず
むねいたきあんずのはなおりゆく
焚火の灰ひをふるにかりかえる
忘れ事覚えだす日傾く
ひばりの聲ランプ吹消す
春日の砂に心うずまりつくす
小鳥のつばさ花曇りもおもし
雲の峯わだかまる青空さけんとす
雲の峯ちり夜空ゆるみたり
西瓜の皮すて軒の日影立ち
陽白し我が悲しみの前にして
落葉に汽笛のねいとひく
コヨーテなき犬なき冬の夜のにぎわし
蟲なくつめたき石により耳そばだつ
灯火消えし夜の底を風まろぶ
焚火の灰降りレモン静かし
雨の闇を出てまきわる妻子可愛し
草の日影広野昼下る

直原 敏平の没した一九二九年頃の逸蒼の句

「夜霧の伴れが減って減って独り」

逸蒼は彼を失った傷心のなかで詠んでいる。

加藤 泰山児（一九二四年没）※6・※9

はる〴〵帰り来し君が頬霧にぬれたり
別れしがやがて夜霧に消え行けり
秋の風絲のごと白く細し（この句故人の碑に入れる）
救世軍ひざまづき祈る夕陽の街
雨まつ人に風がざわ〴〵鳴っている闇
ひそ〳〵の話もある明け方の壁
電話きりぬおのろく胸を壁にもたるゝ
鉛筆屑燻ぶる午後三時
昇降機降りて秋風の街に出づ
公園のベンチに一人あり落ち葉舞い下る
戸を叩いていらへまつ胸のときめき
さりげなく君が手を握り別れける
黙って歩く肩を打つ落葉なる
逢へぬ日の若草に雲のゆきゝを眺め

泰山児への追悼句碑には逸蒼の句

「まぼろしの蝶追ひそのまま」が刻まれている。

高橋　静波

尖り山尚雪も聞き馴れるクイルレモン畑に

西條　木兆

楢火に明るい貌、夜の親しみ

木村　三斜　※17・※18

電車は更くる辻々へ人を吐きつゝ行く手は広き闇なり

窓の女に言葉かけ歩む芝生なり

歩む先き先き昼虫の遠き静けさ

二階灯りぬ立ち話す人分れたり

夕月いとも静かなる芝生の匂い

黒き鉄の戸人人を入れてしまりたり

佐藤　一水　※6

わが口笛に星がふる石ころ道

鳥屋の雨もりに小鳩の目がことさら可愛い朝

きょうも炎天が日の出前の爪を割る

いちごも熟れた山火事日和

なげてもなげても風に切られるテープで女は泣いてる

田原　紅鳳子（田原　紅人）

はるばる来り押す扉のベル胸とゞろ

久保　綱子　※6・※9

レモン詩社同人（一八八二年生―一九二八年没）

日入る方より方よりと黄ばみ行くポプラ

秋雨の中をとぶ蝶淋し

千なりひさごいとほしく口づける

秋雨の夜夫と憂き語る

寂かに静かにガムの花散りし夕べ

誰とでも握手して見たさの此説法や

眼展けば誠に春の野なりけり

誠に春野あふるゝはよろづの悦び

幾度びめぐる春なれどよみがへる命ぞ

春の喜び友が住む石野にも匂はんか

芝生の上の黒ン坊白ン坊それらとわが児

仲よく遊びし褒美にと児等に黄粉の握飯やる

我等の家の建てられもせぬ国に住み馴れ

飛行機傾しぐ秋空の昼月動かず

思い迫れば夫も子も憂し行く手は死の一路

日本に帰国後、綱子は加州の日本語新聞に手記「海をへだてゝ」を投稿、掲載される。その手記の返信として逸蒼は第五句集を『海へだて』と題して出版を弟の四郎に委ねた。

「**その唇と唇が海へだて**」**逸蒼**※9

この句集が出版されたのは綱子も逸蒼も死後の一九三五年になった。

岡　草志　※６　一九二四年八月　アゴスト社設立

「へちまの種」

へちまの種の袋の上にへちまの種と書く
酒男が蚊をたたきたる濡手大きく灯影す
厨たそがるる水底の豆腐
灯し更けて松蟲のひげながゝうごき
二年目の茄子がなりつくしたる茄子の木
パサデナの山が近く見え裏屋根の霜
毛深い脚で大さう葡萄を踏みこんでる
おほしけのあとの妻子に見かへる

岡村眸子鳥　※６　一九二四年八月　アゴスト社設立

「林檎の花」

月夜のまるい芒の穂ばかり並んで
夜るの水冷めたきうまさとなる
夜雨に濡れて来なさる子もついて来る
陽がまわり親らしく子らしく饒舌る
少し熱ありて畠の柿の熟れたる
淡い陽脚におとどい遊んで帰る
ちぎれ雲高く秋の屋根とがり
破れ凧の山の児等あそびくらし
林檎の花白くあすのくらしへ咲く

徳永　田芥子　※６・※１８

日がのびてゆく遠くに時計台の針
旅果てし吾家の庭掃かれ菊も咲いている
雨の日の妻と隣りの桜見ている

鈴木　荷聲　※６

地に呼びかける聲のあって萌ゆるよ
ひまわりまわり切ってポーチの黒い顔々
たんぽゝ地にへたばり春は未だし
植えかへる根からほうけ立つ地いき
想い重ねる膝が冷え切ってしまった
方の手が届かぬ木蓮に触れて見る
生け芋の蔓が日脚を探ぐり延びるよ
乳吸う口にこもる精一杯の命
生きねばならぬ金策つきた夜の深み

唐津　文夫　※６・※１８

まだ濡れてる髪であやめ活けて来た
こんな生活（くらし）しても燕が宙返るわたしの空
づっこける陽のゆるんだ鉋を叩く
霧夜の穴の底へ交換に降りる笑顔だ

拾ったような暖かさみそさざえきている
嶋を離れて浪、更に月照り渡る
よく見ても贋金（にせがね）
日の丸へんぽんと又友を日本へ連れてゆく船で
桃の花手に持ち濡れて来なさる
かみなり稲妻まだ降り止まぬチャブ台をたたみ

「マグノリアの花」

仕事がない影法師先に立てゝ戻る
ひえびえ暮るゝ青空に豆腐を切る
永い日向き合って挽いている
月の梨の花は青白くて遠いクラリネット
旅は自動車からメリゴランドのヨットが走る
磯打つ音の日本風呂から出て流れている天の河
飛魚が飛魚が舳にネクタイをふかす
雪解けの児の手を引きいくつもある広告気球
どの枝も枯れきっている鏡屋の鏡
つゝましく暮らし苺は花もつ
ぴちゃぴちゃ雨から釣って来た
霧のマグノリアの花の開きたる

簗瀬　紫葉子　※6

のんびりと育つ子のかげに淋しく老ゆる親

関谷　蓬朗　※6

草は枯れてカクタスの刺はするどく映え
また逢ふて握手するアモンズの花
日曜の床に朝日を入れて親と子
そとは澄み切った星空で日本のラヂオが聞える

佐藤　知星　※6

痩せた手を握ったこれが御別れとや
風のたつ葉からあらわれる木蓮の花
吾ら寄る人数に西瓜割られて赤し
牛追い下ろす山の頂の夕陽
女よショーウィンド姿見にする若さもち
手づまる碁の温もりし一石をうつ
独り云ふてママごとしてる山の子供
野火がはっきりしだした暮の空

羽田　馬門　※6

夏の風を切って短いスカート
憂なきや娘等白砂にたわむるる

奥野　青珊　※6

西瓜抱きあげて母を覗く満面の力
どの草もひょろ〳〵伸びつくし谷底
馬は霧を吐き霧を分け土塊
漬物切る音のことさらなる夜更
雨の車窓の閉ざされ別れ
靴紐は黙って切れた
急げどちらほらアモンズの花

戸川　あきら　※6

酷暑に句もない筒ぬけの蒼空

高山　泥草　※6

柘榴にくちびる染めて子のよく独遊びすよ
子が掌にほぐしやる柘榴ほろ〳〵母の恋しく
やがて咲かむ鉢菊も引越の荷屑
薯畑枯れその蒼空の日つぶき
玩具投げ出し寝てしまったこの子のクリスマスエブ
煙草の火なんぞわけて仕事も無い埠頭のひとむれ
日本の船が来た酒飲みに行こうよ

渡邊　虎次郎　※6

日の丸を心に物色しながらエスマンと言う俺

城　しげる　※6

空も地もない霧の中の音
祭りの色あせてゆく街の紙散る

府川　眞砂夫　※18

暗い山からのぞいた月の影で女の靴音
どこへ住んでも同じことの葉のない枝へ鳥が来ている
草の実つけてよい児であった馬に乗せて帰る
如何に働けとやうれぬ梨が地をたたく
オレンヂころころ立っても歩けない子で

佐瀬　暁　※6

この砂漠の一点を青くした悦び
不甲斐ない命に鞭うつ夜長
口ほどには動かぬ手で親に指図している
春の砂漠の夕陽は子供の絵に似て
月が枝にしがみついている風の夜
猫と紙袋を奪い合っている春風

五明　玲子※6

話しつつ野八ツ手の実は淋しいもの野を風ふき
昼深く語ることば蘭はひそかに花つけている
はげしく赤子泣き乾いた土に黄な花咲いている

片井　渓巌子　※6

友より離るる日々のこころ
秋をうつして波の横顔
冬の陽おつる向ふの平原

田村　杜女　※6

風にまるまってあがってくる夕刊売りの聲
霧は街の傾斜へながるる宵月
ふか夜カーテンのゆらぎいる病み心地
オレンジの花零するキサラギの旅
にぎった砂が生きてる掌
地の果てへひとりゆくもの

三好　峯人　※6

夜は小駅のともしびのまたたき
はるか街の灯の瞬き一樹の黒さ
淋しき心を寄す此の犬の伏せる姿に

山野　重志　※6

いさかいて見る月なりみみずなく
机を飾りぢっとしている夜なり
木苺捧げし指の白さよ小雨に濡れて

櫛山　四門　※6

病妻と居てストーブ見まもる
朝の顔を合せて妻と寒き陽にいる

水戸　愛川　※6

夕涼みをベランダに語ろう女の素足

林田　盛雄　※6

灯の街の橋に佇む
蜘蛛の絲に宵の疲れし瞳を投げる
椰子蔭の弁当をひろげた微風
風にとられし帽子みている

三輪　古絃　※6

春の陽がさすカン〳〵鉄打つ
旅の車に花苗が萎れている

佐々木　黄瓦洞　※6

見覚えの人の名思ふて通り過ぐ

井上　靄女　※6

わがをとめの長髪を感じ初夏の野に

永原　秀秋　※6

白壁ならんで落日の二人

あかぬけのしたいゝ子だなァ春の念仏

酔いざめをてくり雨となる

無明の子は真夏夜空に母の名呼ばばや

藤野　英三　※6

星流るゝ夜踊りの足をつらね

霧ふかくとざして這入る

古田　純三　※6

引き越しの一日を子の人形はなさず

くるみ地をうつ家のあけくれ

山葡萄まだ青い山に別れる

霜の朝氷屋氷割るかけら

下島　花魁　※6

夏風邪に布団しめり親がなかった

わが聲ふとく少女にたわむるる言葉

親族の誰れかれ水仙の花こち向いて開き

大月　喜三郎　※18　逸蒼の身の回りを直接世話した。

月が風が明るくてするどく芽ぶいている

新年の雑煮にと蒔いたのが生えてアメリカで

芝生（ローン）には昼のほてりが残っていて三つ四つの星

どうやら排日のこともなく議会が終へて雨のふる裸木

運に逃げられどうしの古い帽子が一つかけてあってクリスマス

月のあかるさは丈高い八ッ手の花、そこの押しぼたん

晴ときまってからの雨が杏の実ぬらしている

日本を朝にしている夕日が青い柿の実

戦争になるかならぬかの風のでて来たもろこしの穂

街のどこからでも見える時計の日ぐれがのびている

生命とはコンクリートの割れ目から芽ぶいている

晴ときまってからの雨が杏の実ぬらすほどな

棚にからますものなども異国をついの栖として

暑かった日も雀の巣わらの動く夕となり

クリスマスベリー真赤に熟れている湾のしらなみ

シーソー、一本だけのアモンズで咲く
雲をいろどる日のまだくれるのでもない海に橋
陽の入る空が杏色の杏の木に子供がいる
暮れるまえの原の青さ長い汽車が通るとくらくなる
月がなくとも咲く月見草が海のゆうぎり
ここに兵となり君日本の血をもち炎天行進す
朝の水平線、むすめ白い靴白うぬっている
これが終わりとなろうを日本船の夏雲ドラ響かせている（龍田丸）
につぽんのたよりはラヂオでくる月のあかりは月からくる
敷物の模様にさしている日が秋の、端麗
海にはみ出して夕日の工場の音が音が船になる
きびの穂のそよぎや山を越えて葬ることす

米倉　久枝　※18　逸蒼の身の回りを直接世話した。
飛行機ひくく飛ぶアメリカで花作りして
向こうでも旗出して旗に陽がさしてきたところ
落葉日和の歩けてあるいてきたと云う病人
月夜の明るさは春の花の散っている石
パンジーの花が蝶のようで蝶ももう来よう
太陽川いっぱいながれてあたたかし
山から出た陽が山のわが窓ふかくさして食事
山超えてきたものうりのこえ、うら山がある
船へ人を送るきびしい暑さの朝の涼しいうち
枯れつくして山、ゆきすぎてあともどりする
白かば枝まで白く月夜はさむし
春風、糸捲くに貸す手の荒れている
木瓜の実落ちている逢へば別れとなることか
時雨月夜は日本の下駄はいて戻っている
柿の皮くるくるむけて幾年ぶりに戻っている
ずっと稲の穂なみの日本は学童が並んでゆく
障子のはりかえも梅の蕾も日本にいる
船で輪投げするのも日本をうしろにながい袂で

波多　泰厳　逸蒼の身の回りを直接世話した。
浅野　七之助　同郷の一世。逸蒼の身の回りを直接世話した。
腹巻　蓼川　※18
此土に生活の根を、とにかくポピーが咲いてる
妻とし子を抱いているばかりの外国へきて
夕べ丘に焚く火の美しく、水に美しく
冬が青みゆくと丘の、あなたの大学の塔

松野　珠樹　※17

母よ髪が一と握りに足りない

片井　京香　※18

鳥は鳥となないて私とあなたと夕空の下

すっかり裸木となった鳥の羽音か

船が入る日の手紙書いて手紙持っているあぢさいの花

雲のうらは月の明るい雨降っているアカシアの花

マグノリアの花、夕月、尼さん坂を下りて来る

鴎と白浪と海の彼方は日本の、もう船も来ぬそうな

岡田　花子　※18

日本へかへる話もしなくなったこのごろ落葉している

見田　宙夢　※18

よく釣れるので岩のしぶきもかんかん照る日の中

ロサンゼルス・オリンピック記念句集『TORCH』より

【強制収容所の生活と二世兵士の無言の帰還】※7

一九四一年末から一九四六年春まで、日系人を取り巻く強制収容所の生活環境での俳句集は、粂井輝子・アメリカ合衆国戦時強制収容所内俳句集覚書（JICA横浜 海外移住資料館研究紀要9）に概要記載されていて、それら俳句には、父母が永年辛苦の末に築き上げた基礎さえも今は跡形もなく覆されてしまっての強制収容所の生活感が滲み出ているとともに、戦死した二世兵士たちは堂々たる市民でありながらその生国より継子扱いされる理不尽さを詠う。

ここでは前記の強制収容所内俳句集覚書から自由律俳句のポピイ之会「ポピイ句集」を主に掲載しました。また自由律俳句の個人句集、強制収容所の生活を詠った米倉久枝句集『花と雲』と徳永田芥子句集『幽居三年』も抜粋掲載しました。

【ポピイ之会『ポピイ句集』】

手書き謄写版刷り。一九四五年一月（?）

トパーズ収容所の自由律俳句会の句集。

連邦捜査局（FBI）に検挙され抑留所収監　**古屋翠渓（注1）**

月が昇るらしい闇の監視室の鉄窓

憧れの加州に来たが囚れの身である　天使島（注2）

大きな力に打ちのめされ石を拾っている

夏雲またも行先のわからない旅立

（注1）開戦直後の十二月七日午後四時にFBIに検挙され、ハワイで収監され、本土の司法省管轄の抑留所に収監されその後各地の収容所を転々とした。

（注2）サンフランシスコ沖合にあるAngle Islandのこと。移民局が置かれ、移民の入国管理を行なっていた。

開戦と混乱

身内の軍服姿をやく敵の国にいて春　府川真砂夫
焼けるものはみんな焼いてしまった空には春の雲　片井京華香
すべてを夢とあきらめようと木の芽ぐんぐんのびます　大月郁夜子

強制立ち退き

たちのくに土地に別るる人々そして我が犬　森本弥山
市民の権利はあるものの生まれた土地を追れてゆく　大月喜三郎
べったりと貼った春寒い電柱が日本人立退け　大月喜三郎

仮収容所　タンフォラン仮収容所

湿りあるところ大根花咲き馬小舎の同胞（はらから）　府川真砂夫
大きさびしさにぶっつかたとでも砂塵はひるを暗くしている　大月郁夜子
住みてうまやにギダ弾きて子供の如く勇めり　大月喜三郎
夜更を楽隊に迎えられて赤い灯に息つく　森本弥山
バスが私達をおいたところ炎天草一としてもない　大月喜三郎
知りたいニュースの知る由もないメシの列に皿とホーク　塩沢徹四郎

トパーズ収容所

どこまでも耐へよう砂漠の空を雲がぐんぐんはなれる府川真砂夫
松葉牡丹に日覆い建て増し住みついている　林百天樹
焚火おおらかにせよとヒラ拓く我等に　津村木洋（注3）
カラコロ下駄の音がシャワーへ行く親子　松野宝樹
男鮪を買ふてずっと暑い広場をよぎり　広瀬米草
鴎群をなして若人鋤かへしている　松野南龍
かつたと打ったホームランのたまがひとつかみの浮雲　松野南龍
月見ている一人は兵に召されてゆく　林百天樹
はるばる逢いに帰休兵とお母さん　森田余子丈
地平へ一本の煙と汽車の郷愁　森田余子丈
配給服だぶだぶと行き交う大地凍ている　塩沢徹四郎
貝殻層をなし広島訛りで喜ぶことの　田原紅人
堰き切って畑浸す水や昼霞　津村木洋
行進曲歌ひ感激の涙ためて顔　府川真砂夫

（注3）ポピイの会のメンバーであるが、ヒラリバー収容所に収容されている。

（注4）第二次日米戦時交換船によって日本から、茶、味噌、医薬品、図書、楽器などの慰問品が届けられ、戦時収容所や抑留所の「在米同胞」に配布された。戦後、アメリカ移民から日本への「ララ物資」へつながる感謝の連鎖。

交換船慰問品（注4）を受けて

戦況しれず夜毎の銀河を仰ぎ　津村木洋
子供等は召され月が照る収容所の鉄柵　米倉林泉
悲報手に割り切れぬ心を持ち雨のポストへ　米倉久枝

【個人句集　米倉久枝　『花と雲』より抜粋】
吾子と云ふも今日からは茶のネクタイのアメリカ兵として
（長男入営）
庭にバラ咲いて軍服姿となって戻っている
朝寒く荷を造るに鳴く猫とも別れか（タンホーラン収容所へ）
苦楽を共にして来て藤づる伸びている
灯せば灯るバラック住ひにも夏はすずしく
眼鏡の曇り拭いても曇る眼鏡をふいている
胡瓜ほろにがく病めば病んだで子は我が側
つるものつるなし日一日と移動する日がもう
雲ほぐれてゆく大空ゆく先のことは思うまい
鵜啼いて着いたばかりの山を遠くに（トパズキャンプに着く）
浸したものの水に透きとおる秋の空がある
月が右になり左になりすこしは眠ったような
葉の降る外へ椅子出して遠い稲妻
召さるるものは召され収容所月の照る　（次男兵に行く）
春の日おちても明るい山を越してゆく一機
枝にしがみついて木瓜の実この子に母がいない
霧の香るような日のひとりびとりとして焼香してくださる
征く子に被せる雨具のあめがやみそうもない
木のかげ寒い夜の影となって待ち侘びている
此の世にかえらぬわが子を迎へてかえってゆく
春ただしずかに禮砲三発それよりラッパの鳴りわたり
（故次男陸軍葬）
国旗にくるまる棺のそばも国旗でわが子よ
こまごま折って渡さるる国旗をいだき思うことなし

【個人句集　徳永　田芥子　『幽居三年』より抜粋】
山柿の柿は空においておく　（ローア収容所）
朝餉の鉦ならす月が残る林に
空の月、水の月とある
バラックの屋根屋根の煙まっすぐな元旦
褒るる木々立てり帽子ふかくかぶれり
忍冬の二三寸伸びくる青さをもち
静かに春雨木つつき木をつつく
雨音も春タイピストたたいておる
アカンソー草の穂となりたる蜻蛉
瓶の蛍のなつかしく光り夏夜のまくら

水に浮草の花が炎天
別れの日となり絲瓜地にたれ
墓は杜近く昼顔の小径ついて行く
胡麻をとり胡麻をたたき働く妻に秋の日
監視兵はいない道が曲がり秋の雑草
冬木の影をおとし地に青き麦の芽
薪切るパワソーの音絶えず家裏は低く紅葉す
咳き入る壁に隣りいて師走みぞるる
幾山河超えて訪ねてくれて日焼しておる
絲瓜の花の緑にすわり浴衣のしわ
壁に三年のしみがありカンナ咲きつづく
夜蝉なく更けて夏夜の砂利道
柿若葉青い雨ふる雀がいる
ここにいて夏草日本空爆の短波を聞く
露草の道は一筋此の日詣る
夏はゆくここもおわりの蛙なく一夜

【左右木韋城編『慰霊句集』】
活字印刷　一九四五年（？）
戦死した二世兵士の慰霊のための句集で、息子が戦死した俳人の藤岡細江が「序」を寄せる。
アマチ収容所、ハート山収容所、ミニドカ収容所、マンザナ収容所、ポストン収容所、リバース収容所、ローア収容所、鶴嶺湖収容所、トパズ収容所、ビクトリア 加奈陀、他地域としてボストン、キャンプシェルビー、ヒルクレスト療養所 加州、レイトン ユタ、ソルトレーキ市、スポーケン市、ハワイ、などから出征した戦没兵士二〇九名の戦没日一覧が掲載されている、二世兵士全体に対する慰霊句集。

【安井亜狂『逆縁』】
活字印刷　一九四五年
父母はツールレーキ収容所、ミニドカ収容所、に収監されている。一人の二世兵士の死を共感をもって詠む。

【ツールレーキ吟社『紀念俳句集』】
活字印刷　一九四三年
ツールレーキ収容所の安井亜狂と林秋夕の選句編集。

【比良吟社『俳句集霾風』】
手書き謄写版刷り　一九四五年一月
ヒラリバー収容所の悪名高い砂嵐に因むタイトル、命名者は桜井銀鳥。

【鶴嶺湖鮑ヶ丘俳句会『句集鮑山』】
手書き謄写版刷り　一九四五年二月
マンザナ収容所からツールレーキ収容所に移送された俳句同好者による。
日米戦時交換船で日本に帰国したはずの森山一空が、交換船に乗

れずニューヨークから戻りツールレーキ収容所に送られてきた一空の発起で鶴嶺湖鮑ヶ丘俳句会。

【鶴嶺湖吟社『うつせ貝』】
手書き謄写版刷り　一九四五年九月
ツールレーキ収容所。小池晩人選句編集。

【満砂那吟社『句集　雪嶺』】
本手書き謄写版刷り　一九四五年四月
マンザナ収容所。安田北湖、木村白嶺、永井翠畝の選句。

【小池晩人編『草堤』ミニドカ吟社】
活字印刷　一九四五年七月
太平洋戦争が終わり、収容所から解放された移民一世が、白人社会で再びゼロからの生活基盤を作るには、実際の労働力は若く英語の達者な二世三世に頼らざるを得ず、日本の昔風の考え方の一世は沈黙するしかなかった…。

【小澤寧治編『病悠』発行者：尾澤まさんど】
自費出版　一九八八年十一月
父、小澤寧次の日米開戦当日から翌年五月にフレスノ・アセンブリーセンター、十月にヒラ・センター病院に収容されるまでの句と、「海紅」誌に掲載した句とエッセイ。

【特集記事の参考引証資料】

※1『下山逸蒼の生涯と其の芸術』下山四郎 編
小林不未鳴 著　層雲社
※2―1『在米日本人「植民地文芸」覚書2「我がなを」永遠に』―自由律俳句と直原敏平―粂井輝子 著　SELLA第35号抜刷
※2『在米日本人「植民地文芸」覚書3「かへらぬふるさと」』―下山逸蒼の自由律俳句―　粂井輝子 著　白百合女子大学言語・文学研究センター
※3『移民地文芸・自由律俳句の世界』―下村逸蒼を中心に―
中郷芙美子 著　立命館大学国際言語文化研究所
※4『英米文学の地平』―W・ワーズワスから日系アメリカ人作家まで―　田村一男 監修　金星堂
※5『特別展 あこがれの空へ』―民間パイロットの先駆け
武石浩玻―　水戸市立博物館 図録
※6『TORCH』編集発行人 アゴスト社
※7『アメリカ合衆国戦時強制収容所内俳句集覚書』粂井輝子 著
JICA横浜 海外移住資料館 研究紀要9
※7・2『幽居三年』徳永田芥子句集　徳永田芥子 著　時流社
※8『花と雲』米倉久枝句集　米倉久枝 著　層雲社
※9『コルマの丘に眠る』―水平一線かぎるまま帰らぬ故里―
久保三八子 著　真風舎
※10『下山英太郎歌集』下山英太郎 著　小林不未鳴 編
聴鴬亭文庫
※11『一艸集』下山英太郎 著

※12『逸蒼句稿』　下山英太郎 著
※13『下山英太郎句集』　下山英太郎 著
※14『句集 沙漠の旅より』　下山英太郎 著
※15『霧笛』　下山英太郎 著
※16『海へだて』　下山英太郎 著
※17『層雲 本誌』　層雲社
※18荻原 井泉水　選句『層雲句集』　層雲社

下山 逸蒼（本名：英太郎）略年譜

1879（明治12）年2月9日　父友一郎、母リヨの長男として現在の盛岡市中央通一丁目に下山 逸蒼（本名：英太郎）出生。
1882（明治15）年　12月3日　種田 山頭火　出生
1884（明治17）年　6月16日　荻原 井泉水　出生
1885（明治18）年　1月20日　尾崎 放哉　出生
1886（明治19）年　父友一郎、早世。一家は盛岡藩の中では名家と言われたが維新後の混乱と父の早世で家は没落した。
1891（明治24）年3月　盛岡市下橋中学校卒業と同時に県庁に給仕として勤める。
1896（明治29）年　三陸海嘯にて測量技師となる。また、小泉盗泉の「一志社」へ出入りして俳句、狂歌、川柳、漢学、武術を修練、同人誌も発行していたようだ。
1902（明治35）年　句集「一艸集」 文武両道の青年英太郎は結婚もしたが、生活に追われ老いてゆくだけの、先の見えた人生に嫌気がさしていたそんな折、一志社の友人から渡米費用が送られてきたことが渡米の誘因であろう、妻を離縁し、アメリカへ渡った。十年は辛抱して、やがては代議士になると言い残して家を出たという。没落した家を再興し、立身出世する糸口をアメリカに求めた、語学研究という名目での渡米であった。
1903（明治36）年9月13日　盛岡発、アメリカに向かう。
同年　10月19日　サンフランシスコに上陸。
当時の渡米青年らと同様、皿洗いから農園労働まで職種を拒まずなんでもこなし、弟への教育費や借金の返済のために、激しい労働と厳しい節約の明け暮れの日々を送り、破格の金額を送金した。
1906（明治39）年4月18日　**サンフランシスコ震災後、ロスアンゼルスへ移居。**
1909（明治42）年「俳句」を映朶桜、横月、笑春、夢逸、漁逸などと号し、日本語新聞各紙上に発表。
「都々逸」を又浮亭、流水棹、浮亭鴎などと号して発表。
同年　5月12日、初めて逸蒼と号す。
この年各地を旅行。
1910（明治43）年2月「加州朝日新聞」創刊。以後同紙にて俳壇を指導。
1911（明治44）年「層雲」創刊と同時に同人となり

本名の「英太郎」で投句をはじめる。

1912（明治45）年 層雲1月号　初掲載（層雲 第一巻第九号）

『露朝日の耕地来て犬猛き戸に』

1913（大正2）年　種田 山頭火 層雲に 投句しはじめる。

同年　7月12日　直原敏平らと「紙燭会」を設立。

1914（大正3）年2月　「逸蒼句稿」。

同年　10月　アップランドへ移居。

「サントニア吟社」創立。

同年　11月「紙燭会」を「レモン詩社」と改名。

機関誌「レモン帳」発刊。

1915（大正4）年　尾崎 放哉 層雲に 投句しはじめる。

1916（大正5）年1月　短歌も発表し始める。

同年　種田 山頭火 一家離散となり妻子と共に熊本に移住。

同年　6月　ポートロスアンゼルスへ移居。

同年　11月9日　アリゾナ州ユマへ移居。

1917（大正6）年　第二句集「下山 英太郎 句集」刊行。

同年　久保三八子出生。

同年　秋、再びロスアンゼルスへ移居。

1918（大正7）年1月16日　再びアップランドへ移居。

同年　4月11日、久保綱子と二年ぶりの再会。

同年　5月22日　放浪の旅へ出る。

以後南加、北加を転々とする。

1920（大正9）年 春　サクラメント郊外ハミルトンに移居

農夫となる。

同年　7月　農作業中に突然倒れ、サクラメント病院、サンフランシスコ病院などで入院手術を受ける。

悪性骨髄炎で、左大腿骨を付け根で脱臼した。

一時帰国まで決意する。

同年　10月9日　一時は左足切断を宣告されたが、サンフランシスコ救世軍療養所での治療の結果、病状は小康を保つ。キリスト教の信仰生活に入る。

1921（大正10）年 春　久保一家は移民生活を終えアメリカを後にする。

同年　久保綱子、北米朝日新聞に手記「海をへだてゝ」を日本から投稿して掲載される。

同年　11月 第三句集「砂漠の旅より」刊行。

1922（大正11）年5月23日　病は癒えて「新世界新聞社」へ校正係として入社。

1923（大正12）年6月24日　俊嶺として有名な「タマルパイ山」へ松葉杖で登山。

同年　9月1日　関東大震災。

久保家被災してアップランドで築いた財産を失う。

同年　尾崎 放哉 京都一燈園に入る。

1924（大正13）年1月、「レモン詩社」同人、加藤泰山児の墓石に逸蒼の句「**まぼろしの蝶追ひそのまゝ**」を友人の決議により刻す。

1925（大正14）年　第四句集「霧笛」刊行
同年　尾崎 放哉 小豆島 南郷庵の庵主になる
1926（大正15）年 4月7日「尾崎 放哉 瞑目 享年41歳。
同年　種田 山頭火 熊本 味取観音を去り行乞放浪の旅に出る。
同年　6月 ロスアンゼルス行。
同年　7月30日、二十数名の変名で
文、口語和歌を発表。アメリカ歌壇に波乱を起こさせる。
1928（昭和3）年「レモン詩社」同人、久保綱子 東京にて瞑目。
同年「レモン詩社」同人、直原敏平 瞑目
1929（昭和4）年10月24日、ウォール街株大暴落始まる。
1930（昭和5）年1月「湖畔社」創立。
以後、各地の句会創立に関係指導する。
1932（昭和6）年 種田 山頭火 山口県 其中庵の庵主になる。
1933（昭和8）年 夏　この頃より病の再発。
治療に努めるも効果なし。
1934（昭和9）年1月　以後サンロレンズの大月喜三郎氏、
米倉久枝氏、波多泰岩氏宅を転々、治療に努める。
同年　8月「下山逸蒼慰問の夕」開催。
純益でウイルバー温泉湯治。
同年　9月「新世界新聞社」を退社。「北米朝日社」へ
校正係として入社。
1935（昭和10）年1月6日　瞑目　享年55歳。
同年　6月5日　第五句集「海へだて」刊行。

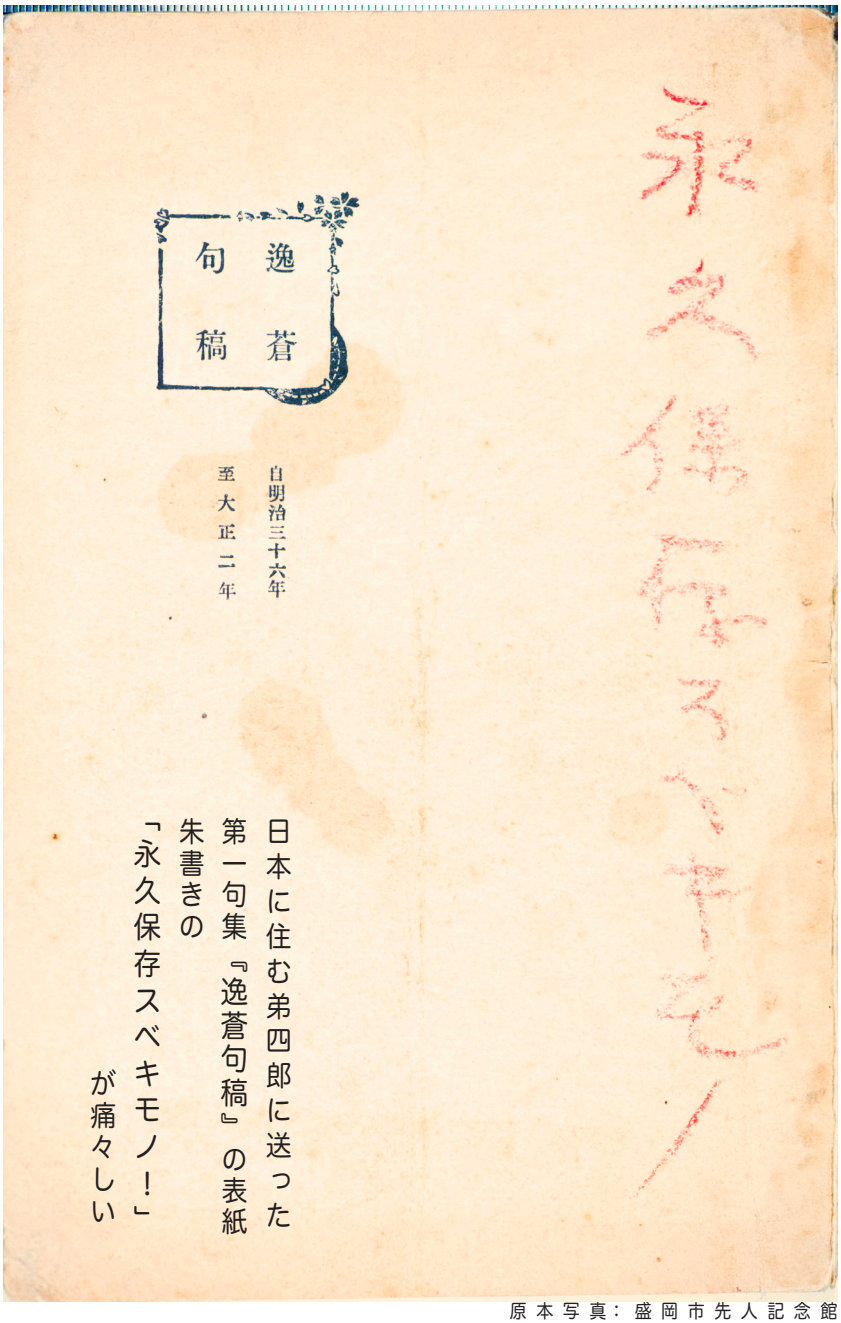
○半世紀がさりげなく過ぎ、まもなく二十一世紀になろうとする頃、九州で静かに暮らしていた久保三八子は、自分は常三と綱子の子供であると素直に信じきっていたが、下山英太郎（逸蒼）の調査研究で訪ねてきたジャーナリストから、逸蒼の実子であることを唐突に告げられ、混乱のままに生まれ故郷のアップランドを早々に尋ねる。

アップランド―開拓された広大な耕地は大半が打ち捨てられて、私どもの住居の痕跡など見当もつきません。今は日本人の姿は一人もなく、イタリー系の住民が殆どで、黒人や東南アジア系の顔も見かけませんでした。小さな店のウインドウには、レースのカーテンがそよ風に揺れて、やさしい風情を添え、この景色は昔のアップランドもそうだったらしいのです。

蟲聴きすましてココアの銀のスプーンに触れず
アップランドにて 逸蒼

日本人の暮らした家など跡形もなくなっているとはいえ、実際に行って見たことでパノラマの様に、色々な情景が浮かんできます。大勢の人の声、とりわけ食堂のみんなの笑い声や立ち昇る湯気、スープの匂いなどおぼろげながら記憶に残って…。※9

久保家の四姉妹　写真：盛岡市先人記念館



日本に住む弟四郎に送った
第一句集『逸蒼句稿』の表紙
朱書きの
「永久保存スベキモノ！」
が痛々しい

原本写真：盛岡市先人記念館

下山逸蒼の第一句集
『逸蒼句稿』全三十四頁

カリフォルニアの自由律俳句の俳人として名を馳せた下山逸蒼の渡米先で出版した初の句集が『逸蒼句稿』です。

作風は、それまでにアメリカ在住の俳人たちが作った日本趣味的な俳句ではなく、実際にアメリカに生活したその生活の中から生まれた俳句です。これらの俳句は、逸蒼の漢字に対する深い教養と俳句に対する熱烈な精進とによりアメリカという盛岡とは異なった風土を土台にして、それらが渾然と一体となって打出された逸蒼独自の境地を見せているばかりでなく、アメリカに於いて刊行された新傾向俳句集の最初の個人句集として、いち早く日本俳壇に向かって掲げられた狼火でもあります。

そもそも逸蒼は、渡米して一旗あげようなどという考は、彼の家庭の事情からして考えの及ばぬはずです。武家下山家の長男として廃藩置県で落ちぶれた我が家を、逸蒼七歳の時に早逝した父に代わって再興して母と幼い弟を養わねばならぬ身の上であって渡米等は思いもよらぬことなのですが…。

下山逸蒼はカリフォルニアの地で後継がなく移民一世には成れず、以後日本の土を一度も踏むことなく客死しますが、日系移民たちに降りかかる人種差別と厳しい労働環境のなかで、逸蒼は自由律俳句という嗜みを心の潤いを日本人移民達と『紙燭会』『レモン詩社』『アゴスト社』という結社を作り伝え広めた輝かしく確かな功績を残し、又現代にも通じる自由律俳句の妙を醍醐味を堪能させてくれます。

逸蒼の基礎的な教養は十七歳前後に積まれ、漢学は実学を主とした陽明学でした。師は小泉盜泉（後年後藤新平伯の懐刀として活躍、また南満州鉄道の設立は盜泉の画策によってなされたものという。）等が組織した国粋的な結社『一志会』に入りよくその集まりに出かけたということだから、海外事情にも精通して大いに天下国家を論じ若き血を燃えたたせ、仲間からは外国と日本との為替レートの格差は聞き及んでいたにちがないでしょう。俳句宗匠は一静庵逢雨すなわち新戸渡仙岳（石川啄木の恩師として又書家として有名）で、純然たる旧派俳句から出発したようです。

『一志会』の中に、遠山則善と則元という兄弟が在籍していました。この兄弟が明治三十三年に渡米する際に、逸蒼の渡米費用は遠山兄弟が働いて貯めて送ってやるから、金が着き次第逸蒼も渡米するという会話を交わしていましたが、口約束の上に遠山兄弟が渡米後何の便りも無いままに月日が過ぎて渡米話は夢のまた夢に思えるようになった頃、渋民村の『お直』という娘と同棲生活を始めていました。ある日、渡米して三年目の遠山兄弟から逸蒼宛てに三百ドルの渡米費用が届き、下山逸蒼の運命の歯車は大きく廻り始めました。

苦闘の五年（一九〇三年から一九〇八年）

逸蒼の公への渡米申請理由は語学研修としていましたが、弟の四郎へは、代議士になって帰国するつもりだと伝えていたようです。

【1906年頃の為替レートは1ドル2円（日本での巡査の初任給は月12円）仕事としては、日給で1～2ドル（日本での日雇い労働者44銭。大工手間賃85銭）ハウスワークは住み込み食事付きで月25ドル～30ドル。コック40～60ドル。レストランの場合はチップがあり、給料よりもチップのほうが多かったらしい。安い宿泊所としては1907年にカトリック教会の特別無料宿泊所や救世軍の宿泊所（一泊10セント）があった。救世軍の宿泊所はキリスト教徒でなくても先

着順で宿泊ができ、夕食には一杯のスープとパン、朝食にはコーヒーとパンが付いたらしい。】

渡米して三ヶ月後、母弟宛てに安着の手紙を盛岡に着信させてからは、基本的に月5ドル位ずつの仕送りを続けた他に、弟四郎氏の志願兵入隊費用百数十円の費用も工面する他、四郎が満期除隊して釜石鉱山に勤務するまでは母弟宛ての仕送りを続けました。

この間の句集への採句数は極端に少ないのですが、激しい労働の中でも俳句は多作であったに違いなく、この第一句集は自由律俳句へと変貌する過程に編まれた句集のため旧派的俳句は省かれたのではないだろうかと想像します。

送金から解放された一九〇九年　明治四十二年

弟四郎の生活が成り立って、どうにか故郷への送金が不要となった逸蒼の眼前に浮かび上がった日常は、入植地で恥も外聞もない全くの自由なこの新天地で、一攫千金を夢見る人たちが同胞相噛みつつ金に酒に一か八かの運命をかけつつ狂奔する同胞のすさんだ心でした。

この現実に直面した逸蒼は、今まで持っていた立身出世という考よりも、この荒んだ同胞の心を和らげるには、なつかしい故郷の風物を思い起こさせ日本人としての自覚を甦らすことができる俳句が、逸蒼にとって出来得る唯一つの道である事に気付き、投稿投句に全力を注いだ結果、日本語新聞の賞を総なめにして西海岸での俳句界では知らぬ人の無い存在になりました。全くの自由の身となった逸蒼にとっては生涯で一番のんびりとした時代でした。

『新聞文芸欄の指導者』一九一〇年　明治四十三年

この年の正月には、『羅府新聞』に『梅十句』、『毎日新聞』に新年雑詠に五句、『新世界』『サンフランシスコ新聞』『日米新聞』の新年懸賞俳壇の天・地・人それぞれに入選しています。またこの年二月に『朝日新聞』が創刊して文芸欄による初心者への指導を逸蒼が負う事になり、カリフォルニア俳壇に地歩を一歩一歩と築きあげていきました。

『自己俳句の確立に精進する』
層雲同人となる一九一一年　明治四十四年

この年、新聞投稿は一切やめて、層雲創刊、同人となり自己俳句の確立に精進していた年でした。

このころの逸蒼の俳句は、純然たる旧派から出発した俳句が、アメリカの新しい時代と風物に触れて、そこから生まれ出たものは子規一派の新俳句と同じものであったということは、逸蒼の句が他から影響を受けたからではなく、全く凄まじい俳句精進による自得でした。

アメリカ俳壇でも、子規没後、日本全国を席巻した碧梧桐氏の新傾向俳句運動がアメリカの地にまで広まっていました。五・七・五の定型と厳格な季題によってのみ成立していた定型俳句は、気候風土の全く異なったアメリカの新しい風物、新しい思想の洗礼によってすっかり行き詰まり、その殻をどうしても突き破らねばならなくなっていた時流と思われます。

しかし逸蒼俳句は、旧派から一足飛びに新傾向俳句へと飛躍した訳ではなく、旧派より新俳句へ、新傾向俳句へと二転し、後にアップランドで直原敏平等と穏やかに自由律俳句に三転して、大きく実を結ぶ事になります。

『生涯の援助者と巡り合う』　一九一三年　大正二年

この頃は、ロスアンゼルスで友人の中原氏と合同で魚の缶詰会社を始めて大成功を収めますが、逸蒼はその成功

を見届けるや、手を引いて相変わらず飄々とした生活に戻りますが、中原氏は逸蒼の力で巨万の富を築いたと云い、逸蒼を恩人として後々までも、病気入院中から葬儀の事等何くれとなく援助を惜しみませんでした。

この年の二月、逸蒼は直原行人・川上阿雲・遠藤紫郎と後世まで続くカリフォルニア自由律俳句会の前身になる『笠庵偶会』で句会を持ち、七月十二日、峡衣・九華を加えた六名で『紙燭会』として句会を開催しました。

『紙燭会』名前の由来は、慎ましくも荒んだ人々の心に灯を点ずる紙燭からです。

逸蒼の主唱によって持たれた『紙燭会』は驚異的な発展を遂げていきました。翌大正三年には『レモン詩社』と改名、更に『アゴスト社』となってアメリカ各地に自由律俳句の種を蒔き、戦後まで自由律俳句の輝かしい伝統を築きあげました。

文章底本として、下山四郎編集、小林不未鳴著『下山逸蒼の生涯と芸術』層雲社昭和二十九年七月刊を使用いたしました。

明治三十六年　銅鑼汽笛船入る灣の霧深し

沙港經由十月十九日桑港着

明治三十七年　ロビン鳴く耕地並木や春淺し

アルビソ農園二句

明治三十八年　籃提げて松葉獨活剪る露涼し

明治三十九年　枯れ棕櫚の十丈高し秋の風

明治四十年　据風呂に栗の落花や山の宿

塗つて干すボート並ぶや長閑ある

1

明治四十年

日本の提灯ともせり避暑の家

筏繋ぐ岸に迫りて夏木立

明治四十一年

オレンヂの花匂ふ町や春の月

明治四十二年

焚火してオレンヂ摘めり春の霜

象に騎す緋衣の童女や春の風

春の潮揺れて大凧揚りけり

春日さす店三尺や靴直し

夢裡にきく人語に覚めつ春の雨

春泥に鋸屑敷けり材木屋

春寒く安売りの札に灯しけり

明治四十二年

温泉の山の灯見ゆる町や春の月

春の夜や女球突く日本街

命を酒に托す自暴や雉子の聲

春寒や風岸孤峭の人と爲り

鴉片に痩せしフランスの妓や暮の春

参(サンメナデン)坡市

鍛冶が戸に市吏の選擧や暖かき

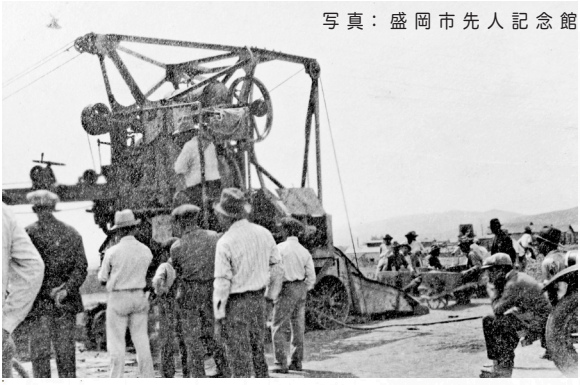
酒(メ)場(ア)

裸體畫も映つる鏡や春の蠅

支那料理店二句

饂飩食ふ女役者や春の宵

3



写真：盛岡市先人記念館

明治四十二年

客の閑笙吹く春の月夜かな

日本町に豆腐屋もある柳哉

神人を造る

掌上の土偶活きたり春の風

愁腸に酒灑ぐ夕墓を見る

葭切や雷雨の群疑虹にまた

汽車に鳴る踏切の鉦や夏木立

村鬮に奇才も出でず百日紅

機杼急ぐ窻の暮色や芥子の花

雨期を市に讀書の計や大根切る

明治四十二年

朝顔に薪割る斧の嵐かな

魚粕干すに弱き日影や桐一葉

山中の橋に銘ある紅葉かな

宿志蹉跎霜枯れトメト摘みてけり

拗ね騾馬に蹄鐵打てり霰散る

幻想に動く聖書やクリスマス

水仙に神話譯せん冬籠り

篆刻の字格も梅の槎牙に似て

學舍建つ議も長閑なり日本村

初雷や蟹行の書に句意絶てば

明治四十三年

明治四十三年

圖書館に春寒の灯や人も無く
海底の遺寶朧ろに探りけり
鹽田に汐滿てり歸雁影淡はく
女尊國の豪華の餘戲や薔薇祭
蝙蝠や酒魔戒しめど灯せば
登嶽偶成
樹に彫り入れぬ閑古鳥
雷遠し牛馬索捕の技練る野に
形枯木心冷灰と夏斷せり
草清水汲めり雌伏の一措大
遠人に離婦の情緒を飛ぶ螢

明治四十三年

左右飛湍の一路歸庵や山螢に

酒後の欄に阿嬌の綺語を飛ぶ螢

藪祠世無畏と額に墓出づる

火藥倒しの大樹に鋸す雲の峰

心太飢喫倦眠落々と

時感

腐鼠や爭ふとんび鴉に夕立ち去れ

火酒に燃ゆる目を欄前の夕立に

晝顔や山雨近きを噴煙に

礦山荷出す零れ硫黄や晝顔に

明治四十三年

畫顔に鈴蛇打てり測地して
醉へば默して灯睨むも秋隣ればか
簗歸りの炬火に澁づく栗も見て
此孤驛南すれば平沙秋暑く
靈不滅論草し夜寒の地下室に
稻妻や酒把つて怒潮聽く欄に
密入國の横ぎらん大河稻妻す
君が志行秋の水抜く奇峭とも
不離不即彼の美女美男踊りけり
陸近かむ霧の流材を舩脚に

明治四十三年

花野茶屋に將軍の歸耕逸話あり

我も探らん耶蘇祭の夜の搖寶樹

明治四十四年

馴鹿の雪車に初日の金山（ヤマ）指して

嶽の雪解も思ひ寢の驛雨溫くゝ

釀酒調べの稅吏と雪解川舟に

淸談の目を遣る雛落梅も稍や

電車道延び來しを柴扉梅散るゝ

舩揚げ荷宙吊る柱春寒く

並木折れを調べ來て晝餉鶯に

測量野帳に鶯の即事見る破顏

明治四十四年

行く雁を渡り稼ぎの蜜柑地に
桂庵にさすらふ異境雁名殘る
浚渫船霞めり浮洲鳥群れて
禁酒驛に隣る置娼市霞みけり
安息日を耕馬放てり草霞む
春の水鴛鴦の羽擦れに搖るゝ灯か
鬼才この艶話傳へし春の水
畑打が、雉子鳴きやうに地震知るも
永住論歸朝說移民畑打ちつ
爐塞ぐ日また長尻の布教師が

明治四十四年

藪所のトコロも雛の高坏に
春の宵耽讀す我れに電話しば
雜婚も流行るかに山笑ふ頃
水車の音整ふ里に燒野來て
蛙鳴く田園にかゝる球場の灯
菜の花に囚車歸れり晝餉時か
我を待てる渡舩と急ぎ柳堤を
家書にまた添ふ新愁や柳垂る
隣境の戰話に初夏の苺摘む
漬け菜撰る厨に初夏の濤見えて

明治四十四年

茣芝機の音に初夏の花圃暮れし

風薫る瓜生りや砂漉し水の味

炎天を街車待つ一本棕櫚の辻

就眠時の默禱を火蛾一つ居て

牛乳搾る蚊の夕を早り山燒くる

冷々と蕗長けて土窟ほの見ゆる

冷かに漁舸漕ぐ日座礁船も見つ

天の川死を賭せば成る脫舩を

電車違ひか下りし此處露の灯も稀な

露朝日の耕地來て犬猛けき戸に

明治四十四年

塔の十字架眩ぶしさを夕映蜻蛉散る

夕鶏頭に濕り加減の干し衣を

板木絶たれし祖の憤死の忌鶏頭に

菊を見る清愁や羈旅の痛飲裡

搾り牛乳提げつ折る菊の旭に濡れて

鳥威し銃も聞き過ぐ紅葉晴るゝ里

紅葉照る江を峭壁に電線が

明滅電燈に霰飛ぶ檠華市のどよみ

楫火照る壁の干蝮猫も見て

鮭場稼ぎもせし楫主か蝦夷語知る

明治四十四年

落葉宿繰り上げ機にとろろして
沖荒れを落葉風鑛爐觀ん鑛ヤ山マに
千鳥きく灯や櫻炭かんがりと

明治四十五年

牡蠣のことも調べ海苔浦　梅に過ぐ
潜ア水夫マと飲みて短夜を鮑採る島に
月に白沙蹈み來し宿に父の訃を

大正元年

寢際嗽ぐ露臺に月の街も瞰て
秋暑き夕映野を屠所に追ふ牛か
日本大字の招牌に家並み殘暑なる
天幕生活の秋の灯に憂き家書を裂く

大正元年

朝寒き教會を麵麭買ひにでつ

秋晴るゝ巨岩仰ぐ遊園舞踏場も

駝鳥染羽も撒く飛行機の秋晴れて

納屋修復の釘も買ひ野分跡を驢に

萬靈節の燈籠見て夜寒錢湯へ

隣寺讃美歌など悲調秋を病む我れに

書燈沈む秋雨を家鳩啼く隣

癲狂院の鐵窓に秋の遠き灯を

電車通勤の宿の月風車影花圃に

果樹に山居の月晴れて市の灯は霧に

大正元年

女賽振る煙草店に秋の蝶逸れて

問ふべかりし渡頭過ぎ岐路に秋の蝶

悼青木瓢齋翁客死

牡丹に送りし去年懐ふ蟲細る灯に

駒を馴らしに遣りし空ら厩蟲月夜

海外の蟲夜頃薄命を詠む君か

汽車に購ひし袖珍書一泊の蟲に讀む

瓦斯槽（ギャスタンク）の聳ゆ下貸家朝顔に

橄欖畑もいさゝ蟲の廬墓所見えて

暮雲看る酒後悲し煤け朝顔に

大正元年

無錢旅泊の或は秋蚊の捨て貨車に
街車終點の小春町珈琲店に鷲も
北海沖と聞く灯冴ゆ浮嚢積む船室に
冬日裏戸の牛乳壜に籠の鳥鳴かで
竹と見ゆ護謨林も冬日野の汽車に
貯水槽に添ふ葦や平沙冬日影
寒き句境に滿足の我へ鑛山株を
父の忌を今年は羈旅の水鳥に
大赦人にこの活計落葉宿朗ら
鷄犬も見えなくに白亜柳枯る

大正二年

送友

鵬志言はずも漫ろ春風の墨國行

馬政調査を種馬も得し歸航春風に

『參坡（サンペナデ）行』より七句

展ぶる新紙の聖影に初日まづ榮ゆる

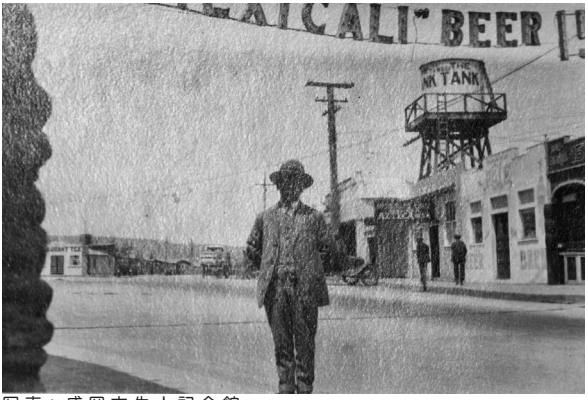
柳枯るゝ砂川に飛びつ浮く鳥が

膠灰山の霞めるに遊園近き酒家

橄欖林に春淺き鳥道は勾配を

搖實樹に似し飾り彈初めとなく

薔薇祭の翌の春寒をウトと過ぐ



写真：盛岡市先人記念館

大正二年

春寒く尚ほ灯す電車流れ來る

『長濱行（ロングビーチ）』より五句

彩らぬ凧寒し葡萄園の小舍に

枯蘆燒けしは昨日か東風の湫濁る

棕櫚の街端海開け霞む帆に岬に

電車の上を鷗飛ぶ東風の繪葉書屋

繫かる漁艇を餘寒波晝の月に拍つ

『セカモアパーク行』より六句

寺塔掠めて赤き凧遊ぶ二つ三つ

下車人に蝶縋つる芝を蹈みあへず

大正二年

若草山の放牛もテニス觀る楊に
柳絮散らす小鳥落つ淺瀬飛び石を
若草喰む牛の鈴聞ゆ語りゐて
救世軍の辻鼓樂春日黄に埃る

『イーグルロック行』より六句

襪を干す桃の宿金絲雀も飼ふて
アルハルハ畑の揚水車東風に羽搏つ鷲も
草山なだれの荒地鋤く桃に天幕して
ポペー咲き滿つ春日影受信函白く
喞筒井鳴らす葡萄園麗ら養鷄も
發車待つ間をロビン晴る靑麥の風に

丘を削りて建てし家々塗らぬ春寒き
連るゝ狗兒が尿せし水仙の春の霜
果樹霜害高いふ客に烏賊を包みつゝ
珈琲挽く音春さむく灯す未明(あけ)の店
鳩の音に覺む春の朝雜書枕頭に
棟に廣告の幻燈やぞめく春の夜を
理髪こむ待つ春の宵卓の尺八を
勞働すさびの手風琴春の夜を獨り
人頭稅吏も莞爾と來し春の雁晴れて
猶太(ユダ)人(ヤ)の祭に鯉賣るゝ初雷の午後

大正二年

若草山の放牛もテニス觀る楊に
柳絮散らす小鳥落つ淺瀬飛び石を
若草喰む牛の鈴聞ゆ語りゐて
救世軍の辻鼓樂春日黄に埃る

『イーグルロック行』より六句

襪を干す桃の宿金絲雀も飼ふて
アルハルハ畑の揚水車東風に羽搏つ鷲も
草山なだれの荒地鋤く桃に天幕して
ポペー咲き滿つ春日影受信函白く
喞筒井鳴らす葡萄園麗ら養鷄も
發車待つ間をロビン晴る青麥の風に

大正二年

春寒く尚ほ灯す電車流れ來る

『長濱行（ロングビーチ）』より五句

彩らぬ凧寒し葡萄園の小舍に

枯蘆燒けしは昨日か東風の湫濁る

棕櫚の街端海開け霞む帆に岬に

電車の上を鷗飛ぶ東風の繪葉書屋

繫かる漁艇を餘寒波晝の月に拍つ

『セカモアパーク行』より六句

寺塔掠めて赤き凧遊ぶ二つ三つ

下車人に蝶縋つる芝を蹈みあへず

大正二年

若草山の放牛もテニス觀る楊に
柳絮散らす小鳥落つ淺瀬飛び石を
若草喰む牛の鈴聞ゆ語りゐて
救世軍の辻鼓樂春日黄に埃る

『イーグルロック行』より六句

襪を干す桃の宿金絲雀も飼ふて
アルハルハ畑の揚水車東風に羽搏つ鵞も
草山なだれの荒地鋤く桃に天幕して
ポペー咲き滿つ春日影受信函白く
喞筒井鳴らす葡萄園麗ら養鷄も
發車待つ間をロビン晴る靑麥の風に

丘を削りて建てし家々塗らぬ春寒き
連るゝ狗兒が尿せし水仙の春の霜
果樹霜害高いふ客に烏賊を包みつゝ
珈琲挽く音春さむく灯す未明(あけ)の店
鳩の音に覺む春の朝雜書枕頭に
棟に廣告の幻燈やぞめく春の夜を
理髪こむ待つ春の宵卓の尺八を
勞働すさびの手風琴春の夜を獨り
人頭稅吏も莞爾と來し春の雁晴れて
猶太人(ユダヤ)の祭に鯉賣るゝ初雷の午後

大正二年

馬車に積み過ぐ鶯躁ぐに春の雨冷ややか

瓦斯會社の火焔染む猫の戀赫つと

朧ろ蜜柑の花の香や寢際汽笛遠う

『船卸しへ』より七句

建ちし儘の大ホテルあらは夏木透く

車窓ゆられてねむき頃夏の海濶ッと

海を瞰下ろす崖の欄花の覇王樹が

祖國島山滴らんこの海の果に

配す樹石も國振りな金魚噴泉に

青簾透き仰ぐ飛燕峭壁に

舞姫の空を飛ぶ鷗夏の海晴れて

サンゲーブル。オールドミッシヨンにて

薔薇の香荒ぶ樓壁に古鐘鳴らす勿と

歸朝する友へ

經緯何度の檣頭に夏のこの月を

瓦斯槽下を茂る小路の教會に

夏の朝の瞑想を隣家薪割りて

新樹しとゞ濡らす雨殘燈に鳩啼いて

君が雪駄の音と知る螢水亭に

鮓屋水打つ夕の灯に食後ポストまで

葡萄水あて秋近き羽蟲燈に觸れて

骸骨飾るも醫室振り夕立明りして

女劇女神の幻影を宿の蚊遣火に

歸る友の影薄き蚊火に茶もひえて

革命戰の國に居て大河泳ぎ晴る

簾青き樓に臥て繋かる艤艟を

天幕避暑の途を溪聲裡山燒くる

屆く新紙の汐濕り鷗避暑の戸に

藪苺に滲む夕日牧場牛鳴いて

心頭の一事解けぬ儘柳夏を垂る

晝寢過ごせし海樓に落暉眩ゆきを
棟の金字に旭を受けて街樹若葉せる
朝の虹を飛ぶ燕實梅雫して
辭職匆々移り來し藁家梅黃ばむ
蓮田一路の蟬澄む家稀れな郵便が
酒に死せんの自覺笑む百合白き夕

歸朝する一友へ

大陸離ろゝ新凉や句交淡かりし
割烹いきれす地窖口花屋秋暑く
首途秋立つ停車場に愛犬も來し

大正二年

園池輕舸の搖る冷やゝ波光鵝を斬りて
樂器調べも冷かな晴れを葬列に
しぶく蛇管の虹冷やゝ歩道洗ふ眼に
昇降機守る朝寒し檻に活く思ひ
對話夜寒き心事讀む託孤言はて來し
死骸出し口馬車待てり夜寒醫を訪へば
稽古新劇泣き型も艶な夜長三味
虹と透く調酒(さけ)の香を夜長舞蹈衣に
野分江かけて墓碑白き丘へ丘へ我を
芝生字植ゑの花白し月塔半に

大正二年

設計我に成る橋踏んで岳の霧晴れを

鳩か屋根蹈む音霧に刈らぬ箒木が

醉歸袖裡に憂き家書や銀河まざと冴ゆ

駝鳥園に秋の水湛ゆ羽染め場も

秋の水浴ぶ洲の鴉空を電線が

花野疎らに覇王樹も石に栗鼠走る

放牛の鬪へり花野濡るゝ旭に

車行噴火も遠見てし溫泉冷め扇置く

磨がく石碑へ顔映つる蟲に煙草せん

棕櫚に殘れる吊り床か蟲の月に訪へば

大正二年

疎ら何の灯を指す下車ぞ蟲の藪際に

瀑に臨めば死をそそる魔冷え蜩に

寢際イボ燒く藥壜も殘る蚊の卓に

茶受け煎餅の辻占も旅情鹿鳴くに

秣刈り積む野の匂ひ渡る鳥晴れて

落暉全市を浸す丘小鳥群れ渡る

雨後の朝照り不安さを渡る鳥に發つ

小鳥來る並木筋蹴りし紅茸が

酒後を一葉の散る風呂に暮れん虹も見て

夕日爐頭の煤染めて雨後の一葉落つ

大正二年

番茄青きに霧雨す朝出鶫の跟いて

柿の梢を微雨寒き家兎に笹刈りて

葉芋秀づる家へ傘に大雨迸しる日

鶫呼ぶ我家の柳散る夕を酒座辭して

罪はさりとも現責うたて散る柳

葡萄照る砂蜥蜴似し保護蟲も見つ

カヨテ夜々啼く山なだれ葡萄荒畑に

葡萄積み賣る馬車立てゝ過ぐる葬樂を

蜂屋白き石逕を菊に風す廬へ

野菊近道配る子のミルクいつも濃き

大正二年

桑港にて

歸朝壯んにせし埠より菊の茶園訪ふ
唇荒れに臙脂吳れし君と野菊來て
散歩かゝる懺悔聽く野菊夕影に

『蟲聽きに』より六句

車掌岐線に鐵鎖引く露の灯も疎ら
棕櫚の底蟇去れり霧雨の灯に
電車終点荒ぶ夜寒む球場藪近かに
酒肆を鎖せばか夜長人漂ふもなく
支那料理も客散りし天の川仰ぐ

二所に二人と別れ來て夜寒戸を鍵に

『菊人形の印象』より五句

饅提灯の灯影黄な菊に茶運ぶ女

菊の籬に袖觸るゝ庭下駄の音も

提灯ゆるゝ隙間風菊に雨冷えす

模造日本間に琴欲しと菊人形見つ

菊にしばらく埋れし心奏樂に

草の花にも神意說く尼か孤兒連れて

運河疏水を祝ぐ砲かとどろ秋草に

軍艦も彩どる州祭の埠頭秋晴れて

大正二年

浚渫船吐く潮寒し牡蠣を秋風に

煤煙曇る憂き空を歸市の秋風に

綿を積荷の歸航凪運河祝ぐ國を

日影すがれし草花に冬を待つ蜂が

鑵詰會社（キャナリー）にオリブ選る我の冬近かむ

冬近開墾の石顆やむ黒き小鳥來て

水を上りし鵜の寄るを芭蕉覆ふ楊に

故國忘るとなく草花を作りつゝ

ハアモサビーチ一句

海に夕映えす砂丘を灌ぐ草花に

大正二年

花環編み終ゆ頃灯る蟲に霧吹いて
驢背何地を指す旅客日短かの酒肆へ
岬の燈臺照る鷗蒲團干す漁舍に
灯消して蒲團に沈む時崩る亂堆書
轍跡照る來て森に羽搏つ水鳥を

サンピドロ港所見

潜航艇浮くに水鳥や蘇音機も鳴りて
舷頭日の出を鯨遠う深呼吸裡見つ
砂上廢舸に愁ひ凭る沖を鯨噴く
逝きし戀の影ほのと冬日薔薇染むに

大正二年

教會寄宿の冬薔薇に朝餉燒き麵麭を

賣家尙ほ住む冬薔薇に飛行機(ミシン)鳴り過ぐを

風邪に咳く背の夜の壁に亡父(ちゝ)の油繪が

猩々木を紅刷く日風邪に暖爐して

市の灯染む空凩に貨車の砂利守りて

ミツシヨン哩標の鐘も見て街車(カー)を凩に

疎雨光りて草花に寒き耶蘇祭を

四郎殿

大正三年一月九日

英太郎

（五千句の内から抜いた句）

◉逸蒼句稿の發行　紙燭會々員にして新傾向派の熱心家下山逸蒼氏は明治三十六年より大正二年に至る約十一ヶ年間の俳句三百余を集め逸蒼句稿と題し三十四頁の端麗なる小冊子を發行し友人知己に配附したりと

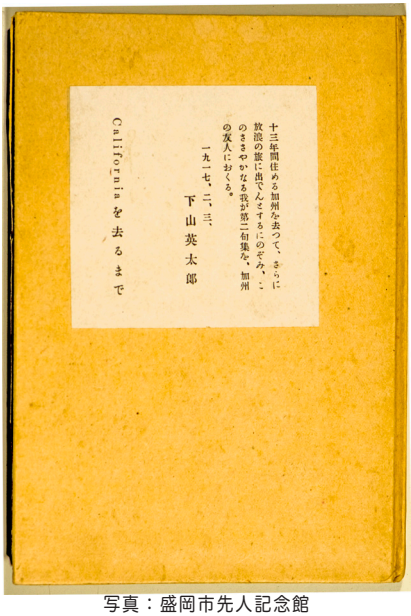
◉逸蒼句稿　本紙特別寄書家の一人なる下村逸蒼氏は今回明治卅六年より大正二年に亘る舊作中より抜句して印刷に附し逸蒼句稿と名づけて同好の士に配布したり

第二句集　下山　英太郎　句集

全７８頁

十三年住める加州を去って、さらに放浪の旅に出でんとするにのぞみ、このささやかなる我が第二句集を、加州の友人に送る。

一九一七、二、三、下山英太郎



写真：盛岡市先人記念館

Upland にて

自千九百十四年十月
至　同　十六年七月

友へ

露の如くころがりて果つる我とこそ
書ける手紙を悔い裂きてフラと出し花野
新涼の雲行くに青きレモン摘む
蝶の翼を栞に剪さむ夜長の灯
花野の昼の稲妻に君の幻ちぎるる
シャブルかたげて、柳散る火のごとき夕陽
ランタン灯ぼし行く、枯草の雨の息白ろし
タ焼くろずむ枯野よりふるひくる口笛よ
驢馬（ドンキー）駆って雲影げる冬野を引ッ越す

キャンプにて

一つ蟲居て炊事場の闇に鳴けり
天幕（テント）の灯暗らく我が影にむせぶ土の香
霰鳴り鳴りほの暗らむテントに木屑燃す

手紙をうけて

読むうち真赤に咲く花の幻に口づけぬ

としへー氏を訪ふて

留守に手紙をのこし来ぬ、ほろほろと星生む空

蜘蛛の巣の蝶の羽悲し、琴も聴かで去る
萎え飛ぶ蝶に夕日散り君は炊げるよ

テントにて

蟲の音せまりて灯ひそめし箱の焦ぐる匂ひ
ソと見よと投げこせし文、草花に濡れたり
悲しきいのちを、ちぎり合ふ唇のをののき燃ゆる
トランクあくれば樟脳の匂ふ雨夜なり
氷噛みつつ大きな星を見つめをる

「黒髪」をきく

君が琴唄の、灯に堪へず壁へ眼をそらす
霧に悲しく心とけ二人添ひ行けり
口笛さびしく闇を来ぬ、ブラシュ焼く麓の火
夕風呂浴びつつ蜘蛛の巣に触れし身ぶるひ
君が眸もいま、この月にそそぎうるめるよ
逢ふ期夢みて月光に流れ別るる雲か

テントにて

月の光りにさぐり飲む火酒のするどき味
雲れんれんと別れしがふたつとも消えたり

丘にて、二句

夕陽はほんのり二人行く影を夾竹桃へ
ひとつぼし、ひとつぼし、われらの愛のひめごとぼかす

レモン摘み散らすハラハラの露に青む空
君住む空に明け匂ふ月よすがれゆく
眉間をするどく射る星にフッと死にとなる

昇降機にて

君をかかえしたまゆらの鏡の影よ
この大雨に君も覚め居らむかと灯を見入る
野の孤つ家に移り来し今宵よりの灯よ
雨にしょげたる外套よ、逢はず帰るなり
石ころ嗅ぎ嗅ぎ憂き我について来る犬よ
かんがり四角にひとつ家の窓灯りをる
落葉さむざむ、泣き濡るる瞼を吸ひつつ
金星（ビィナス）、ひとつ輝やく荘厳の暮かな
減りゆく燈油を見つめては読みつづけたり
電線のうなり、枕に落つる霜夜なれ
枯草匂ふそこひなき闇に息つまる
ぢっと聴けば我が枕より湧く蟲の音なれ

闇をまっすぐ、まっすぐくる灯かな
オリーブ林をなだれ落つ黄な冬陽なり
小鳥行く空そこひなし、金色の落葉
レモン摘む我等を揺すぶって過ぐる汽車
別れて一人海の碧さにをののけり
かもめ、かもめ、死にきれず海に暮るるか

暴風雨の夜に、二句

みごもる人の有明けの灯さへ消えんかと
いたまし、いとし、眼とづればいとど痩せし影

夜しんしんと葉に積む雪をふくみたり
洗濯する旭に一面の若草露鳴らす
酒断って、酒断って、灰いろの雲肴をる
摘み摘みレモンに息かかり霜の雫する
ハッ手を見入る、わびしきは我が仕事服
放りある手鏡にはしる蜥蜴なり
君が眉よせ望みけむ、その雨雲押しくる
灰踏みし二三歩の靴あと消ゆる
レールつらぬく果てしなき夏草枯るる
樹下に忘れし仕事着（ジャムパ）をさぐる、星飛べり

枕に秘めし文読みかへす雨夜なり
新月見出せし青麦の中を行く
雁北し、地平線濃し
肌の手紙、ぬくもる春の霜を行く
借り部屋（ルーム）の鍵（キー）いぢり見る入日かな
春の街行く人絶えざれば瞳のうるむ
とざせる琴に侘び倚らむ煙むる春雨に
こぬ手紙、待つほどに花曇るなり
無事を念じて立つ我が影をあさる鳩

悲しき消息に接して、三句

ああ春ゆきぬ、ひとつぼしは砕けしか
風なく落つる病葉になげきの息する
青葉若葉、明るみのかぎりをとざす
こひぶみみな焼くほのほよりたつは白ろき鳩
こひぶみみな焼いて、心のみしかと抱きしむる
水飲んで霞む山山かへりみる
夕空蒼み極まりて金星（ビイナス）かがやく
病葉のひとひらが冷めたく帽をうつ
悲しき消息の、友の手をとり言葉絶ゆ
別れて帰へる眼に夏草の枯れ満つる

君が影なき鏡ににじむ灯を見もる
夜鶯（ナイチンゲール）はるか啼き硝子窓の霧

海はりつむるさ青さに胸せまる
酒場（バー）を出て、棒立ちに海の入日見る
黒ろき痰吐く働らきの夏草枯るる
真夜中の天地、じゃくまくと酒泌む
草もおのれも電車のあふり風くらふ
夕空落つる草むらの蛾にうたれ行く
真赤な花びら文より散りし胸さわぎ
手紙よみ行く、夕雲またく紅そめぬ
積み牧草（くさ）に倚り、夕星見居る
まざまざ語れる夢覚めし、霧雫きく
我が影白らみゆく残月に囀れり

三年住めるアツプランドを発ち
ポート、ロスアンゼルスへ

眼鏡ぬぐへど、夏峠霞む
いらいら本とぢ車窓の雲に君おもう

サンピドロ港にて

曇る海、見おろして枯草焼けり

ポート、ロスアンゼルス、
望洋館楼上にて三句

枕に肘つき暁けの白ら波見とれをる
窓かかぐれば涛、ふところへうねりよす
濤音の闇さぐり布団かさねたり

我がさすらいのパンツの鍵に海ひびく
海曇りやるせなく貝殻くだく

エコー、パークにて

水鳥くぐりし水の輪見入り君待てる
かもめのあしまで、しらなみほぐれひろがる
砂に書きし君が名さらい煙むる波

レドンド、ビーチに遊びて、二句

手をとりて、笑みしより海は輝けり
海の果、ふたり見つめてフと、もだす

サンピドロ港に大成丸を訪ふ、三句

日章旗の真下、ボートに過ぐる血のどよみ
呼笛ほろほろ散る、海原のかがやき

玻璃天井より鴎の聲よ茶菓に落つ

あはれかかれる舟もなし、ひたけぶる海
汐ぜり白ら白らはびこりて愁しどろなり
わだつみの、うろくづをあはれ、はかりにかくる
大濤の、煽りに曇る眼鏡なり
かぼそき指染め日盛りをあはれビンズ摘むか

電車より

影もやと、遠畑へ潤るむ眼を極はむ
うつつなく別れ来し夕波むせぶ
掌にひつきをるひとつの魚鱗がひかる
つかのま逢ひしその夕の二日月こそ
水平線の濃青にひたる枕なれ
灯にひらく手帳より砂こぼるる
はるかベニスの灯よりはるかなるこひびと

ロング、オーフに働きて、二句

霧吹きつくる、大喝舟に灯をしめす
埠のとつぱなに、鮪をあぐる夜霧捲く
夕雲ちぎれ、ばらばらに鴎飛ぶ

写真：盛岡市先人記念館

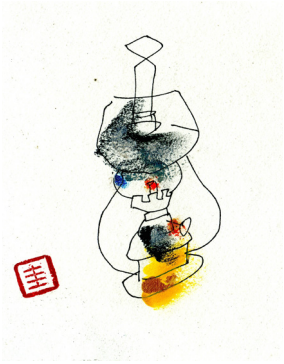
ボート塗る見て、また黙黙と渚行く
一二語かはせし、夕雲散るる
つぶらな藻つぶし、ひとつひとつの音をいたむ
鴎みだるる中に錨投げたり
本屋でて、あてどなく灯に消え行く
こはれ眼鏡、ポケットにひそむ秋なり
崖の断面見上げつつ歯をみがく
秋ひろがる舟舟白ろし
海のさ青き極みより釣船帰へる
渚の秋に堪へぬ鴎らかたまる
網にからめる海草の緑なるふるふ
雷あるる、うなばらのおおうねり
波音ととの日、夜の一時うつ
深夜ひらく歌集よりひとすぢの黒髪
海老とりの、島へ行く舟に聲かくる
ちらほらと舟舟灯もる夕のひとり
秋の夜の、濤の燐光に打たれ立つ

オツション、パークにて二句

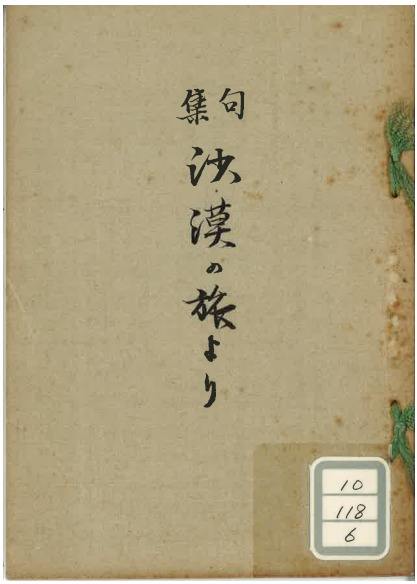
軍艦一艘の灯のみの秋の潮鳴る
秋の灯に、玉ころがしす、秋の灯に
柘榴噛み、巷の秋の灯に別かる
アザラシ沈みぬ、はるかの嶋の秋の雲
そろばんはじくまどさきにしぶく秋の海
やがて悲しう同車の昼の月見つむ
夾竹桃の影ふるふくちづけ
かしぐかまどの黒髪をあはれうつ落葉
君が文もて夜寒のともしハタと消す

十一月九日、さすらひの旅に出づ

もだす車窓の秋の山山そそり立つ
秋の灯の香の漂白のタマレー食ふ
我が行手の、秋の峰指せば消えんとす



画：近木 圭之介



写真：盛岡市先人記念館

句集 沙漠の旅より

全51頁

自　一九一六、一一
至　一九一八、五

アメリカにてうたへるこの第三句集を
ふるさとの病むひとへ

沙漠へ影曳き影曳き大能の御手に
秋の沙漠の昼の月白ろくたたずめり

我が列車コロラド河の鉄橋を過ぐ

暗らき河上の冬の月浴び立ちすくむ

以下アリゾナ州ユマにて

木枯に木枯に裂けし唇噛む夜
地下室へ朝の微光沁み啼くは鳩
黴臭き地下室に読むものもなく爪はさむ

コロラド河鉄橋　二句

血みどろの日輪くだつ音なき濁流
アアチの銘読むこの月明の渡り鳥

ユマ停車場前

インデアンの女ら細工物ひさぐ地べたの落葉
鳴るはキヤンリックの光塔の未明の鐘々
働き口なく今日も球場の暖炉に暮るる
ブレッド焼かむ薪木をはこぶ夕月明り
月蒼しドベハウスの崩れの我が影

月有明くる河上みの消ぬがの山々
渦ざわざわと月影を月影を巻き
兵舎の喇叭の谺(こだま)澄む砂丘の日没
いのち寂しくひとり倚る枯木の銀光
枯れ木に寄れば対岸の街のくるめくショーの灯
ペリカンおおらかに浮ぶまま尽ざる濁流
働き靴の紐しむる早天の鐘さやか
薪割るインデアンの斧の煽りの長髪ゆるる
春の雲ころがり白靴の身軽るさ
囲徒の墓の崖下の暗らき河幅
墓標へ聲かけ狂ほしくさまよう月夜
月蒼ざめし十字架の陰にまぎるる我影
この廃獄の闇を踏むちぎれし鉄鎖ぞ
ひんやりマッチが消えし闇黒をまさぐりつ
壁書読まんとマッチ擦るコンクリートの壁づら

カニバルの夜のストリートダンス　五句

春の月満ちダンスの渦へ爆せ出づ踊り子
楽隊円う巻き巻き踊る月夜の男女ら
ダンスの群衆へ紅の緑のリボンが流るる
月夜のダンスをさびしみ独り寄る電柱
月匂うまま来し砂丘のはるかの奏楽
形見の琴爪の銀箔のあえかな花びら

ロス、アンゼルスへ

まろ寝のクッションの夢冷かに消残る灯
焚火へだててこの涙見せじとす
砥石車の迄(さ)えかへる日陰の紅薔薇

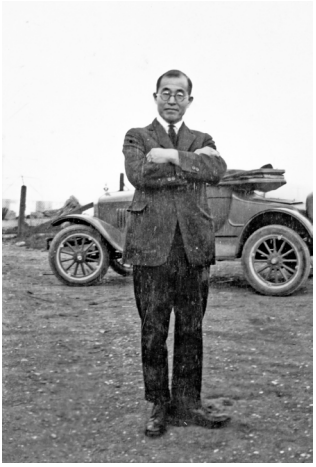
ユマへ帰る車上　二句

涙はらふて野は山はめさめ青みたり
かげらう沙漠のひとりの日輪
パイをのす掌のひらめきの囀絶えず
飛乗り者が下ろさるる鉄橋の柳の青み
電車も敷かれぬ街暮れて嘶く驢馬
花咲き花散り魂の烙印くすぶる

故国の異父妹より手紙をうけて　二句

さすらう兄は涙さへ涸れ汝が兄は
返事も書かず絵葉書すこし送れる

昼寝のタイムに洗濯せしシャツのはや乾き
大ストーブの燃えさし捨つる若葉の月夜
ストーブ掃除の灰かく二人ものいはず
灯をいっしんに示めす手へしたたる蛾涙
ゆあみの湯提ぐる春の月夜のバケツの湯気
囀づるままにかきまはすラードが溶けくる
同車五人の中のただ一人の日本人
みんなのネクタイがひるがへる青葉若葉風
アルフワルフワの緑かぎりなき涯（みずぎわ）の沙漠の雲
我らさけびて渡船よぶ枯木のこだま
ケイブル渡船の一文字に衝つ切る濁浪
この大河流れの汀の砂へ靴迹うづめ
みんなコートを脱ぎ背丈けの草のいきるる中



写真：盛岡市先人記念館

メキシコ人の天幕よりすすり泣く女の唄
藍青かがやくおお空の国境踏みきる
国境標ぞ白う曝れ立つ砂丘のうねり
沙漠のただ中の一軒のサルンの看板
グラッスをかち合せ「九月の朝（セプテンバーモーン）」の大書の下
カアドのまどいの煙草吹く半裸体の女ら
女の一人は沙漠の涯の煙を見つめ
噛み煙草をかみかみ賭場を去る男
ピアノにのしかかる大竪琴の暗らみ
男らころがす賽の目に積まれ崩るる銀貨
カアドの人散りしテイブルの蠅取紙なり
わが名をよんで氷もとむる女の肩息
言葉なく伏せしながき睫毛のふるえ
さしこみ狂ほしき日本著の黒髪
ほほえみて花束に埋めし頬のやつれ
カットンツリーの絮飛び光る別れの空

悼　一句

句会の吾らをコダックに撮りしかの夫人
淡紅いろのミルクセイキを飲む夜の孤独

音せぬ散歩の白靴へたそがれの色にじむ
暮の鐘落つる河づらの水鳥羽ばたき
覇王樹（サボテン）火と咲きメイデーの熱砂の白靴

乗合自動車にて　四句

雲々まどろむアルフワルフワの花のむらさき
ジプシイの天幕のかぎろへる覇王樹咲き
睫毛にそよ吹く二日の月のはてなき白砂
インデアンの女の黒髪なびく身をかはす

サンセット、パアクにて　三句

沙漠に日落つる奏楽堂のひとり
眼鏡をはじく日没の最後の一線
沙漠のから風こうこうと日没の髪を吹く

行く行く砂丘となり遥か河心のペリカン白ろき
鳩啼けば遠天に白雲湧けば
鳩ら羽叩く夕明りの白ろき日本めし
夏木の寝鶏へちらづける焚火のほのほ
そびゆる影みな蚊の夕空に黒ろき
蚊をはらう木戸の蔓草からまる

蚊いぶす馬糞の匂いの暗らき人あし
小鳥よ小鳥よ有明月に汝啼けば
アスフワルト路を踏む黒人らの素足の炎天
虫の音りんりん深夜の暑さにじりよる
落つる日輪ひとゆれ揺るる山河の輝き
今日の陽沈みし岩のいきれを攀づる
流るる木より木へ飛びあさる小鳥のいのち
夕紅すばらしき橋欄に凭（もた）る口笛
鉄橋のアアチの大文字より夜は白らむ
電光あざやかに真夜中の枕をつらぬき
いなづま照らすベツトの底の一つの鞄
砂濾しの泥臭き水を飲む深夜の電光
樹々は入陽の香を籠めて蝉鳴きやまず
日はメキシコの山へ落ちひょろ長き我が影
棉の実青みてメキシコに入らむたくらみ
悲しみのどん底の清水をむすばん

一日本人の西瓜畑を訪うて　五句

大地に打ち割り分たれし西瓜の味
西瓜の皮らうぜきしそそり立つ峰雲
雲の峰雲の峰山々はひれ伏しにけり

雲の峰かがやき鞠のごと掌に乗らむとす
マンドリン遥かより西瓜畑の夕月そよぐ
入陽の吐息ぞ遠天の雲を焼きつくす
おお空の寂光にうたれ腕をくむ
つばめつばめ汗みどろのもんどりうち
峰の光りへ光りへ歩るさびしき眸

コロラド河の鉄橋にて　四句

イムペリアル平原の一線沈み夕星捧ぐる
ペリカンつらなりかの夕星の涯てより帰る
旅によどみて爽かに帰るペリカン仰ぐか
緑の汀のこごる水鳥へ口笛投ぐる

再びロス、アンゼルスへ　三句

バアを出づれば煤煙匂う都会の夕空
秋の灯に灯にみたされぬうつろの歩み
逢はぬまま秋の陽からぶ沙漠へ帰らむ

ユマへ帰る車窓にて　一句

サンドイッチを咬む闇の荒野のどよみ
我は我たりこの心を秋天にとぎすます
水鳥の聲たそがるる橋欄の鉄の冷
対岸の放牛の鈴音冴えてねむれぬ夜
遥か沙漠へ消え去る汽車の一縷の黒煙
山河を指し童と語る丘の秋の晴
山を河をつくりしは誰と問う童の瞳

ユマを去らんとして　三句

さらば山河よ水鳥よとはに輝かに
逐へど逐へど列車まで随き来しなむぢ
別離の涙を畜生に流す有明月夜

ロス、アンゼルス帝国ホテルの一室にて　四句

病骨疼づくたび歯を噛み偲ぶ闇の息
白ろき天井のしめやかな外光にみとらるる
熱の悪夢の汗しとと覚めし遠き三味
暁の鐘々糊匂う白ろき枕へ落つる

セントラル、パアクにて　三句

都会の空を支え立つ秋の緑樹のきおい
噴泉盤の灯の灯のしぶく瞳のうるみ

このおお空をきりこまざいて聳(そび)ゆる都市
煤煙うずまく都会の底の悩みの生活
暮れて灯れば食事に行かんベルトを締め
市街のどよみにもまれ飛ぶ一つの黄な蝶

肺病院に病友を訪う　三句

電車終点より草枯るる丘となりゆく
螽斯(きりぎりす)らうちうつ枯草の薄日の光
薬の匂うスピトーンへ痰落しては語りつぐ

秋晴るゝ日　四句

ついついと三つの飛行機の縫いゆく秋空
飛行機の上の青空のそこいもしれず
飛行機飛行機わらんべとなって仰ぐか
三つの飛行機ぞ青空の青みに溶け去り

丘と海の思い出　九句

夕星匂いほのかに見合う瞳のえまい
うつむいてほつれ髪をかく孤つの明星
遠街の灯の射りかへす頬のほめき
くちつけつなかはりそ君はくちつけつ
砂にまみれし手を手をにぎるほほえみ
はかなきえにしのふたりのまえのうなばら
このまま海に死ぬも悔なき瞳を交わす
鴎ら影を擦る砂のゑましき昼餉
ふたりの瞳に白ら波映つるせんなさ

歯をみがくままふくらむ菊を見おろす三階
コスモス活ければ自動楽器のしらべに揺れ
都会のどん底の寂しさにつちかういのち

セントラル、パアクにて　4句

はらはら柳散り一列のベンチの人ら
女の女の衣透く膚を打つ木の葉
噴水塔より噴きあげし新月とこそ
ひそかに会いしそのかみのベンチの落葉

酒場にて　一句

フリーランチのセロリ裂き咬む孤独の夕
葉猩々(ポインセチア)紅らむ外套の襟を立て

灯粧ふ都会のかの紅ゐの霧空
トンネル口の朝寒に叫ぶ新聞売子ら

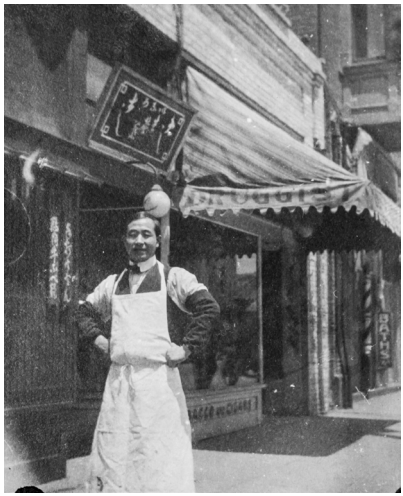
ポート、ロス、アンゼルスへ来て　九句

波はきそうて吾を抱かんと鳴り寄する
白ら波白ら波久遠の愛をうちやまず
われらの枕をひたせし水平線ぞまざまざ
張りつめしこの海をべりべり裂いて大船
われらの恋を葬りしこの海の青さは
狂える波のしぶきに濡れし二人のむかし
長い長い桟橋の思出を消すかの霧まく

旧居望洋館前

さびれし漁村の郵箱に黒ろ黒ろと我が名
霧に埋れて甲斐なく鳴りに鳴る海ぞ
枯木すくすく立つ崖を見上げ爪切る夕
落ちぎわの冬の陽へ爪屑を吹きつくる
あさる小鳩のせわしき顎のるりいろ
ニックル投げて靴みがかするまともの朝日
三十六鱗ひとすぢにとおり悲しき鯉

パブリックマーケット内の魚店をあずかれる頃



写真：盛岡市先人記念館

秋ひきしまり溌溂たる鯉を割く
生身の鯉の鱗（こけ）を逆か扱く手を憎め
ばらばら生身の鯉のうろこが爆ぜ光る
鯉の眼玉ぞまざまざ生きて動かぬ
正覚坊（アオウミガメ）の動く甲羅を叩きし掌
さすらう旅の白雲の響き甲羅
クリスマスの飾せし昼の電灯にもつるる蝿
行きずりの屋内噴泉にてみかはす瞳
柱鏡へ二人映りしほほえみよ

クリスマスの夜に　三句

人形の包みを提げ帰る夕べのトンネル
人形は日本の女の児胸押せばひいひい泣き
宿の児へやる人形をそっと泣かし見る

夜中の二時頃柿喰いつれてくぐりしトンネル
酒醒めぎはのトンネルの苔の雫落ち

歳旦　三句

海に沙漠にてびかれ受けし試煉の鞭
鐘鳴り鳴りおお空の緑したたらす
汝と千万里を隔つ思いの今年の初空

旅費を借らむと行く夜の暗らき場末の落葉

ロス、アンゼルスを去って　二句

日没の我がステイジぞ冬木をすれずれ
都市は華やかに灯らむ頃の枯野のステイジ

アップランドの第一夜　二句

寝て読む本を紙魚(しみ)走り電燈暗うなる
かしわ蒲団の盗汗(ねあせ)をさする夜の悩み
落葉にまぎるるさびしさ恋のさめぎは
恋さめの坩堝(るつぼ)の灰の白ろき蝶
春の陽いただき働かんアヒナパンツ(インディゴジーンズ)の香
黒ろ鳥はらはら電線を起つ枯野の匂い
日輪花に触れ破れ自転車を押しもどる
春の夜更けの濃きココアをすごせしのばせ
労働かえりのジヤムパ振へばとろくる落日
オレンヂの花曇りほのぼのと啼く野鳩
暮るる峰まともに立ち尽す一つの落葉

大雪晴れし後

銀の峰銀の雲この驚きに萌ゆらむ麦
暁星うすれゆく畑にオレンヂをむく匂

キヤムプ生活より　四句

昼の蟲鳴く雑草の花へ散る理髪
破れ靴つくろう雁北へ北へ消ゆ
霰うつ夜の寝巻に結ぶ博多帯の細さ
乳飲児の掌にキスせし淡き夢なりき

雁逆巻いて今か越す絶嶺の白ら雪
花びら落ちし文殻を裂きまどい
言いそびれ別れ来し星空となり
黒髪そよぐ夕虹匂い消えむとす
山を品する君が言葉を織りこんで霞
春濃き一と日をただにつつましく別れ
日落つる方へ君が自動車ひたいそぐ
会うて別れて春の日はうつろに暮るる
雨のアケシヤうなだるる路を行くことか

君の帰朝に　一句

骨壷いだいて春冴ゆる雁を聴くらむか

今日もレモンを摘み暮れしひとつ星しんと
春の月夜の草笛に吹き裂くまぼろし
見まもる地震の亡父の画像が揺れる
孤独をつらぬき華やかな大日輪とこそ
日日の日の出新しき力ぞ霊ぞ

友の旅出を送りて

行け天の一方のさくらんぼ紅きまぼろしへ

アップランドを去らんとして　四句

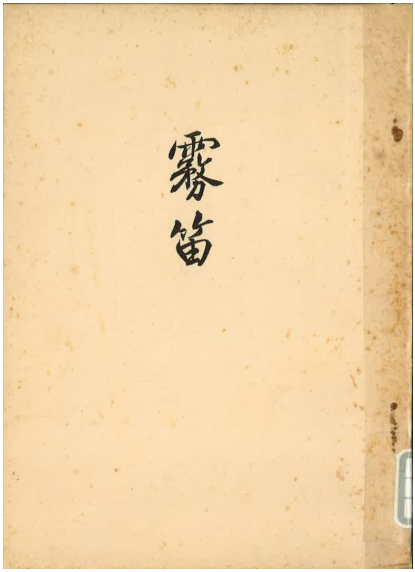
ナイトホーク飛び透きしカアテンより暮れそむる
虫なきすましてココアの銀のスプーンに触れず
春の日輪翔けりゆく旅出のよろこび
旅靴むすんで祈るべきなく

ロス、アンゼルスに出でて　三句

一期の別れのテレホーンをしどろに切つて
ふたたびききえぬその聲をいのちに鏤(ちりば)め
友らと尽せしさくらんぼの滲む手の握手

一九一八、五月二十二日サクラメントに向う車中　三句

ソルトピーナツを咬む窓の遠き山脈移つる
トンネル衝きぬけし青葉青葉のどよみ
青葉青葉の渦巻く中を我が列車



写真：盛岡市先人記念館

第四句集　霧笛

全１３０頁

自　一九一八年

至　一九二三年

第四句集をアメリカに於ける五年間の
わが生活の肉碑として

春の水かさの渡船よぶ向うはメキシコ
オレンヂの花匂う月夜の噴井あふるる
うたえば春の山よりやまびこ
ひそかに会う部屋の花薔薇のいきれ
海を前にして砂握り握り語ること
ふたりの視線の春の海の紅きみをつくし
旅に果てゆくジプシーの風光る耳環
ぐろりを荒野と化すべくいらつ薊（アザミ）のほのほ
野苺あされる児ら去れば地平へ陽は急ぐ
椰子の月夜のウカレレに合わす黒人の唄
お茶のみんなへ葡萄棚透く緑の陽ざし
ジプシーの手相観がけだるげな西陽の赤幕
影のよに賭博場へ蝙蝠にうたれて消ゆる
彼女が人待つ裏木戸のでつかいポンキン
羊の群れへ縞織つて顫（ふる）える樹漏れ陽
啄木鳥木つつくこの不孝者の胸つつく
君がテントの焚火めざして踏む夜露
廃墟の秋晴るる石の柱を撫でて

絶頂の秋空に透かしては拭くめがね
露の道にて遠うくから彼女のほほえみ
秋の入陽はしんと並む蒲の穂を炎して
大露の葡萄摘むみんな素晴らしい元気
嵐のあとの山鳩の聲秋をとぎすます
ポプラの絮(わたげ)飛ぶ旅空のいなづま白く
月夜あやしく死をそそるレールの光り
六頭チームで鋤きおこす広ら野の太陽
雪風に逆らつて働く耕馬のたてがみ
みんなであつめた焚きもので焚く火のきおい
テントの孤つ灯冴えきればコヨーテの遠吠
荒れ野の羊の霜おくちぢれ毛
土がめざむる暁の馬蹄遥かより

オブーンにて

ベツドに敷きし麦藁匂う夜夜の夢
夕星光りそむればくぐる酒場のドア
蝙蝠大きな山駅のバアを飲みまわる
鳩啼くこだまの渓川の石透きとおる

サクラメント河　河下モにて

賭博者警告のビラの赤インキよ蝿よ
河岸の乱杭に今日も陽落ちて働口なく
酔いしれてひっ裂きしシャツの袖縫わす
月夜のタンクの風見車の風もなく
花合せたけなわな防風樹の夜風の響(どよみ)
鐘も鳴らなく島暮れて砂に滅入る靴
麦の穂そろい河船過ぐるひたひた波
明星が白ろい蚊帳透夜明けのめざましき
一ト夜樹に吊りし水嚢の河水冷え

サクラメントにて

アルフワベットの街街の並樹芽ぶくころ
月夜の若葉しんと更けタマレの触れごえ
ふたりの影を映つしては流るる河みづ
今宵も灯消してしょんぼり白き露台のひと
河蒸気遡ぼるどよみを掠めつばくら
キャンプの灯ともる人参の花白ろく
蛙鳴き冴えジプシーの天幕の小さき灯
浚渫船が泥あげて暮れゆく河づら

河船ともづなを解く薔薇色の夕空
いま発つ船にきらめきて夕陽の指環
河蒸気の赤き歯車も入陽も狂い
夕べとなれば頬紅さし踊り場へ踊り子
無花果熟れゆくだらしなきあけくれ
夏草わけ行くたそがれの星匂い初む
灯もなきキャンプの虫の音に疲れ何おもふ
昼の三味線しめやかな葉藤のそよぎ
おんなと夜更けの遠火事眺めわかるる
ブランケ捲いては流れゆく友よ夏雲よ
アークライトの蛾の舞う影を踏む深夜
並樹路暗らく明るく語りゆく月夜
蟲鳴く月夜の人妻のうなじの白ろさ
バアを出でては星空の夏木に倚りつつ
酔いしれもどる霧の夜の河船の汽笛

禁酒令布かる

自動ピアノはしやぎぬく今宵かぎりの酒場
露台にて星空に透かすグラスのウイスキ
まざまざ骨壷の彼女を見んとは
この葉柳を分け入りし酒場は鎖され
働らきにゆく暁のオバホールより立つ秋か
地下室の支那めしで支那酒の暗らい灯
汐の音追うて河筋のぼる鴎の秋晴
エルム落葉する雨の酒場あとの鏡

オロビルにて

野罌粟（ケシ）よこの野のレールの中に咲かむとす
身がるなひとりものの春の山山まろし
鳴りやまぬまに懺悔せよとの祈りの鐘
残月ほそく霜の地べたの斧光る
きようも一つぶ一つぶのオリーブ搾り暮れ
砂金廃坑の荒ら石を踏む冬陽のわが影
児を抱きあげて枯野の涯ての夕紅見せ
遠い灯が灯がまばたき枯野
我等がクリスマスの枯山枯野
寒月しんしんこの荒ら石野吹き曝らす
本のページを切る高原の朝日の匂
ポピー摘み摘み児とうたいつれゆく霞
孤つ家で薪挽くのみの冬野のもの音

枯草いろの仕事着で枯草に触れゆく
土工ら賭けるレールの中の地べたの銀貨
枯野に停まるギャング貨車の一つ灯
レールまっすぐとおるまはての雪山
支那町の落葉焼く香の昼月からぶる
人いきれするシーコ場の熱茶のあじ

テーブルマウンテーン遠望

いただきまっ平らな一線の冬晴れ
遠きチョーチの鐘とどく牛の角光る
凍る月夜の野の遥かより牛の鈴
夜学がえりをオレヂの葉笛吹き少年
酒場あとのドアドアの鏡の冬空
メドラークはればれと啼く緑野より太陽

モントレーにて

桟橋の突っ端きの大なる朝日
朝晴れのかぎりなき漁船の腹うつ波
海の歎きの千切れては啼く鴎となり
酒場のでっかい看板のまともの荒ら海

デルモントホテル二句

湖中のスワン羽ばたける春浅きこだま
海鳴りほのかな欝林の松毬落つる

のんびり青き水平線にむかって昼餉
荒ら海のしぶきを浴びて故国をわするる
夜のおほわたよりおしよせて身の毛に泌むもの

ハミルトンにて

敏き鐘鈍き鐘おちこちに鳴りキャンプの朝餉
メドラーク啼く広ら野どこまでもつづく電線
児ら大きな乳牛牽きゆくのみのさびれ駅
スパニシュ少女の春寒き雨にうたう唄
この烈風に逆らってホー打つおお汗
北風すさんでホー撥ねかえる荒ら畑打ちゆく
日照り雨する菜の花の薪割るこだま
暁ちかく雁帰る聲の枕の白ろさ
雁北すほそぼそとつらなる影
ホー打ちやめて雁を仰げば汗泌むまなこ
屋根にかぶさる枯れ枝軋しむ深夜のともし火

鑢(やすり)するホーの刃の粉が広野にこぼるる
広野にはたらく我等の運命の星星よ
遥かの峰の雪白きこの心を語らん
草木のこらず青みしんけんに働らく吾ら
一日の労働靴をごつとり脱ぎすて
薔薇咲く隣りのスパニシユ少女のことば
薔薇咲く垣ごし少女へやりし日本の絵はがき
飲み水汲みに果樹園を縫いゆく口笛
青い鳥青い鳥口笛吹けば影消え
畑打つては大空の光泌む昼めし
野に働いて野の涯てへ眼極め昼餉す
夕陽たつぷりふくむ菜の花分けて帰るなり
一羽の鴉啼き去つてキヤンプの湯が沸く
暮れゆくキャンプの忍冬匂い誰やら尺八
夕雲おどろな姿よそほい翔ぶ広野
大樹吼えかわす広野の黒き夜嵐
この自然樹ら野嵐にたけび幾とせ
天つ日のもとに馬の仔生れ嘶くか
しぼりたてのミルク提げ夏野ゆく児の素足
虹噴きあげる緑野の涯なき明るさ

夕立つ緑野の虹くぐり鞭うつ二輪車
虹くづをれし緑野の遥かの風ザ見
ホーで打ち切るホーの刃にからまる昼顔
牛馬の蹄の痕より乱れ咲く野花
よろこび鴉ころころと青空あらわれ
楸(ひさぎ)咲き盛かる炎天の水ばかり飲み
山鳩ほうほうと啼けば吾を待つひとりの祖母よ
雨にづぶ濡れの労働着干す暖炉のいきれ
我が肌着らの大雨にうたれ懸るさま
広ら野のキャンプの夜嵐に唄う蓄音機
牛らいづこへ野はからっぽな緑の風
炎天の錠あけて入る部屋にちらつく蜥蜴
雲の峰峰つんざくる広ら野に働らき
ホー打つ身に添い野鴉のこの不吉啼き
夏草猛けきパイプ捩ぢ貪り飲む水
朝朝あら野の大空仰ぐ無言の祈り
羊ら遠鳴いて咽(むせ)ばしく匂うハニーサックル
羊あつむる角笛の夕虹明り
働らき帰る路よぎる蛇をよぎらする
兎逸がせし犬が舌垂れ野の入陽

タイムきっちり昼寝覚む並樹の影伸び
蟲の音しんしん真夏の広ら野枯れゆくか
異国の夏野枯れつくし蛇のみつやめく
径はひとすぢ仄白ろく驢馬鳴くたそがれ
生きもののけはいしてたわたわ果樹の揺る月夜

一九二〇・七・八　白昼左脚を跛す

果樹の根を掘るシヤブルふみつつ倒れし炎天

一九二〇・七・十一　入院以後サクラメントにて

見舞いの花がひつそりみとる枕辺
氷嚢温るめど看護婦よぶにためらう夜なか
看護婦よぶベル一つ押す深夜のひびき
一人の友の訪いくるる時刻の靴音
友がもとめてきてくれし松葉杖つく身のはて
とんぼは流るる我が白き寝台の空より
電燈の紙かかげ臨終をのぞくよ看護婦
人間の息絶えし刹那のじやくまく
たつた一つの扇風機うなる蒸し暑さ
このまま死なば死ぬべく魔睡台に脚のばす
黒ろい息吹き毒瓦斯が顔へかかる時
無辺の闇へ息詰み堕つる頭の重さ
魔薬醒め際むかついて噛む氷のかけら
隻(せき)脚かためたセメントに蟲沁む深夜

一九二〇、九、十三　サクラメント河を下りサンフランシスコまで

一人の友に見送られ河船揺るるまま
松葉杖に依り仰ぎ見る星空はこごし
夜霧に立ち濡るる我が外套の長さぞ
深夜の灯ともせば松葉杖よ影つくる
行手ただまんまと黒ろき潮の香
はるかの灯の灯の珠をつらぬる我が涙
船にすれずれまつ黒ろな島が流れ去る

サクラメントへ還り更に十月八日汽車にてサンフランシスコへ出るまで

やす宿に病む枕辺の秋空より三味線
刈る髪さらさら白ろき病衣の肩に落ち
アメリカへ来て足なえとなりベツトの蠅うつ

さびしさきわまり灯ともせばその灯もさびし
秋雲るこの行を見送つてくださる一人
枯野に散らばる羊ゆびさし叫ぶ児よ
丘の古塔の十字架の遥かの夕波
はやシアターに灯が入りて海は暮れきらず
松葉杖つき伴れられて秋の夜の渡船

一九二〇、一〇、八　夜サンフランシスコ着以後

夜のうそ寒い階段でタクシー賃出す
瓦斯の灯蒼くテーブルの葡萄に顫(ふ)るへ
松葉杖でゆくトイレットの豆つぶほどの灯
瓦斯の灯暗らむ天井仰ぎまじまじ人待つ
夜光ウワツチの時間よむ枕の雨音
咳けばベツトの松葉杖たおれ明けがた
運命を待つ朝のしじまを訪う鐘

一九二〇、一〇、九　救世軍療養所に入る

ほつかり明るくまこと救われし
病み臥す窓より丘の入陽の十字架黒ろく
丘の十字架ちりばめて夕紅ひろがる

ねむれぬひとりの有明け月夜
月よ深夜の窓より仰ぐ病者を照らせ
窓のガラスに息かけて書く死の字の月光
一人が肺病院へ移されしその夜の秋雨
雨悩ましく消毒薬は燻りやまず
消毒薬の煙を沁めるベツドの雨夜
街燈の灯影さす三階の闇にて風邪咳
病者ら枕す秋空をどよもす飛行機
天津雁ゆく聲聲の祈りをつらね
昼の秋雨聴きつれてまどろむ病者ら

写真：盛岡市先人記念館

灯消したベツトのみんなで賛美歌
ざんげ身柱をはしるまま黙祷
靴音は街燈消して消えゆく靴音
かわりがわり読む新聞がほのぼの明くる
哀楽遥かより断え続き灰いろの柩車
葬列つらぬき淵黙の寒さが流るる
一本の手紙も来ずなりし寒夜の星星

興十郎来訪

悲観するなという友に笑つて見せて
椅子寄せ病者ら一つの窓の冬陽分け
病人の寝て読む本が暗らみて時雨るる
一つの林檎をたんねんにむく病者の夜
病人のミルク煮る冬の夜の雨匂い
紐ひけば小さき灯ともり音なく看護婦
冬雨じとじと病む身の髪のび
冬の朝餉の一人一人の黙祷
ちょんちょん雀が一つ来て松葉杖のもと
灯消したあとで病者ら語るてんでんの運命
月よ素通り枕辺は暗らみに還へる

ロビンあされる赤い胸毛の朝日
松葉杖つく我が影に凧の影もつれ
枕辺青白う水仙の仄明け
白ろきカーテンをへだつる海のあけぼの
鐘鳴る鐘楼の枯蔦の紅き芽のふるえ
松葉杖つきちかづけばすいすい水鳥
椅子によせおく松葉杖へとどきし月光
深夜の月照るこのベツドの白さは
赤い屋根より春寒きタマルパイの峻嶺
封じた手紙をずたずたに裂く嵐の夜
街燈消してゆくあとに渦巻く暁闇
虹の輪はみ出て都会の建物
夏海白らめば岩岩の祈るたたずまい
薊咲く烈日の我が松葉杖の熱汗
きぬぎぬのキス投ぐる窓の蔦若葉
満月の深夜の白雲が裂かるる海風
炎天の高屋根を塗りつめて輝やく男
でむしたゆまず明方の青芒まで
夏の銀河のいと淡く祈れるけはい
いがしき薊へとまらんとしては蝶よ

夏山行の少女らが男装の脚絆緊め
カリホルニアポピー萎みゆく夕餉のベル
うつろの殻負いかたつむりの一途さ
くちなはとぐろ巻く天竺牡丹（ダリア）の狂乱
高岩洗える潮が白ろくひからぶ残暑
いちばんとり鳴くレールのほそいほそい月
日没の波匂い暗らやみゆく岩かげ
今日の陽とこしえに落ち水平一線
菫いろに海暮れて引汐の砂しまる
小春の海の誘惑の汐引く暮れぎわ
電車線よぎる猫の足冷やかな真夜なか
真夜の銀河冴え赤い帽子のおんな
キャベヂワゴンの馬逞しく息する霧暁
しめじめガラス窓濡らす時雨のいろつや
うらぶれはてて冬雲のつんざけ飛ぶさま
友よ娶（めと）りにふるさとへさむざむ波路
焚火のまとゐの血がかよいあう
冬の陽うつろに輝き白し我が息
病人の咳もやみ月明りしてしぐるる
鴨らもぐつた水の輪と輪がぶつかる

すべてを呪うきちがいの木の芽時の曇り
しだれ柳のいまめざめたるそよぎぶり
黒人等うららかに弾き唄いとろけあい
神をたたえてうららかな光の子となる
草噛む牛がすべりゆく柩車を視つめ
最後の祈りの一握の土が落さるる
小鳥よ囀づるその嘴ではこべる巣藁
灯一つこぼれぬ闇底に匂える草花
虫澄む闇にぢつと佇つけはいの煙草火
初秋の白ろい海鳥を伴う出船
秋晴るる海を見て日本をひた恋うおんな
ほろり一つの夕星の愛ふるえ初む
君等に松葉杖のうしろ影見せ別るるよ
秋の夜空のひんやりふるさとへつづくか
晨星するどく直角の建物を射て
寒夜の魚のあら煮がこごりつける皿
拭えば冬晴のわが松葉杖のつく
賛美歌のコーラスととのう夜霧の深さ
欧州移民の貧しい児らの砂遊び
蝶よ冬晴の光る命を惜しみ

すたすた急ぐ点灯夫の夕霧
星明りに病者が祈る一つの窓よ
病室の壁すべり三角に冬陽がのびる
蔦の葉みな落ちし壁肌の月のいろ
波の底よりよみがえり家路さす漁船
鴎ら全身をかがやかしあらそうえもの
焚火くわつと炎え聖書の細字あざやかな
燃やしつくせし文からも石炭からも白し
稲妻しばしばする宵のちまたの伝道
永劫もどらぬ時計の針の鋭きとがり
寒き海見せ街中を羽ばたく鴎ら
船乗りよ異国の暖炉にかざせし大きな手
たんぽぽ明るく崖下の寒き海しぶく
海は冬の陽冴え絶壁の影を湛へ
崖の海風のわが松葉杖ほそし
まつ黒ろき鬱屈の石炭が噴くほのほ
静かに祈る朝朝の屋根の霜かがやく
朝の焚火の雪ちらちらす聖書の一章
セロ弾き悩ましく長髪を掻きあげては弾く
ほそいほそい電燈の針金炎えて時雨るる

虹たつ荒磯の貝殻の濡れいろ
黒ろき大地の黙祷のぞくぞく草萌え
鶴が檻より青天を恋へるこえかな
天にうつたう鶴を聴くたましいうるみ
おのがとぼせし街燈の一つ一つを消しゆく
夜の枕辺のポピーみなつつましくしぼみ
有明月冴え鉛いろにしづもる都市
こんじきの野芥子咲く中の孤独なかせ杖
枕辺の花薫るはるけき明星
いまは白ら波散るのみのなぎさの記念碑
星星移るままやすらかな眠りに落つる
たんぽぽこごり咲く鐘のこがねの音いろ
朝日をゆさぶりゆさぶつて一人のぶらんこ
深夜の星に統べらるる都会のしじま
おのおの聖書を繰る前のチューリップのふくらみ
まづ我が眼鏡へ日の出の閃光
日の出の光りがこのでむしの角にまで
石炭ちろちろ春寒き夜の聖書のつどい
銀の十字架重もたげな尼たちの若葉みち

一九二二・五・二三新世界新聞社へ移る

今日から働らくよろこびの風薫るなり
地下室の活字の層にさむざむ対する
壁の額まで月さしていよいよねむれぬ
別れてひとあしひとあしとへだたる夜霧
ダンスの楽からみ短夜のつきぬ足ずり
炎天の瓜摘むときしのち消息なく
夜業終えては腕拱み星を仰ぐくせ
ダリア黒ずみ暮るる踊り子のみじまいどき
波音ほの白く寝息にかよい
都市の灯染めて飛ぶ霧のゆくへ
ダリア咲きみだれ黒猫のうづくまるまなこ
真夏の霧に毛ごろもの肩すぼめ女は
建物きしり建ち早り雲ゆきつまる
岩ばかりの島に照るは監獄の窓
渚の温くき朽ち舟に憩ましてもらい
砂に曳くわが影も水平線もさびし
馬は尾をふり白ら波に四つ脚うたせ
児供あやしに吹く笛がしだいに沈んで
白ら波ほのかに霧の底より聲あわせ
波はよせくるまに白ろき手をつなぎ
君も吾も亡きあともこの海の唄のみは
おのが弾ずるメロデーに炎え炎えうたう
手鏡見つめて潮鳴る渡船の女は
荒磯の貝がらへ廻り灯台の灯がくる
貝殻ひろはれ秋の灯のもとにつやつや
昼顔に昼顔いろの蝶とぶ荒ら磯
残る蚊が鳴く夜の壁きつ立ち
島監獄の秋霞み鶏のこえごえ
秋晴るるしよせんはひとりびとりのこころ
また会うまでの歌やめば秋晴の船うごく
天の川かたむくにひとりぼちゆく酔いどれ
雁ゆく旅空の歌姫はうたいつつ
監獄白ろきかの島の岩根の貝るい
秋晴るるちまたにて黒人は靴をみがきつめ
さすらいはてて夜の海の霧笛きく身
明星ぽつり潤み暁霧の切れま
夜霧はちまたのさまよえるものに渦まき
イルミネーション消えゆけば波明りのわれら

焚火に背中あぶり立つ闇濃きうなばら

送別

霧つまるわたなかの独りをあぢはへ
太陽燻ぶり陰鬱な都会の霜晴
のら犬に嗅ぎよらる松葉杖つく身の
春浅き小島澄み尼たちの逍遥
十字架ゆがめる墓土にひそひそ草萌え
しいたげられた木木の芽が吹かずにどうする
がつしりした握手して木木の芽晴るる
わが松葉杖つく影の大地が陽炎ひ
星が流れて春の夜の渡船のしら波
アカシアかぶさる星闇の匂いを仰ぐか
春の太陽ぢかに亨け移民らねづよく
ターキー総身を怒らして鳴くまま陽炎
メドラークうたう朗らかな馬耕の汗ばみ
けだるき背伸びの骨鳴つて晩春の雲ゆく
墓地の棕梠咲き褪せゆく墓標の墨いろ
砂丘の陽浴びて放浪の明るきいのち
鉄の扉押せばおもおもひらく若葉の曇り
ばつさり黒蝶晴天よりおりたる
いらいら薊咲くのみの砂丘の白日
太陽海へくだつまま砂丘の砂冷え
波くづれては掴みあい手にぎりひろがる
松葉杖で帰る春の月夜は夢のよな
春の満月有明けて褪せゆくおもかげ
ひそひそ物編む女のかげろへる匂
春の潮がゆりあぐる一つ一つの貝がら
わが珍獣をめぐる蛾のはばたく翅の粉
松葉杖つく宿命の黒外套なりし
わづかに松葉杖つく影の暁月切れそう
まともの海へ陽が落つる珈琲カウンターのひとり
水平一線かぎるままかえらぬふるさと
のしかかる闇ささへこごる灯の喘ぎ
舳先にて星空仰ぐすべての小いさき
白ら波見すえて夜船の窓をくもらす息
汽笛吼ゆれば闇の海まんまんとしびるる
春寒き荒磯で蟹を焼く煙の青さ
自動車堰き喚めきギャスリン臭き太陽
深夜のカーブをものうく軋しる電車の歯ぎしり

たんぽぽやむなくペーブメントの隙より咲き
蝶いそいそじぶんの影追い
日の出を待てば小鳥啼く緑いろのベンチ
砂丘に仰のく顔へ太陽がぢかにくる
自ら波あいてに少女らがダンスのたわむれ
白波砂へ消え際の一縷の白ろさ
初夏のあしたの薄霧を透く海の匂
野花の猛き香に埋もれ丸太つくりのベンチ
共同墓地の棕梠咲いて昼月高く
櫻んぼ摘み葡萄摘みながれながれ老いゆく

独立祭夜一句

校正刷りがせわしくあがる花火のとどろき
蟹を釣るとてマドロスパイプ薫らす
海の風たけるほどいよいよ高く賛美歌
夜更け一軒灯れる店の赤いアップル
飲みさしの紅茶冷え夏の夜の海より霧笛
松葉杖つく背に落月を感ずる
汐じめりするベンチにて船待つ星空
ユーカリ大樹の蒂(へた)匂い月夜ほろほろ

一九二三、六、二四　タマルパイ登山十句

峰を離るる雲かげるマグノリアそそり咲く
颯颯と露天汽車うつ茂りをむしつて
霧湧く谷よりアメリカ杉がすくすく
青空浸して山の湖いよいよ青澄む
とうとう頂に来し松葉杖を岩によせ
山のいただきの岩岩の寂光
絶頂の風に嘯(うそぶ)けばすべてが耀やく
瞰下ろす眸にあまる太平洋のおお凪
一羽の鷹が陽を搏(う)つて遥かの峰さす
いただき晴れ極まれる瑠璃いろの黙示

写真：盛岡市先人記念館

悼　木兆

妻の骨壷抱だきて船出せしまま
冬晴れの島さして波ある渡船
船つきの逞ましい乱杭にぶつかる冬波
年の終りの入陽追う電車でいらだち
砂丘なだれの除夜の家灯りピアノ

秋めくちぎれ雲仰ぎおのづと膝抱く
夜の海辺よりもどる爪透く血のいろ
ダリアがつくりがつくりかしぐ残暑のやつれ
漁師よたんねんに休み日の漁船をみがき
剃りたての顎なめらかに秋晴れ
バッタ跳んではわが松葉杖につかまるよ
秋深き平和祭の薄日のかげり
夜長のイルミネーションの書いては消す文字
柘榴のひとつぶひとつぶの夜長の味
蟲鳴く荒磯の月高きあげ汐
この良き月夜の良き本を松葉杖にぶらさげて

天の川に曝らすめちやめちやにつかつたあたま
口笛吹いて朝寒の仕事へいそぐ
もどれば冬さるるベツドへ煤の粉
木枯の夜を訪ね来てにぎる手
寒夜の四壁がきつ立ちおののく
落葉輪舞し小さなつむじ風のまま
冬陽ほつかりくる窓のカナリヤのきげん
支那街の灯をゆきもどる外套汗する
家家かんがり灯もる師走をさすらい

写真：盛岡市先人記念館

第五句集『海へだて』より

全176頁
自：一九二四年一月
至：一九二七年十二月

自己の記憶の為めに

これは、私が在米約十七年の頃、病んで不具の体となり放浪生活から絶縁されたのでやむなく、一新聞の校正者となり、昼の灯につながれる様になって以来、息吹にひとしく日日生れてきた句の、抄録なのである。

一九三四・八・一五夜　サン、フランシスコにて

スタクトンにて一句

一泊ほの明けヒーターにステイムの来るけはひ

噫（ああ）　加藤泰山児

まぼろしの蝶追ひそのまま
雨ふる雨ふる花祭の物売り達よ
この桜んぼつッついた小鳥のゆくへ
地下室の独り者に飼はれてる栗鼠です
海へ陽沈めば女は腕時計見て
陽落つる波際の砕けし貝がら
山鳩啼いて一ト雨来そな風ザいろ
青蔦が窓覆ふころのいはれなき愁
呼寄せられて上陸した日からの霧冷え
キス投げ合ふまに出船はのしのし
海の青さに透かしては拭く眼鏡
路傍伝道やんで夜霧吹くばかり
砂丘の薊咲く中に寸断々々の手紙
海へ陽入れば空はその海より蒼く
乳呑児ぱッちり醒めていてひとりでおはなし

嶋の渚の月明でポケットの銭鳴らす
瓶の野花は枕辺に野の香を湛へて
霧笛うめく暁の孤嶋の囚徒ら
紅いの愁に堪へぬダリアの投げ首
海月うちあげられしまま夜の光となる
遥かな山火事の猛焔と闘ふひとびと
昆布根こそぎうちあげて月の浜なり
踏みつぶされてるでで蟲の角から昇る陽
カンナの花が炬火かざし暑くする
磯で寝ている焚火が霧に遠うくなる
君を帰へした霧の夜更けの電車の火花よ
路よぎる蝸牛を角さす方へのけてやる
茂げりの底に持って来ているバイブル
猿廻しについてゆく日本人町の子供らで
夕立雲走しる草山の十字架仰いだ
海の霧笛こだまする崖岩蒼ざめ
沼底のしじまよりすいすい伸びるもの
湖水の湛ふ青空へ子亀を放なった
デッキで名残りの夏帽を吹かせてしばし
霧の漏れ陽に蒼ざれた都会のえがほだ

渚に焚く火の火花となりし星空
霧笛夜ッぴて呪ひつめた夜が明ける
時化(しけ)くる岩ふむ鷗の細そあし
夜長の女しょざいなきカードの占なひ
パプコーン馬車の笛ほそく秋の夜曳きゆく
いとど夜更けの邦人街は霧這ふばかり
カー待つ女が見る手鏡の遥かな秋雲
漂着木のでかい丸太が燃えゆく火のいろ
ドアばたり博奕場を出た一人の寒月
石油ヒーターでひとり栗焼く夜の時雨
豚よ羊よ朝寒の丸る身の検印
ステップ洗っている邦人に声かけ霜朝
けさも来て掛けたこの丘のベンチの落葉よ
冬夜の話がはずみ更けそれから煮る栗
博奕場、教会、支那めしと秋の灯ならべて

移民法実施さる

鶏の毛むしって毛焼きして短日暮れゆく
勤め帰りを詰めこみ灯(と)もし電車はつぎつぎ

移民法実施以後

うそ寒う真ッ黒ろな日本船が着く
霜朝の崖がかぶさるレールの仕事
めしひの帽子にたまる夜長のこぜにら
日の出を待ってかじかんだ我が手を揉む音
異人種同士がベンチの薄陽に並んで黙んまる

一九二五年

浜沙掘って元日の何創くるこどもたち
年明けてはじめての窓みがくたッた一つの窓
パン屑啄み飛んだ雀が雀をつれくる
梢の小鳥が雨水に映って啼いてる
梅観ているぼんのくぼの陽ざし
猫が恋する頃の君らの恋歌
けものと生まれ笑ふこと封じられている
山山霞めば修道士たちの木靴
尖がった屋根裏ずまいの思想か
しゃべり過ごしたあとのからッぽな春夜
帰って来た部屋に待ってた闇黒
誕生日のわが顔をごしごし剃るなり

田舎電車はうららかなペニーのつりせん
夜霧に追はれ汗だくな自分はちんばで
移民の汗で血で肥えたアメリカなんだが
煙草の脂でいッぱいな頭脳の懐疑だ
妖霧襲へば大海も太陽もなく
都市吹き飛ばして狂風のげらげら笑ひだ
空らッ風に寄り合って散らばる紙くづ
暮れゆく空から星星をこの眼で掘りだす
読んではページ剪る音の冴えかへる夜で
斧で伐りこむ立樹から迸しる猛けき香
郵便函の闇底へ落とした手紙だ
形見となった紙花に糸ひいてる蜘蛛
緑の涯てより昇る陽に真向ひゆくなり
がたがたフォードに妻子つみ落ちゆく移民よ
猥談に更かしてる灰皿のこの喫ひ殻だ
貝がら拾ろひためては捨てゆく
識らぬ児にボール投げられ相手になってる
異国の土となる同士でいがみ合っている
新聞に出た顔顔が屑籠うづめる
握手した手へ夏夜の月光

地下室住ひの暗ら隅で芽を吹くアニオン
海からあがった流れ木に憩ふて海見る
坑底の冷やッこい灯で揮るツルハシ
青芒にふれ訪ねゆく径
雑草にねころんで虫らに這はせる
霧の裂けまの青空へ叫びかける
白ら波にばかり騒がせ水平線は

排日問題

滅入った活字で滅入りゆく同胞励げます
ゴカイ掘りちらした沙を均らして白ら波
また雨雲のぼろきれが心に垂らつく
夜霧へ支那そばのツースピック噛みすてる
めくらの杖が月夜をさぐって
見おぼえの幼な顔もち上陸(あが)ってきた
支那料理の象牙の箸のうすあかり
灰となり遺言した山頂から撒かれてる
私の窓には煤化壁と青空の断片
数ぞへた雀がほろほろみな飛ぶ
新月光りそめて浜沙のほとぼり

フォース・ジュライの花火はやんで星星ばかり
耳にあてれば貝殻が潮の遠鳴り
をんな手鏡を見るぐるりの浜沙
猫はだまって靴直す腕前視ている
勤め帰りを電車はこぼしこぼし行く
世の終焉を待ちかねて大地は震ふか
集会散じた月仰ぎ濁った息吐く
砂丘踏みずらしたら巨大な足あと
渚の水母に映つされた今日の顔だった
監獄嶋が景色佳く眺められている
アメリカの海岸で流れ木に腰かけている
いつからとなく吹かない口笛吹いた
ビーチに散らばる新聞に載ってる顔顔
ウィンドミルがくッきり秋を晴らしてる
祭の飾りが祭こぬうち褪せゆくよ
祭の夜から曳いて出た渡船の白ら波
祭さわぎの都市かこむ夜汐のうねりだ
日本茶寮の萩咲いて束かねられている
いつも自剃りの刃をのがれ伸んでいた一ぽん
出しな舳先の灯を消せば天の川しるく

俄か雨にげ入りし燈蛾のはばたき
さまよふて星が飛ぶ噴水をひねり飲む
霧空へ毛を逆立てて毛虫はもくもく
大酒飲みでめざましい菊作るとよ
流転のはて病み死んで遺こした剃刀
秋夜寝しなの眼鏡を拭いてる
秋の夕陽となる音楽堂の列柱のかげ
校正刷を血みどろにしたインクで染めた手
行楽帰りの自動車が秋風につながって
海に沿ひ行く人間のちッぽけさである
これまで服(の)んで秋もゆく薬の瓶かず
鴎ら漁船へ分け前とりにつきくるか
秋たそがれを見送れるうなじの白ろさ
ここに海見せる此椅子
向日葵むきむき埃に塗みれて
脚無しのつくった砂人形が小ぜにを投げさす
たくさん蝶が飛んでいる田舎です
秋の蝶蝶は松葉杖みちびいて
月明を感じつつ読み耽ける
言ひ争ふた友と伴れ天の川の夜更

夜長めざめている人おもひめざめてる
秋の夜更けて我が衷(うら)ちに幽かな潺湲(せんかん)
反り身に歩るけ秋高い大陸ぢゃないか
霧笛やんだ明け方の壁喘む鼠だ
闇夜の雨にふるえてる蜘蛛の巣を感ず
落葉するベンチにてうちあけられてる
嵐とならん海風に深呼吸する
酒毒患者で手の刺青が顫えている

トゥイン・ピークにて二句

自動車おりて頂きの星星踏み立つ
下界にしがみついていて灯が灯が喘ぐよ

辞し帰るステップが夜霧に濡れてる
朝から晴れて虫がしらした手紙くる
没りぎわの月ふくれ疎林のあひま
大地はあらゆる落葉をひきうけ
濤が一トつぶ択りにしてあげた小石のいろつや
尼僧の手からたべているあの栗鼠よ
病苦載せこの鍍金の剥げた鉄製ベッドは

女が身投げた渚沿ひすたすたゆくなり
今宵つどひの茶が濃き茶ばしら
型の如く握手して別れたきり
枯れ草へ枯れ草へ電柱の影のびる
海から霧のたつかぎり霧笛呻めくか
虫鳴く月夜のスクエアに俺だけでいた
焚火に背中あぶりをり崩るる海濤
すべてが感謝であった感謝祭迎ふ
波が持て来てくれた流れ木焚く冬
焚火して冬空の重もみに堪へてる
タクシーの一輪挿しで冬夜の薔薇の香
冬朝の嶋の端に灯一つ忘れられている
ただに冬晴れ会はざりし丘
青い赤い離情のテープ曳き合ふ船出だ
冬野の流れは一ぽんの電柱映つして
冬日あの嶋監獄の畑鋤いている馬よ
冴ゆる夜の鳴らさぬ呼鈴
年の終りの爪でも剪(は)さもか
異国の除夜の人波に揉まれに行くのだ
年の終りの海鳴聴いてる

一九二六年

沙に臥て白ら波の年賀を受けてる
新春の光あつまる一つの窓もつ
深夜の窓が一つだけかんがり醒めてる
虚無が砂丘に仰(あお)のいている
真ッ直ぐな煙突ぬけて煙の奔走
大霜の黎明に靴跡つけ行く
ウインドミルの春風が汲み揚げた水の味
春の青空の窓拭く
互ひの顔が暮れきって別れた
嵐の中で芽ぐむものは芽ぐむのだ
沙漠の骨が尋ね人広告にまた出てる
尻尖がりな凧白ろき異国のさすらひ
ベンチで春の黄昏に溺れてる
砂と遊んで好い児になってる
焼かれる破船のどてッぱらから噴く紅焔
硝子囲いでテケツ売る女の息づき
かの丘の十字架とこの丘の我が黎明
ステインド・グラスの聖者達へ青蔦そよぐよ

凧へなへなと手に来る
轢死したポケットでワッチがちくたく
洗らったシャツを月明に懸け寝て了った
マッチ呉れと朧ろ夜が手を出す
初対面の握手する冷めたい手だ
マドロスパイプにいつも遥かに水平線ひく
茶寮の藤の花こぼれ茶碗の飲みさし
蜘蛛の巣ふるはして夕鍾の余韻
ヘッドライトに射られた華奢な脛(はぎ)だった
銀幕に若さを留めて廃たってゆくのか
夕空青めば楽器を提げゆく
道化の顔を洗ってしまった役者の顔
時計の針が別れの時指す
アメリカ三界を徂(ゆ)く春の旅役者として
霧空に掴まれて蒼ざめてる都市
丘に寝ている牧童へふうわり白雲
青芒にふれゆくあひびき
海は月夜の丸太ベンチ
遠い葬楽の涼しい風だな
駈落ち者更け霧笛に責められていよう

孔雀の胸毛の瑠璃光から来る夏か
バタミルク買ひ夕闇へ曲れば蝙蝠
深夜の月が冷めたい握手さす
蹴って蹴って蹴りぬいた球抱いて帰るのだ

一九二六・五・廿八・オーキン・ミラー山荘行

スクール・ベルが夏山の朝にこだまして
雑草薙ぎ刈る大鎌光って
メドーラーク啼き晴らす山路へかかった
故人のでッかい靴迹を埋づむる草の香

藪苺摘みたべる崖下で白ら波
草花培ひ住む異邦人として
蛙遥かな夜更けの風呂につかっている
似たうしろ姿めがけてつばくら
弾き澄むヴァイオリンにこぼれた片髪
深夜の壁が咳する
どこまでもひとりのやまみち
雀こぼれきて足もと
茂りに触れゆくうすもの透く肌

海の霧笛悩ましき蝸牛の歩み
月さす枕の下にてちくたく
汗が膏(あぶら)が摩天楼と建つ
踵いびつにちびてる靴で燕とゆきずる
嵐となるべしでむし
はしゃぎぬいていた茂りがだまった

一九二六・六・廿九日エール号にて南加へ

ちぎれテープを靡かし船出る
海切り刻ざんで船すすむどよめきだ
ゴングきんこん夕餉を告げて海へ散る
ついて来た鴎ら宿(と)めてゆくこの帆柱
闇の彼方へ舳の白ら波すざりゆく
デッキに佇つ眼へ燈台の遠い灯が沁みる
雲の切れまの檣頭(ほばしら)で光ったあの星
波音たえず毛布を巻いた肩冷え更けゆく
荒らぶる夜空へ換気口の吐くいきれ
怒涛しぶく舳先戻(も)る黒外套の深夜
船のてすりの朝日を拭いてる

ロス・アンゼルス其他にて

八年ぶりでほんとうの夏の手を握る
海埋められ床屋金物屋
メカヒノの児にひさびさで磨かせてる靴

トシヘーを懐ふ

沙漠のテントで不精髯が伸びていよう
頽廃した建物が想ひ出喚びだす
水着の紅い吐息うづめる浜沙か

ポート・ロス・アンゼルス一句

漁村つぶされ道となり水平線のみ

尖んがり帽でミュール使ふメヒカノの炎天だ

サンビードロ中原邸にて

芭蕉とならんで撮ってもらったりしては
幼さないみじかいお祈りでナイフ・フォークとる

よべの海溜め貝殻が渚に明けている

会ひに来し夜のもろいしの葉ずれ
窓から月夜へ首出している
涼風が放ッといた本めくっている
星もない夜をモッキング・バードが賑はす

与十郎旧居

ランプのしんの太とい灯が蟲の音もてなす
虫澄む夜更けで饂飩のダシが匂ふのだ
デミジョン（カーボイ）の酒も尽き暁鶏が鳴けども話して
そッと蚊帳出て花畑の黎明見まわる

与十郎とアップランドにて四句

蝉鳴く樹蔭の水音でひらいたムスビだ
二人で記念の名を彫ればその樹で鳴く蝉
手向けの花をこの丘で手分けし摘みとる
帰路のミシンからまたアプランド富士ふり返へる

泰山児の展墓二句

どッさり友と摘んで来た野花を手向けて
碑面の鳥のフン洗ひ物言ふ

荒野に埋もれた骨から咲くユカ（キャッサバ）

与十郎新居へ

めをとが同じ陽に焼け花剪る
引ッ越す丘は夏霞の彼方か
がたがたミシンで西瓜と揺られて
丘の家涼しく口笛吹かせる
女人もまじり丘の家で涼しい談笑

七月六日ウィルミントン発、帰航

翅に入陽を透かしては競ふて飛び魚
たそがるる顔へくる舳先のしぶきだ
遮ぎるものない大海も暮れ悩んでる
ダンスの楽を足ずりを載せ闇ゆくこの船
黎明の白ろいキャビンで目醒めてる

執務す

校正の筆がまだ海に揺られてる
松葉杖壁に吊るされはや忘られてる

砂山で別れ話となったのか
夕空青み星星を拈ねりたす
ダリア咲き爛れて魔がさす
虫鳴く闇を捻ねって飲む水
夜の森うしろから焚火にのしかかる
初秋を遠めがねに入れる

コングレス・スプリング行九句

とびとび路傍に花だけが買はれに出ている
乗り換へに電車下り仰いだ初秋
露天舞踏場に散っている葉の裏おもて
渓流を聴き鳥を聴きながらの昼餉だ
秋の蚊鳴いて岩間からこぼこぼ鉱泉
秋天衝き立つ大樹の前に立ってみる
山中で渦巻く寂寥
渓流鳴りつめ木の葉を降らせる
この山の月桂樹に彫った形象文字だ

病躯からまた立つ秋かよ
タンポポほほけ、なりゆきにまかせてる

黎明にねんばり跡をつけゆく蝸牛
虫の音しげみ孤つ家の灯を消さす
思ひ出し笑ひの顔にぶつかった顔
秋となるおくれ髪（げ）のそよぎ
梟がぶッ欠けた深夜の月よぶ
燃えてる丸太の端に掛け海見る
湖水に影を涵（ひ）たして人待つ
秋晴の塔で鳴ってる鐘見える
月見草の砂丘の砂がほろおちる
眼にこの湖水の秋を湛へてる
月夜の黒い影となり別れる
秋風は思出のページをめくって
病み臥して秋の声聴いてるか
月見草咲かせ砂丘は暮れゆく
児の描く顔がみなまん丸るくて
読みつかれた眼を青空へ解き放す
貧しい壁が貼りつけている聖画
爪に紅（べに）さして轢かれてた
ポケツ空らッぽな夜空の蒼さだ
月夜の笛が身柱（ちりけ）を走しって

モデルの裸形を燈蛾の影がこそぐるよ
噴水の月光で濡らした唇
移民を拒み淘汰する黒い手のうごき
月光窓へくる寝しなの洗足
インデアン・サンマーのあらわな二の腕
秋晴のゆきどまりでザザめく白ら波
オペラ季節に入った初雨となり
見送ってくれるランターンの灯で雨夜の石ころ
地震に醒まされ灯(と)もせば壁の亡父の写真
コーヒーが夜の長い手紙を書かせる
滑らかな唇のお祈りでしたよ
無帽の髪吹いた秋風のゆくえ
寄り集りの流れ木が一緒に焼かれる
栗鼠にピーナツたべさしている手の秋陽
展望がみるみる雨に濡らされる
反芻やまない牛の角夕明りして
やや空腹のちらほら灯(と)もる駅へ着く
別れの夜霧へキス投げている
軍艦満月に錨おろした
病室の暮れゆく天井

ちろりんちろりん氷鳴らし水もってくる
隔離病院の窓から見える一つの灯
ムービーはねて霧捲く夜へ出た
尾花に吹かれて遠くなる後ろ影だった
霧の都の霧底でいとなむ生殖
墓地はいろいろ草花を咲かして招んでる
暮いそぐ路傍で落葉焼く匂ひ
この写真からはや二人ほど死んだのか
貨物車の屋根で働らいて時雨れている
嵐の髪が逆立つ
闇の壁マッチを摺らせる
冬川涸れきり自叙伝書いているとの消息
帽子鷲掴みにして嵐にぶつかる
嵐から来た顔そる剃刀
嵐をあしらふ鴎のつばさだ
版になる鉛鎔け時雨れる
時雨の暗らい顔ならべ飯食ふ
どしゃ降りの外套に滲じんだ灯がある
辻よぎる盲人を手びきし時雨れる
我ら飲む水源に泛んでる鴨よ

さすらひの冬草青みカリフォルニアは
アメリカ三界へ来て時雨れている
野分に破れた夜半の夢だった
高いところから道説いていらッしゃる
破れテントで夜一ト夜しぐれて
路傍の山羊の瞳にも入り冬枯れを来た
会衆しづめ壇上に白菊もりあがってる
冬海とどろき声かぎり歌はせる
移民地のこみいった月夜を味はふ
飾り人形の眼を流れゆく師走の人あし
夜更けの支那そばすすれば時雨れる
チョーチの壁の警示板に寒夜の一つ灯
朝ッぱらから鉛版削づる音たて師走だ
田舎電車の冬ざれにぶらさがる
冬風すさんで連峰尖がらす
日本の栗焼いて尽きない夜話し
黒ろい夜の窓をおとなふ時雨のリズムだ
雪が来た峰仰ぎどんどん焚いてる
アメリカ土人斧かたげ消えゆく寒林
ことしも剥ぎ暦剥ぎ尽くそうとす

暁霜白ろきミルク・ワゴンのわだちを横ぎって
トランプとすれちがふ冬の蝶がある
寒月へ暖炉焚く孤つ家のけむり
喪章で闇ゆく
張りきる力抑えて春待つ

一九二七年

初空の街燈消しゆく
新年の第一歩から出直すぞ
煤の粉降らぬ元日の窓開け放って
元日暮れゆく鋪道のコンフェテ
足許の雀らへやるものがない
新春の歯ぎれよいあいさつだ
汐湯につかって夜の海聴いてる
春雲浮べてウインドミルがはたらく
親の死んだもしらぬ児で椿を拾って
しまひ渡船の太ト綱からげる
売られていった牛の足跡がある
流れ木拾ふショールが海に吹かれてる
嵐を喰って木木の芽太るぞ

片腕かかえゆく片腕がある
壁といッしょに日向ぼこしてる
陽炎もどきの人気に縋って
西瓜の核割る白い歯有っている
絞首台に目がくしが棒立ちとなる
死刑囚の綣切れた爪のいろである
寝たあと闇が寝顔の型とる
羊みな瞳(め)に入れて羊飼がいる
春の陽は木脚も温くめて
胸の沙漠で覇王樹を火のよに咲かせる
春風は児の風車廻はしてくれてる
春宵闇(よいやみ)でウクレレの歎き
雨外套に雨鳴る闇ゆく
春の陽の断面に鶺嘴打ちこむ
寝返へりうてばそこぬけどしゃ降る
嵐を征して大日輪の昇るさま
ポピーよ競ひ春の陽へ黄金(こがね)のさかづき
渡って来たきりの太平洋がある
日南の石ではなした話
瓦斯自殺した書置に滲じんで瓦斯の香

常住の霧冷えで冷えきるハートか
白ろいベットでぺしゃんこに病んでいる
嵐の若盃を傾け月ゆく
皿洗ひとなり皿にあたりちらしてる
月光の氾濫に身を投げる
暮れぎはの犬ころにからかっている
サーカスの大テントも更けた
枕時計が寝息にヤスリかけている
破れハモニカが青芝に濡れていた
身うちでささやく泉を聴いてる
べつべつのことおもふ手つなぎゆくなり
海とどろ底力沸(た)ぎらしてくる
芝で子犬に舐められた顔もて帰る児
ガリック噛んで働らいてさすらふ大陸
その唇と唇が海隔てている
ベンチの片頬に入陽がまだある
わたされた微笑をうけとる
漂着木に息(やす)ませてもらってる
至る処の太陽で輝やかしてくれる
星が流れた自動車がまた轢いたのか

石壁の死相から蔦若葉する
片ッ方の耳からは悪魔が囁やく
チューリップ揺らぐ夕風の尼僧たち
盲人に腕かして夕霧よぎらす
使命とどけた白ら波の歓声だ
闇ゆきつまって生みだす新月
海の彼方にふるさと捨て置く
蝙蝠にはばたかれ松葉杖いそぐ
まじろかぬ灯が灯蟲を狂はす
手かせ足かせ首かせを追ひ求めているか
家壌はされたら春の海のッそり
深夜の窓からぶッ欠けた月に覗かれる
すッぱだかで読むもの
死んでからチヤホヤされてる
夕空の頬紅褪せゆく
胸の無人嶋に信天翁群れている
水揚げタンクが夏夜へ図抜ける
卓席に並んだ羅(うすもの)の温みが移り来
靴の底からマッチの火出し喫っている
裸形となり湖水はじゃくまく

美くしいいのちが唄ふ
夕風にこき使ったあたまを吹かせる
巌でそだった孤松の枝ぶり
闇の彼方で張りつめている水平線か
月蝕の夜更へ首出す
ルーフ・ガーデンの乏しい土で咲きそよぐ
心臓へ繊(や)さしい手がくる
ザラリ棕櫚の葉の闇夜に撫でられる
ポストの底の暗黒で手紙が落ち合ふ
昼の灯の仕事からあげた顔
かけた言葉に野良犬がついてくる
別れた霧夜の街燈ぼやける
バナナの皮をペーヴメントの雨から蹴り出す
彗星の屋根に出た深夜のスリッパ
海の崖端で読まれている本
虫鳴く闇へ酔ひどれ消えゆく
異境の月照る夏川に尺八「たけ」吹くよ
海風いろんな髪のいろ、眼のいろ
冷めたい壁が部屋部屋劃ぎって
流れ木焚く夜へ訪なふ霧笛

ポケットに一つ残ってたペニーの年号
日輪花（サンフラワー）の輝やきに輝やかされる
夏場さまよひジプシイに声かけられる
野宿と決めて天の川に焚火する

悼三太郎一句

あれが最後となったあの夜の一二語

踏みちがへた跡をつぎつぎ踏みゆく
スクリーンに若かさ匂はしうつろひゆくなり
無抵抗な沙踏んですっかり疲れる
うす陽の影つくり墓穴掘ってる
闇に隠くされて来たこのボロ服である
咽喉の暗らみへこの山清水落としやる
枕木の月光踏み行く
自動車沙漠の灼熱に喰ひ入り動かぬ
ガム樹は断えず古皮を脱ぎ捨て伸びゆく
夏山深き樹に彫っているナイフ
濃霧に咽せんで燈台の灯がのたうち廻る
残る蚊も鳴かぬ死灰のごとき夜

その人間そッくりな靴音させくる
菊咲く頃訪ふ約束で別れたきり
帰りの渡船で霧の桑港うんざり眺める
西瓜の残骸ちらばらし大地は暮れゆく
労働著の汗洗ひ乾かす月夜だ
読んでる本に灯影さまよはし一ツの蚊
夜は夜で火を噴きはたらく煙突
いぶせき住宅をひきたて向日葵
蟲声しげき闇に掛け野天劇観てる
冬ざれ山羊と視線がかち合ふ
仰ぎさえすればこの秋晴の真ん中にいる
山鳩啼けば小屋にした丸木のその皮（かわ）
よまひごと背にきいて我が事いそしむ
天の川かたむく方へとばしたしょうべん
病躯うづく夜の近くでコホロギ
宿無しに星鏤めた夜空ある
異国の名月放ッとき読んでる
沙漠にとりまかれ脈打つ孤駅だ
蟲の音が秋の夜に鑢をかけてる
しゃべり過ごせしあとのうつろな夜長さ

トランプのどた靴音から跳ぶバッタ
めしひに秋の陽溜りで読み聴かせている
コートかたげて郊外の残暑を行くなり
路傍の牛に秋暑う目送される
秋の夕陽で互みに撮ってる
佇ち話にふれゆく秋かぜ
秋の夜更けゆく戯墨の墨痕
さすらへど、さすらへど大自然のふところで
沙漠へ消え去る汽車の尾燈の深紅さ
酔ひもどり借り間の闇へ物言ふている
秋風に轢かれ息たえた指輪のダイヤだ
渚の沙へ児はなんぼでも大きく描くなり
くらしも乳牛も痩せこけている
大拳闘技も果てし天の川がある
有明月は壁ぎわの行李へ射し来て
独りに秋の海ひびかせ行く
とうとう肺療院へ送った秋かぜ
ダンスの楽が長い夜を耗っている
霧夜行くポケットに焼栗の温くみ
並樹尽き別れる岐路へ来ている

屋根裏の画房から漏れてる秋の灯
渡米役者の番附が飾られ時雨れる
夕鐘のザラめく剃りあと
読みものも落葉も溜って
よく視つめると満月が汚染だらけである
集金廻りして時雨れているだろ
本屋で繰っている本へチョーチの晩鐘
シャツの釦をつけている夜へ時雨れくる
落葉焼く煙から握手の手が出る
誰れも仰がぬ夜の峰を照らしている月
止まれない穂に止まらうとしてトンボ
停電に会いロウソクを点ぼせば時雨れる
夜の寂寞からページを剪る音
鴎らあつめ坐礁船くつろいでいる
ぬすびとも夜警も時雨れて
死骸のせ漂よへる漁船につく貝
死に絶えた漂流船の日誌の最後に
病院で埋もれてる白いベットが内省さすのだ
世間話から遁がれ月夜へ飄然
剰り銭を脚なしの帽子へ納めた

振袖姿で人形はこの真夜中にも
夜長の眼鏡にひついてる微塵
流転つづける帽子のつば癖
長い夜の片隅が鼠に噛まれる
ゲーム場並ぶ灯へ真ッ暗らな潮のうねり
病苦に狃れすぎ死にまで甘まへかけている
葉猩々濃く染めてクリスマスが来る
冬ざれのゆきとまりから海となる
ハニムーン送った米のこぼれが明け、雀
碑にされて寒空へ尖んがらされてる
押し揚げポンプの水飲んで冬木に住んでる
鼠らの跳梁にまかせて凍うる夜
アスフワルトの暗鬱を敷き延ばしてゆく
水鳥浮かしてタバコを巻いてる
記念像に月冴えて誰もいぬベンチ
夜業の輪転機も止まり凍てゆくけはひ
麻姑の手かりて師走の背ナ掻く
除夜の汽笛が鐘が鳴る足洗ふている

層雲本誌より

1928（昭3）年1月号掲載無し

1928年2月号

五仙電車で行ける小春の海もつ
だだっぴろい海前に置き腕くむ
朝霧口笛で仕事へ急ぐ
冬ざれのゆきどまりから海となる
秋の夕陽で互みに撮ってる
昼の虫鳴くマドロスパイプをほじる
渚の砂へ児はなんぼでも大きく描くなり
待つ人もない月夜を歩るく

1928年3月号　掲載無し

1928年4月号

記念像の月冴えて誰もおらぬベンチ
アスファルトの暗鬱を敷き伸ばしてゆく
水鳥浮かしてタバコを巻いてる
除夜の汽笛が鐘が鳴る足洗うている
十仙めがねで月世界見ている
何んでも掴もうとするちッちゃな手がある

凪滅りゆく夕空をしとしと尼さん
冷えた星空から来てまといに加わる
まじまじ乳児に視つめられている
夕映美くしき施療院さして
呼鈴押した音きこえそれきりの星空
みすぼらしい日本人町を電車でゆききす
雨となりし婦人外套の青や赤や
吠える犬から遠くなり霞む

1928年5月号

夜の海のたうたせタバコ火
春陽の芝でとろり見た夢よ
支那童女らの綱とび唄でたそがれる
あしてまといのない月夜をあるく
尼僧の黒衣が嵐になろうとす

1928年6月号

遥かな船の日の丸がめがねに入りくる
女の首の毛皮に海の夜風がある
ぶらつくところもない邦人街をぶらつく
鉢の白百合抱へ来れば夜の星星

1928年7月号

夜嵐の釦孔をかがっている影
靴跡の雨みづが花びら溜めてる
春の虹淡はし郷愁を彩どるや

1928年8月号

青芝の月夜を踏みて伴れ
提げたミルクへ夏山が暮れかかる
庭園の樹濡れ陽を膝に載せている
樹の根のたうつ下闇にけつまづく（アラスカへ働きに行く友へ）
夜の太陽の明るみで唄へ
ゆたかな草の香に埋もれ想うこと

1928年9月号

水に立つ裸身から水の輪
牛が淀める夕焼舐めてる
地均し機械が霧の深夜に座ってる
摘み溜めている苺の赤さ汽車から見える
萩（まぐさ）刈りて塚とし月夜となってる
枕辺に月の出おそき夏山もってる
霧笛呻く夜のコーヒー苦し

1928年10月号

ベンチにまだある夕陽の端に腰掛ける

退院して戻り留守さしたメザマシ捲いてやる
海の心がどしんとぶつかった
霧朝の手が冷めたく脈をとる
肋ひ船が月夜で弾いてる

１９２８年１１月号

異境で病む身を灸（やいと）に灼かせる
下積の西瓜が動こうとしている
舷側の夜を噛んで潮の白い歯
黒人の歯が西瓜にかぶりつく
油タンク車ひきずって沙漠へ陽は
夕月光りそめ三角な白ら帆がまだいる

１９２８年１２月号

亀の生き血を買うて吸った顔でいる（支那街）
首なしの亀を包んで生きている夜の道
銭乞う帽子おいて胴躰ばかり
コヒー代もなくなった霧の夜である
握ってこぼしてみるだけの沙である
舳先の月夜を黒い影が守ってる
耳掻きに耳の穴の夜長を
海の崖端で二人きりの話がつきない

伐り倒した樹で一ぷくする
すらりした裸形を海に見せている
ルーフ（サンルーフ）の朝日へ患者車で押されゆく

１９２９（昭４）年１月号

湖水の秋を一と周りする
ポプラひらひらするのみの終点から乗る
湖畔の星夜で誓うたことば
食卓の花に朝の一人で食べてる
白ら波に追われつつどこまでも二人

１９２９年２月号

平沙の秋暑き国境を越そうとする
月に影ひいて来てみんな集まり（郊汀氏歓迎句会）
テーブルもない手で帽振るなり
のこる夾竹桃も西陽も褪せている

１９２９年３月号

流れ木を焼く火が赤く冬晴れ
浪に岩がかげれば暮れてゆく
暮れかけしかの丘の十字架はまだ見える
ニックルが自動楽器で唄いだした
おちたペニーが枯葉いろしている落葉

手が足に灸(やいと)をすえてる
どす黒く暮れてゆく海から燃える灯
這う児が這いくる毒蜘蛛を掴もうとする
カリホルニアの冬から萌えだす
ひもじい犬が陽にくるまってねているほかなく

1929年4月号

暮れゆく山も泊り船の灯も映つる
夜の雨流るる鉄柱を掴んでる
寒い灯がこごり合ってる
冬陽ぼんのくぼへくる
浜沙におとした水洟(はな)

1929年5月号

夜をバナナむいて淋しきは霧笛(ホグホーン)
月照る竪琴を奏でている
穴かがった膝抱いて海見ている
雨に冷えてやって来た手が握る手

1929年6月7月号　掲載無し

スリッパ揃え白いベットの息絶えている
終電車が終点の星空で待っていた

1929年8月号

国境の旗裂けて平沙の沙に吹かれている
どしゃ降る青野を反芻(にれが)む牛ども
四ッ葉のクロヴア見つけたとしても
野焼けの匂う電車ではしるはしる

1929年9月号　掲載無し

街の晴天白日旗へ夕立つさま
漂着木の月光に腰掛ける
湖水にうつる此家のベル押している
泥沼の夕風に撫でられる

1929年10月24日　50歳
ウォール街株大暴落始まる

1929年11月号　掲載無し

枯草いろの蝶がいるばかり枯草の道
アメリカ三界でつぶされる煎餅の辻占
めくらが弾く絃に夜霧は
異国の夜霧をさまよう者になっている
和蘭風の大ウインドミルの秋空や
この日の海の憂鬱に火を焚く

1929年12月号

渚の焚火で別れてそれなり
油井のあぶれ油に映った秋空
靴音も絶えた深夜の霧となっている
玉葱に芽を吹いて自炊している
夜霧の伴れが減って減って独り

1930（昭5）年1月号

校正刷のみ見せし眼に海見せている
ベンチの背中まで秋夜のサーチライトだ
噛みタバコの唾吐いて波止場で老いゆく
うすら寒い影示す日時計になっている
逝く者は逝く冬は晴れきる

1930年2月号

地べたの乞子（ベカー）が地べたで摺ったタバコ火だ
薄陽に風邪気の影曳いてポストへ
残りのペニーで躰重計に乗った
枯草の忘れたハンカチに戻ってきた
冬陽の十字架めく影は電柱

1930年3月号

一つきりない窓を開けて私の初空

1930年4月号

この浦の春寒い小蝦（えび）捕る支那人として
凧、凧、施療院が夕映ゆる
雨乞いの雨が音立てて降ってきた

1930年5月号

この夜の都市へ祝祭の花火をかぶせる
鳩へひろげた手をひかれて行った

1930年6月号

別れる外ない菜の花の岐れ路へ来た
むけば月夜の匂いがして青いバナナ
紙鳶が瓦斯タンクの澄明な夕空

1930年7月号

月夜の匂いの青いバナナをむく
春の夜更けのトンネルをぬけてゆく口笛

1930年8月号

デッキの真鍮磨いてるかじかんでいる手だ

1930年9月号

ボートに雨水が溜っている白ら雲
地べたから帽子出すより外はない手である

1930年10月号

自分が駱駝の瞳の自分を観ている

海も灰いろな鴎ばかりいる

1930年11月号

太平洋とポケッに戻りの電車賃（カーヒエア）がある

花葵つったっただけの生活がある

1930年12月号

海の砂握っていても赤インキの手で

1931（昭6）年1月号

エレベーターのボタン押し秋の夜へおりてゆく

1931年2月号

異国で月光雫している尺八

1931年3月号

水平線へ落ちてゆくあの船の乗合いよ

秋晴の砂丘を抄（す）くい嚢（ふくろ）にしている

1931年4月号

押したベルの応えなく月夜へまた出た

1931年5月号

初空へミルクワゴンの蹄が冴えて通る

正月の靴音で山へ来ている

1931年6月号

日本のレディオが聞こえた話聴いている

焼かれにゆくネクタイきっちり

1931年7月号

死面のような凧がある異国の夕空

ドアの下から書いて入れて戻る月夜で

1931年8月号　掲載無し

金網から青空へさえずりつめてる

1931年9月号

春ゆく角笛

遠おくを長い貨車がゆく見えて散る花

1931年10月号

ベビーゴルフ場もひまで番ひの蝶々

風から帽子かえしてもろうた

夕陽となった羊飼の杖の影である

1931年10月号

通信「北米より」

桑港　下山英太郎　52歳

去る一月末のこと、旅を流れてきていました片井渓巌子と佐藤青稲と私と三人で或る動機から、サンフランシスコの対岸、オークランドに求道舎を創設されています波多野泰巌氏（元来本願寺の開教使として渡米されたのだそうですが、故あって独立布教して居られる、暁島敏氏の弟子という人……）を訪ねて語りました結果、たちどころに

純層雲派といったような俳句会を起すことになり、その三十一日の土曜日の夜を第一回として、右求道舎に於て句会をもつようになりました。名称は其処に有名なメリット湖に因み私が湖畔社と提案したのがそのまま容れられて、爾来毎月最終土曜の夜に集るようになって居る次第です。ここに集るものは大抵溌剌たる青年でつい私も愉快でたまらず、例会の都度海を越えては通いつづけておりますが、いづれ機を見て層雲支部ということにしようと話合っております。私はアメリカでは前からのゆきがかり上、いまだに「逸蒼」で居ります。（五月二日）

「湖畔社 二月句抄」

1931年10月号

博奕場（ばくちば）のドア蹴りあげて朧夜へ消えた

1931年11月号

夜霧に吹かれて逢いに行く心
砂山に春去んだ靴跡か
字を彫り散らした丸木ベンチの腕木に置く腕
この地下室での決心が爆発するのだ

1931年12月号

素足が深夜であるスリッパ
犬狂おしく吠えて秋なる白波

1932（昭7）年1月号

前栽の花白く寝てしまったらしい
蜘蛛が巣をかけた留守を預ってる
この移民地に根おろしてぼつぼつ枯れゆく
死刑になるかならぬかの顔剃るとするか
キャンプ・ファイアが夏山の夜になる水
胃で消化（こなす）物買って提げてくる汗だ
この海の沙をはらって帰るばかり
冷えきった紅茶ぐっとのんで夜更けた霧笛

1932年2月号

独立祭でも苺摘んでるは同胞か
ぐるりに蟲鳴かせ起きてるだろうか
神父の黒衣暮れかかり羽ばたく蝙蝠
丘のてっぺんまで建っていよいよ食へない
海底トンネルの暗らみに吸われゆく後ろ
ベニー涼しく礦泉の紙カップが出る
逢われない夜を寄せ返すうしおの燐光
砂漠つらぬくレールの月光跨いだ
アラスカサモンの鼻ばしを酢にして秋めく

ベンチみな空いていて浮いている夕雲
スクエアの芝も夕陽となっている夕刊
秋空から下りて来て座った飛行機
不景気に背むけて海から釣ってる
山を映して貯水池がある秋

1932年3月号

日本から来た竹箒の落ち葉掃く音よ
駱駝むっつり首伸ばし遥かな秋空
この沼の死面からすいすい藺(いぐさ)が立つ
海の入陽は驢馬でゆく後ろ

1932年4月号

戸口の星明りで透かした鍵束
秋晴へ灯を透かして仕事しつめてる
ラスト・ボートの夕明りで封切った手紙
漬けオリーブ択る窓へ晴れては時雨れる

1932年5月号

さむく出た洟(はなじる)もつてくる
時雨雫している渡船の太とづな
俺をふりおとさずに此一年廻った地球だ

1932年6月号

深夜の指からトゲ掘る針先
ジプシイの手相観が菜の花明りで
靴底から火を出して喫う寒くて春
春寒きルンペンとまたたく夕星(ゆうづつ)

1932年7月号

靴底に摺って喫う煙の春寒
ゆうべ荒れた海の水がちらばる貝殻
暮れかけた海撲つ羽音だ
サンデーの朝から木の芽曇りの聖鐘

1932年8月号

海ははてもなくつづけざまのくしゃみ
握手したあの手のぬくみのもう世にいない人か
春風の路訊けどそれもストレンジャーで
ウインドミル(風車)に冴え返へる月懸けて別れた

1932年9月号

トンネル穿ちゆく海への口笛
うしろ姿、運命があるいてゆく
この大洋へ、自分の膝を抱いている
日没の艦旗をおろすラッパの余韻だ

1932年10月号

飛行機どよみて通る土筆はぞくぞく

『下山英太郎素描』　桑港　松野　珠樹

霧だ。寒い、寒い……

その中を下山英太郎（「逸蒼」という方が桑港では通りがいい）が肩を大きく揺りながら来かかった。フィルモアー街の夜である。と、ある青物店の前で彼は足を止めた。足を止める……それが、逸蒼の場合、完全な歩行中止である。彼の片方の病脚が他方より二インチほど短いのだ。彼が足を止める時、一方の足の上に全体重を乗せて病脚を、立っている方の脚の側へ引き寄せて、佇つのである。

ハンカチーフを出して額の汗を拭うた。霧に顔中濡れていた。と、見ると、青物店の入口まで霧が舞い込んで、店先に塁々と積まれた果物が霧に浸って、その肌がびたびた濡れているのだ。アップルの紅いろ、青色、オレンヂのいろや天井から釣るされているバナナの大きな房の黄いろが、湿って溶けて霧の中へ流れ出しそうである。彼はヅカヅカと店の中へ歩を入れた。

「バナナニ打プリーズ」

「オールライト　サア」

店の男がバナナの房へ包丁を入れているうちに、彼は急わしくポケットから小さい手帳と使いへらした一寸位の鉛筆を取出した。

果物屋の果物のいろが流れる霧街

大霧のアップルの紅いろ

二句書き入れると、店の男が袋に入れたバナナをカウンターの上に置いた。

「35セント　プリーズ」

逸蒼は金を払って袋を受け取ると今度はそれをフロアの上へ置いた。一たんポケットへ仕舞った手帳と鉛筆を再び取り出すと又急いで一句書入れた。

いろいろ買って独り者の買いもの

ふと見ると、可愛らしい女の子が母親に連れられて、彼の直ぐ傍に立っている。アップルのような頬のいろである。

「ハローハロー　ナイスガール」

少女の頭を撫ぜてやると、彼はポケットからバターボールの小袋を取り出し二つほど子供に握らせた。

「ヤッ、サンキューサンキュー」

袋を脇へ抱えて、店の男にそう言って会釈すると、倉皇と店を出た。街へ出ると逸蒼はキャップを脱いで手にした。肩を揺って深い霧の中へ……寒い、寒い。

逸蒼は突然思い出したように、今来た方角へ引き返した。そして、桑港新聞の印刷場を覗いた。年末最終号の発送に経営者の横見氏や、編集の多和君など四五人、急しそうに仕事しているのがショーウインドから見えた。ドアを排して彼は入った。

「ヤッ、どうです」

言いながら、ドスドスとガスヒーターの暖く燃えている側へ近寄った。
ポツンポツン、タイプライターを叩いていた横見氏が彼の声に立ち上ってガスの火に両手をかざしながら、彼を迎えた。
その前へ
「コレどうです」
彼はバナナの袋を横見氏に差し出した。
「いや、これはどうも」
横見氏はそう言って、だが手を出しかねていると、逸蒼は袋をドッサリ側のテーブルの上に置いた。
「どうもこりゃ恐縮ですね、逸蒼さん」
「ナーニ、やり給えやり給え」
「逸蒼さんから、こんなものを戴くなんて、どうも、恐れ入りますね」
逸蒼の清貧からバナナ二打の代価は、事実小さな額ではない。横見氏の礼は丁重を極める。
「下山さん、こりゃどうもすみませんね」
多和君も仕事の手を止めてヒーターの側に寄って礼を言った。逸蒼は又ポケットからバタボールの小袋を取り出して、袋ごとテーブルの上へ置いて言った。
「これも、やり給え、やり給え」
「いやあ、ずいぶんいろいろと戴くのですね、これはどうも」
横見氏は又恐縮し、礼を言った。
二言、三言世間話をした。
「えらい霧ですな」
「ヤー、これ、こんなにボトボトに濡れている」
膝のあたりをバタバタ叩くと、ハンカチーフを取り出して、彼は禿げた額を拭うた。
時計が十時を打った。
「ヤッ、じゃ又！」
そう言って立ちあがると、彼は、テーブルの上に置いていたバナナの袋、横見氏が逸蒼から呉れたものだと思って厚く礼を言ったそのバナナの袋、それを逸蒼らしい直裁な、そして不自然でない態度で、前のように脇へ抱えこむと板敷の床をドスドス肩を揺りながら出て行った。
ヒーターを囲んで立った五人の苦笑の前に、逸蒼のポケットの中で汚れた小袋から、バターボールの小さい飴玉が五ツ六ツころがり出ている。
逸蒼は、バナナの袋を脇に、片手にキャップを持って街へ出た。急ぎ足、いや彼は片方の病脚の短いため、体重の平衡を保つ上に徐行することが出来ないのだ。肩を揺って、背の後に霧が小さな渦を捲いて行く。
濃霧の中へ……寒い、寒い。

1932年11月号

「羅府（ロサンゼルス）オリンピック大会にて四句」

遠く来てこのスタンドで仰いだ碧空
炎天へ燃え熾かるはオリンピックトーチ
月夜の蟲の聲選手は帰っている

競技場は蟲ふけし夜空の炬火（トーチ）

1932年12月号

柩出て行った階段をいそがしく昇りては降り
異国の春夜へ開幕（まくあき）の木を入れる
嶋の夜の噴火明りで語らうことする

1933（昭8）年1月号

爪ばかり伸びる霧どころの生活だ
渡船で海を越えた手の深夜の紅薔薇
尖塔霧が拭うた青空である
異国の春夜へ開幕（まくあき）の木を入れる

1933年2月号

花火明りで腕時計見てから戻ろう
花火へ、湖畔に敷いた新聞紙で
独立祭の花火もきえた湖の暗らさだ
夏の朝、鳩へ物言うて鳩がきている

1933年3月号

木の根、秋の陽に腰かける
汐にただよう空ラ箱と渡船で暮れゆく
旅へ、霧空の灯焼けをうしろにする

「湖畔社 六月四日例会 於 王府求道舎」

飛行機の残骸へ夏枯れ草吹く

「湖畔社 七月三十日例会 於 王府求道舎」

シュライナ祭も過ぎた秋めく雲いろ

「湖畔社 八月二十六日例会 於 王府求道舎」

限りない不平もち来れば野のサンフラワー

1933年4月号

時計塔は灯っている除夜の針先
行く年を、ごしごし挽いてる鋸屑
車にガソリン詰めるまに宵月落ちたか
黒髪の匂い異国で虫の音更けてゆく

1933年4月号

「湖畔社 九月二十四日例会」

渡船の舳先で淡い虹消えようとする

「湖畔社 十月一日例会」

この夜の焚火で栗むく別れか

1933年5月号 掲載無し

1933年6月号

海しぶく断崖の夕日を反芻（にれが）む牛
この大陸の秋風よぎるカヴァド・ワゴンだ

口には甘酸っぱい露西亜キャンデーが霧の夜

1933年7月号

軍艦旗もおりた黄昏の海のいろ
影、月夜匂うレモンの花へ近づく
鴎墨いろに暮れてゆく渡船でけふも
この椰子に彫ってある日本語で秋晴

1933年8月号

「新聞廃刊」

最後の一人となって、蝋燭ともしている
アメリカの秋の夕明りで食うこの冷やめし

「社主葬儀」

一しきり夕陽まともとなる葬儀車列いて
屋根裏住いへ秋の夜のサーチライトも
夜霧に眼鏡ぼかされて金借りに行く
俺とびっこの影とが月夜だ
疎林もる陽のすじに触れゆくこころ

1933年9月号　掲載無し

窓ガラスの外はなんと冬の晴れている校正
俄かに極寒となった活字を拾うている指

1933年10月号

降る程は消える雪が動物園の駱駝の瘤
霜にいたんだ菊手向け三周忌にする

1933年11月号

明けたばかりな新春の野を喰み羊は
明日は船出する姿映つして姿見
このごろはヨーヨーの影も見えないつばくら
トラックのあとに乗っかって風景捨てて行く
尻尖りな単色な凧ばかりが揚がる異国の生活
太平洋うねらせて沙上のわたしの膝

1933年12月号

よれよれなネクタイで帰る雁仰いでる
わたしの木脚を這うてこの蟻ッ子
ガラスの函でチケット売る春寒い頬紅よ
アメリカ水兵の白キャップがたそがれの蝙蝠
邦字紙の二三行に報ぜられて、もう居ない
涛のうねり、涛へビラを撒く鴎だ
施療院（クリニック）の灯が落としている影

1934（昭9）年1月号

「友の訃」

放浪の破れ靴を脱ぎばなしにして逝ったのか

明けたら死刑となる、満天の星のかず
蝙蝠翔けるころのジプシイの唄かよ
死刑も了へた、葉藤のそよぎだ
ドア叩いてみては昼蟲のきこえる

『新刊紹介』
「TORCH／炬火」　北米アゴスト社編
住所：ロサンゼルス　ファーストストリート233
「炬火」より逸蒼句を全句掲載
夜汽車のおもむき味いゆれゆく
闇は車窓へ灯の美しさのみ見せている
夜汽車で貰った梨むくその皮
車窓からかけたことあるベンチが見え消え
冷えくる夜更の膝だいて車席に揺れてる
この体験味って夜汽車の膝だく
夜汽車の席の枕落ちむざんな黒髪
汽車の深夜にぱっちり醒めた睫毛の反りよう
くんで寝ている手の指輪の珠へ灯
夜汽車の車席で寝ずに来た剃りあとざらめく
スタンドの炎天へ絵日傘咲き競うている
炎天へ燃え熾かる彼の炬火のいろ
レース合図のピストルを天へ向けた刹那
一泊の枕の下でワッチのちくたく
深夜ミシンの騒音を絶やして虫澄む
五代州へ別かれ散る握手の手の熱
ふと醒めペンシル走らせば遥かな暁鶏
朝霧海を埋めつくし枯穂草のそよぎ
たった一人のパジャマ姿を佇たせてこの海

1934年2月号

草山あれば牛がいて草喰う影おく
ほころび縫ってくれて、糸切歯
ヨットの白ら帆とほつれ毛が吹かれてる
戻ればドアの鍵孔に書付けが更けている
ボヘミアンネクタイで故国へ帰る気もない
ビーチの沙の絵日傘の蔭なる寝顔よ
ざわめく海にざわめかせ考えているのだ

1934年3月号

真っ黒ろな機関車に曳きずられて行く旅か
灯を、君と、扉の外はただ霧で別れる
山のこの樹に、昼ふかき蟻と彫ってある文字

ここでは独立祭の太陽と釣している

1934年4月号

船へはお見送り出来ないという手を握っている
草で草の葉はさんで読みかけておく
霧どころの霧の夜のともかくも生活する
何んか来ているアンテナの屋根裏に寝てるのだ

「湖畔社 十二月例会」

爐のアスベスト燃え燃えて別れは迫るか

1934年5月号

俺の肩に既(も)う亡い友の手がある写真で
舗道に木脚の音をさせてゆくも夜霧に
渡り鳥見送りに来たような田園
月へ救命袋かけて、浪きってゆく

1934年6月号

朝が冷えてきた活字を拾ってゆく指
行く雁行かして了って、大空
湖水に映つる秋から釣ってる
波うちやまぬ海に沿い駈けってやまない
ぶっ欠けた月に廃残の影曳きずってる
異邦人同士がだまってベンチに、秋風

「湖畔社 十二月例会」

帰りの松葉杖へぶっ欠けた月が出る

1934年7月号

黎明のこの大通りを独り行く靴音だ
これからまたつく松葉杖拭いてる小春日

「湖畔社 一月例会」

手紙出しに行く雨夜の松葉杖雫して

1934年8月号

傘さす手がない松葉杖で行く
終刊構成終えた手で洗っている
戻りの松葉杖へぶっ欠けた月のぼる
深夜の雨音に叩かれて寝ている屋根裏
松葉杖つき荒涼の涯まで行く身か

1934年9月号

春たそがれの草に道のある口笛
太平洋を越えて来たページ剪っている
女よ羊の番をして春寒く編みもの
蛙鳴きそむるまま星星つらなる
寒月に氷柱のような脚松葉杖ではこぶ

1934年10月号

送りとどけて星空帰り行くわだち
揚がってるのはみなアメリカのへなへな凧です
カリフォルニアの緑野（みどりの）で我が吹く草笛
豚飼いは豚のことばかり考へて春ゆく
月夜から折ってきてくれたアモンズの匂ひ
渚行く松葉杖を濡らして白ら波

1934年11月号

海へ入る陽を編んでる編み棒
水はあたまで搬ぶものにして春の日
ウインドミルの深夜の軋みの伝いくる杖で
海へ入る陽を壁に凭れ編んでる

1934年12月号

へー塚限りなく積んでカリフォルニアの春がゆく
ボヘミアン・ネクタイ縫うてくれてお別れか
松葉杖の我が影を伸ばして夕陽は
朝から晴れて青葉ごしのスパニシュ・ソングだ

通信「北米より」

カリフォルニア　下山英太郎　55歳

サン・フランシスコの文芸協会が私のため「慰めの会」という名目で劇の試演やその他の演芸会を催して金をこしらえてくれましたので、去る十日からここの海抜千四百フィートという山中（サン・フランシスコから百四十五マイル）の温泉へ三週間の予定で湯治に来ております。ここには犬というものが一匹も飼ってない代り、鹿どもが夕がたになると山からやってくるのです。昨夕も夕餉へ出かけようとしましたら大小十一頭がおそろいで、私の宿舎の前にいましたら早速用意していたブレッドを手にのせて出しましたら、角の生えかけた勇敢なヤツが来てペロペロなんぼでもひとりでたべるのです。他の連中はおづおづしていましたが……。

（九、一四。ウイルバア、スプリングスに於て）

1935（昭10）年56歳

『第五句集海へだて』出版

1935年（昭10）1月号

松葉杖も脚も投げ出してかれしば
あの山頂で夜夜廻転する灯の円周
カリフォルニアの夏草が枯れれば君が忌
松葉杖にさげたランタンで秋が通る
暮れのこる山があって夕餉の後のピアノ

夏枯れ草をそよがして落ちゆく陽のいろ
刈り積まれてある枯草にはらばい読むもの

１９３５年２月号

手の蟻も、別れの握手だ
あすは此処を去ろうを野鳩の遠ごえ
乾し草あつめて峰雲へ積み上げている
飛行機どこまでもカリフォルニアの夏野は枯れている
朝のたわわな枝からもいで味わう
岩の凹みに溜まってる水に映った顔だ

１９３５年３月号

「松葉杖に泣く」

谷尾　寿彦

私は下山英太郎と何の知己もない。然し私が層雲へ来て彼の作品に親しんで来た事は已に久しい。彼の作品は、遠く異郷にある、不遇の旅人としての、淋しい放浪から来る一種の強い感傷に彩られていた。之れは単純な旅の情懐ではない。まことに其旅と云うものを、全生命から噛みしめた唄である。ただ旅の一片の興味などとは自ら違う、祖国を遠く離れた、人生の旅として、まことに痛々しさから、にじみ出た唄だ。彼はまことに層雲での、一人のジプシーであったのだ。

私は彼の作品を、常に誦しては、其淋しい放浪の唄に泣かされて来た。層雲には決して旅人に乏しくない。然し彼の如く、切実な旅人は居ない。随って彼の唄は、こしらえ上げられた唄ではない。真実、心の底から、湧き出して、堪えられぬものから発している。だからしていつも私は、彼の作品から、頼りなく儚ない人生の声に、心を打たれた。俳句と云うよりも、人生の悲しい唄。旅人としての人生の侘しさを、他人事でなく感じさせられた。勿論彼の句は、層雲でも特別な光りを見せていた。私達は常に彼から最も世界的な、大陸的な、コスモポリタン的な、寂寥を受け取っていた。これによって私達の句心が、どれ丈け反響的な、誘発をなしたであろうか。彼が渺茫たる太平洋を、じっと眺めて、其限りなき孤独を悲しんだり、一本の松葉杖に凭れながら、茫漠たるアメリカ平野の、上空の月を仰いだり、其涙ぐましい作品は、確に私達層雲での、悲しい人生真実の記録だった事か。

殊に其作品を通じて、私達へ強くしみ込んで来るものは彼の不具である。遠く波濤萬里彼方に、たったひとり不具者として、懐つかしい故里の空を、あこがれ続けた姿だった。私は彼の句の大半に、此痛ましい松葉杖を見る。

さて突然私は、去る旧暦二十日に、彼から通信を受取った。其中には一枚の写真に添えて、ノートの紙片が一枚入っていた。之れは不遇の詩人、英、下山が、全身の自由を失った日、偶然遠く私を思い出したのか。あおむけにねていて、書いたらしいものであった。之れは不幸にして、今絶筆となってしまった。

仰臥乱筆乞御寛恕

貴兄には、私の或る部分に対する、故国に於ける唯一の知

己として、爾来常に尊敬致しておりますが……其時々に御発表の御高見に対して……私事当年一月中旬より、業務に堪えない身となり、転地保養を続けました末、当地の文芸協会が主催して、私のため「慰めの夕べ」と云う、演芸会をやり、こしらえて呉れました金をもって、リミットの三週間を湯治して帰り、十月十日より、当地（桑港）北米朝日新聞社に、新らしく就職。其処の三階の一つある部屋を与えられまして、愉快に仕事をやっていますが、其間も容赦なく昂進していた病気が、片一方の脚迄も役にたたなくしてしまい、昼夜絶えざる劇痛に苛なまれまして、とうとう昨日よりベッドに臥す身となっております。……回復の望みなんか、テンでありませんので、諸友社同人の厄介になるのが、心苦しくてなりませんから、郡立病院（カウンテー・ホスピタル）へにても、早く運んで貰いまして、死後は其死体を解剖へ附してもらい、それで永年御厄介になった、アメリカへの、いささか御礼心にしたいと念じておる次第です。呵々。（一九三四、一一、二三、午後二時近く。）

北米朝日新聞社三階の草色に塗った壁に取巻かれ乍ら。

下山英太郎

谷尾寿彦様

御地灘町（米子市）一丁目にある筈の、山陰銀行につとめています筈の、松本精（迷洋）は、アメリカ放浪時代の友で、最初病に仆れた時など、随分世話になりましたが、爾後手紙一本出した事もありません。若しヒョット、御逢いの事でもありましたら、私の現況を御伝え下さいます様に。此ピクチャーは、山の温泉ウイルバに湯治中、撮って貰ったものです。（原文のまま）

此手紙を手にして、私は何だか、じんわり眼の「ふち」があつくなり、胸苦しさを感じた。彼の病気の経過も知らず、又肉親の関係も知らぬ私には、どうする事も出来ない。私はただ、青い冬空を仰いで、吐息をついた。

で、私は兎に角返事をかいた。今更ら、死から免れる為めの方法として、彼を慰める言葉はない。又そんな上っ面な慰め言葉を受入れるだけの、彼の状態ではない。そこで「たとえ船の中で死ぬるとも、無理をして、も一度日本へ帰れ。又若しアメリカで死ぬとも、それは仕方がないが、死体を解剖に附する事は、絶対にいけない。君が死体を解剖させた処で、それがそもそも何になる。責めて体躯だけでも、疵つけずに土へ帰れ。絶体に解剖すな。解剖と云う言葉すら、詩を引裂く音だ」と、私は折返し云ってやった。此私の手紙がどうか彼れの息ある内に、彼のベッドに着く様に私は祈った。

私は或日、お風呂にひたっていた。すると女中が背を流しに来て、亜米利加から手紙が来ていると云う。私はギクッとした。…下山が死んだ……と私は思った。帰って見ると、それはオークランドの、森田義武からの消息だった。中から新聞の切抜き。

『逸蒼、下山英太郎氏遂に死す』

葬儀は友人葬（九日）マーデン社執行

それには、下山の松葉杖をついた横向きの姿の写真が、カットに入れてあった。矢張り彼は死んだのだ。新聞を見ると、彼は明治三十六年十月に、シヤートル上陸。三十二年間アメリカにいたそうだ。其間南加レモン詩社同人として、其他あらゆる文芸に関与し、一日も倦まず作句を続け、大に南加文芸に力を尽した。明治十二年生れだとかかれてあった。

森田の手紙は、下山の病状を逐一報導したものだった。其内、彼が郡立病院で死んだ事は、最も私を悲しくした。彼の前掲の手紙に「皆な友人の厄介になるのが辛いから、郡病院へ行きたい」と云っている。その郡病院へゆくと云ったのは、彼が早く死に就きたい、と云う心なのだ。「郡病院は駄目だと見たら、早く片付けて仕舞うそうであります」と。森田の手紙にかき加えてある。何と云う痛ましい詩人の最後だろう。下山は早く死ぬ為め、郡病院にいったのである。涙がハラハラと落ちた。

森田の手紙には、

湖畔社同人集ってお通夜した。集まった人七十人。墓地はサンフランシスコ郊外。サンマテオ墓地。下山の墓の側には、大松が一本ある。

ほんとにそれでも、よく此様な多くの温かい友人達があったと思う。下山も幸福であると思った。彼地の文芸同人が心をつくして、此不遇の詩人を慰めいたわり、其最後迄、美しくされた事は、ほんとに涙がにじまずにはいられなかった。

殊にうれしかったのは、彼の死体が、解剖台上に上らなかった事だった。私の手紙を出したのは、十二月二十一、二日だから、多分彼の生前には、届かずに死んだと思う。が、私の主張した、解剖否定は実現したのだ。私の心が届いた様にうれしかった。どんなに考えても、あの不遇詩人の死後の体に迄、刃物を加えるのは惨酷に過ぎる。あの美しい下山の俳句の最後が、メスであってはたまらないからだ。ほんとに此一事は私として、在留諸氏に遠く感謝を吝まない。

嗚呼。私達の英、下山は遂にいってしまった。彼の終生の妻とし、又子として、いつも磨きつづけていた一本の松葉杖は、今は淋しく残されて、何処かの隅に立てかけられているのであろうか…。（昭和一〇、二、一〇）

＊　＊

1935年3月号

『彼が最後の手記』

荻原 井泉水

下山英太郎（逸蒼）が三十余年間、漂泊しつづけた北米の空でなくなったといふ通信を受取ったのは一月の末であったが、二月十五日締切の中に、おそらくは彼の最後の句稿があるのであろうかと思って、其をさがさしたが無いのだった。で、私はあらためて、前月の句稿のまだ返送せずにあったものを……嗚呼、いまは誰の手に返送すべきぞ……読みかえして見た。

手の蟻も、別れの握手だ

かりそめに友人とでも別れた時の感懐ではあろうけれども今となって見れば、何となく此の世を辞する言葉としても聞かれるではないか。而して、この蟻は、彼がよく用いた言葉でいうと、アメリカ三界への放浪者らしい印象でもあり、彼という自然人的一存在の象徴ともきこえるではないか。

岩の凹みに溜まってる水に映った顔だ
松葉杖のさきで月夜からおとしたフルーツ
あすは此処を去ろうを野鳩の遠ごえ

これらが私の手許に来たところの彼の句稿として最後のものだったのである。

オークランドの邦字新聞はそれぞれに英太郎（逸蒼）の為に追悼のページを設けたらしい。そのうちで「北米」に載せてある松野珠樹の文は、彼に対する同地の友人の感情をいちばん好く書いたものではないかと思う……。

以下引用文

逸蒼の遺骸を横にして会葬者諸氏に向って話す時、自分は泣けて泣けて仕方がなかった。話終って席に帰った時、幾度も涙を拭うた。泣き終ったあとで思った。僕にも泣けば流れる涙があるのかーーと。涙の温みを手の甲にしたのは、ちょっと数えて、廿年振りである。

雨が強く降っていたが、ちょうど一行が日本人墓地に着いた時止んだ。墓穴を掘った土が濡れて、モクモク土の匂いを立てていた。波多氏が逸蒼の髪を切り取るために棺の蓋を開いた時、逸蒼の死顔が寒ざむと白かった。寒雨の中に穴に埋められるのは、嘸、冷たいことであろうと思った。寒風は逸蒼の最も嫌ったものだった。

棺側の友六人で、逸蒼を穴に落し入れる。深々と深い穴だった。寒い穴、しかし、土になること、このアメリカの土になることを望みに望んでいた逸蒼の希望通り埋めるのだ。病苦から逃れて、足腰伸ばして、実にゆっくりと、何よりも暖かい土の中に眠るのだ。外に冷い冬風が吹こうと、寒い雨が降ろうと、温い友達の手がこうして、棺を支えた紐を伸ばして逸蒼を永遠の温床に安眠を与うべく助け入れるのである。

棺が穴底に安置された。波多氏の読経がはじめられる。三々五々、合掌しながら立っていた友達の影が、折から雨あがりの雲の隙漏る夕陽の光りに長く影を曳いた。読経の鐘の音が淋しくひびく、墓穴の側の松の木からボタボタ落ちる滴りの音がしきりである。逸蒼に捧げた花輪からもいだ一輪の菊の花を杜女が、じっと眺めている。掘り上げられた新しい土の上に立った渓巌子が爪先を揃えて合掌している。紅人がしょんぼり立っている。皆が頭を垂れているさまも寥々として何んだか、おとむらいと言ったしめやかさであった。

「では埋めよう」

皆は手に手に、一と握りづつの土を逸蒼の棺の上に落とし

た。ボタボタとそれが棺の上で音するのであった。
…「では逸蒼、ぞんぶんに眠れよ……
「見給え」
と紅人がいう。
「こんな風な木を逸蒼、とても好であったんだ」
と、なるほど、松の木の側にヒョロッとした、パームツリーが一本、立っている。この妙な格好の木が、さぞや逸蒼に句題を提供することであろう。見渡せば、なごやかな野原が其処から眼下にひろがっている。
雨の降る日は寒いけれど、やがてもう春だ、空地に萌えている雑草の芽が萌黄の色も鮮やかにかがやいているのだ。日当りのよいこんな所で、見はらしのよいこんなところで寝ていたら、病気もだんだんよくなるだろう。苦痛も追い追い薄らぐだろう。
逸蒼よ　眠れ眠れ、春はもう直ぐだ。
『**春になったら一ぺん行こう**』という誰かの句があった。それだ。そのうち日和になったら甘納豆でも持って又来るよ……そんな心持で逸蒼を埋め終ったのであった。
逸蒼よ、ナアニ僕の胸の中ではまだまだ生きているんだよ、なあ……合掌
以上引用文

同地の波多泰巌からの通信に依ると、君が前の新聞社をやめて、最後の放浪生活に入った頃の句としては、

道づれと別れては、別れては行くしぐれ
あらゆる苦練に体当りに当ってる
ひねれば死ぬる瓦斯装置見上げて秋の夜
吹かれきてしばしただよい吹かれゆくかの白雲に似たる我身か

「それから層雲にも通信されたように、桑港文芸協会の尽力で三週間ほどネバダ境の山の温泉に行かれたのは実に彼が生涯に於ける最後の慰安でありました。働いても働いても食えるか食えぬかと云う環境と経済組織の中に、彼が不具の身を以て病苦と戦いつつ最後に「北米朝日」の校正係に入社、就働中、今までよい方の右脚のモモの骨と大腿骨とがひっぱなれてしまって、なお其上に右膝の骨がホキホキと折れたのでした」ー何という悲惨なことであろう。私は此通信を読みつづけるに堪えぬ気がした。そこに、彼の句が二つしるされてある……。

仆れるまで頑張って仕事したせめての満足
死後の解剖まで決めた心のほほえみ

彼が最後に職を得た「北米朝日」の主幹をしている海老名一雄君は私と帝大の同窓であって、クラスは二級程違ったけれども、戸田の水泳部で一夏一緒に暮らしたこともあり、それから君の家（海老名弾正氏宅）に遊びに行って、当時は珍らしかった英語学習用の蓄音器などを聞いたことを覚えている。不具であり、病人である英太郎をして入社せしめたということは、他からの推挽（すいばん）も大につとめられたのであろうが、主として海老名君の好意に依ることであろうと

考えると、君が私に対しての友情ではあるまいけれども、私は君に対して云いしれぬ友情を感ずるのである。（私はもう二十数年も手紙を書いたことのない君に手紙を書こうと思っている）

英太郎が最後の句帖には、波多野泰巌から報ぜられたところに依ると……

以下引用文

十二月二十六日（水曜）

安全カミソリで看護婦にそらるる脛の毛
明朝はオプレーションして脚の骨を針金でつなぐと云う
手術の可否など問うことも考えることもいらぬ身となって
すべてを神に任せる如く手術にまかせて
ならばマスイ剤のままとこしえに眠ってみたいが
不自由よりも痛みに倦んじ苦みぬきし身が
かくて何年ここにねてさてどうなるかも
すべて不可解の運命に任せた身なので
ファンテンペンもって来てオプレーションにサインさせる
ならば死にたい身にオプレーション施されるとは
明朝はオプレーションときいた夜の両足のケイレン

夜の見舞客のギリシャ人にたのみ浅野氏へ書一封。

十二月二十九日（土）

いよいよオプレーションで水も口にするなとカンゴフから注意。

死は第一の願　つぎはなりゆきに
金包も鉢花も、ルームにキーかけて出る
眼鏡のままで病床にいびきをかいてたか

午前八時前から行き、十一時過ベッドへ戻った。

病躯の痛みを歯を噛みしめるに生れてきたのか
手術後の仕事している者をしかりつけてやる
目ばかり白装束の手術をうける
雨にも風にも……（不明）
くぢら汐吹くように病床で吐き上ぐる水

この日二十九日は三食もとらず氷と水で。

十二月三十日（日）

この朝も胸わるし氷水のほかやらず。

十二月三十一日（月）

胸のキャスターに両手のせてるまに年逝くか

年が改ってからの句帖には

一月五日

○郡病院のベッドから新年の海かんじてる

此句が辞世なのである。尚、日記に記されたところは…

一月五日

ねむるねむるよくもこんなにねむれるもんだ。スコシ固い通じ。

ナースウメーキベットするシーツへの旭

一週間ぶり少し通じつけば少し軽ろい心。

オイル十分のめとカンゴフに叱られた。

きづかぬうちに苦しい楽しいつき日は流れる

柳芽ぶいて病躯はキャスター

青空も見えて来た春風を入れてもらう

枕辺からさしてきた新春の陽をつかむ

春風となり郡病院の枕べから

新春青み暮れてゆく病院からでも

一月六日（即ち死の当日）

朝来好天、少々通じあったがメーキベッドのとき脳貧血らしく目がぐらぐらした。

以上引用文

私が京都に居て、青山郊汀が欧米留学から帰朝した時、英太郎は郊汀に言伝てして、私にアメリカに来てくれないか、同人も相当にいることだからとの事だった。そのうちに機会を見出して行こうと、郊汀を通して返事してもらったまま、それから十年になる。たとえ私が今後、渡米することはあろうとも今は彼の墓に花でもそなえる外はない。

「下山英太郎追悼句会」　北米支部、湖畔社　1935年4月号

一月二十七日、求府求道舎に於て、一月六日に永眠されました逸蒼の追悼句会を催しました。氏の徳を慕い集る者二十名、送句者十三名の盛会でした。例会毎に見る氏の松葉杖、互選の時、目を止める逸蒼の力強い叫びの句が見られない淋しさ。盛会ではあったが、誰の心の中にも等しく空虚があった。

（遺稿）享年55歳

鯨汐吹くやうに病床で吐き上ぐる水

（以下支部会員十九名の追悼句がつづく）

下山 英太郎 歌集 より

下山逸蒼は多数の名前で歌を新聞に投稿発表していた。ひとつぼし、旅の子、暁野星一、黒瀬乙吉、北島隆、放浪、三田村猛、竹村力、千種昭、嘯風生、関根寅之助、砂直三、天野放浪、島寺磯人、東海次郎、不来方
歌は小林 不未鳴編集の聴鴬亭文庫より抜粋した。

外なるはやぶれゆけども裏にある
　吾は日々新たに生れて詠はす

歌は我が悲しき玩具と云ひしかの
　啄木の胸に今もぶつかる

青雲の宿志空しく今はたゞ
　漫筆などに筆を遊ばす

歌はわがやむにやまれぬ息吹なり
　作るにあらで自らなる

天雨徳波や歌調にばかり拘泥(かかず)って
　生命も味もない歌ばかりよす

うはべをば泥に包める輝ける
　真玉と知らでなげうちし君

行きずりてそのまゝ消ゆる世のなみの
　恋のたぐひと思ひいにしか

宵闇の空にかがやく一つ星
　それ見しのみに涙たばしる

向日葵の陽を恋ひ陽のみ見つめつゝ
　枯れゆく如く死ぬる我かも

泣きてまたかたみに抱く時あれと
　祈るは二人ののみのためかは

粉飾を去れる真実をうとましと
　破れ靴のごとすてし君かも

身をせめて狂ひ死ぬほど身をせめて
　なほゆるされぬ罪か恨か

たゞ一言言ひのこせしをたゞ一言
　言はんと追へばはやも影なし

死を思ひ死を思ひつめふと仰ぐ
　天井より垂る黒き瓦斯管

大空をとざせる雲のひらくごと
　君が心のひらく待てども

恋しさの紅きほのふは悲しさの
　青きほのふと燃えかわりたり

まばたくま千万里ほどかけへだつ
　逃げゆく恋の疾き翼かな

虹よりも美しかりし脆かりし
　恋にかけいし命なりけり

今生にふたたび見じとちかへども
　生みしと聞けば心たじろぐ

さきの恋はいふに忍びずこのたびの
　児はかゞやかにはぐくめいとや

「女の児はいらぬ」君のたまふに
　いとしさのなを増して悲しき

山の樹に彫りしこの字は永遠に
　消へなく樹令つゞく限りは

色恋の紛紜（ふんぬん）にのみ身焦がすか
　食ふか食はれず泣き号（さけ）ぶ世に

媾曳（あいびき）のさ中にありてフト君は
　のこせし吾児の泣声すてふ

封切りて読める文面の裏に秘む
　深き悩みを知りぬくにつれ

束ねつゝその花の香に遠ざかり
　つれなくなりし人を憶へば

流れゆく千断(ざ)れ雲めき添ひ離れ
　軈(やが)て消えゆくをとこおんなか

まさやかに彼の女の唄の聞え来て
　やがて消えゆく秋の灯の下

いづれより誘ひしとなく伴れだちて
　解(とき)放たれし如く野へ行く

この海の春凪ぐ虚無のはたてより
　思ひがけなき白帆生れ来る

児を見れば菓子など買ふてやる癖の
　かゝる窮苦の日にもやまなく

年問へば十五と答へうつむきし
　紅きリボンの片えくぼはも

さすらひのこの旅の子に朝食の
　代乞ふあはれそれも旅の子

人形の衣つくりとせがむ児に
　悲しみの日のなきを願へり

放浪のむかし想へばほゝえまし
　子のため雛を祭る友見て

クレオンをもて太陽を花を描く
　までに大きくなりし姪はも

みな円くみな同じ顔をかける中の
　髭ある顔はパパなりといふ

母あれど家出てをらず母の日に
　斯くても紅き花を挿さむか

おわり

編　集　後　記

今回のデジタル版『下山逸蒼 総集編』は、2017 年 3 月第 14 回から 2018 年 2 月第 19 回に亘って常磐ネットワークで連載した内容を再編集、時系列に沿って配置し直して、逸蒼がアメリカ西海岸に上陸した 1903 年 23 歳から 1935 年 55 歳で瞑目するまでを、彼の五冊の句集と句集以後は、日本の層雲に投稿した句と文章によって辿ることができます。

第 1 句集は敢えて原本を掲載しましたので、伝統定型俳句から始まる彼の句が変遷する様が際立つと思います。第 2 集以後第 5 集まではある程度の選句をしています。層雲本誌の逸蒼関係記事は漏らさず掲載しました。

特集記事の参考引証資料

※ 1.『下山逸蒼の生涯と其の芸術』下山四郎 編　小林不未鳴 著　層雲社

※ 2-1.『在米日本人「植民地文芸」覚書 (2)「我がなを」永遠に』—自由律俳句と直原敏平—　粂井輝子 著　SELLA 第 35 号抜刷

※ 2-2.『在米日本人「植民地文芸」覚書 (3)「かへらぬふるさと」』—下山逸蒼の自由律俳句—　粂井輝子 著　白百合女子大学言語・文学研究センター

※ 3.『移民地文芸・自由律俳句の世界』—下村逸蒼を中心に—　中郷芙美子 著　立命館大学国際言語文化研究所

※ 4.『英米文学の地平』—W. ワーズワスから日系アメリカ人作家まで—　田村一男 監修　金星堂

※ 5.『特別展 あこがれの空へ』—民間パイロットの先駆け 武石浩玻—　水戸市立博物館 図録

※ 6.『TORCH』編集発行人 アゴスト社

※ 7-1.『アメリカ合衆国戦時強制収容所内俳句集覚書』粂井輝子 著　JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 9

※ 7-2.『幽居三年』徳永田芥子句集　徳永田芥子 著　時流社

※ 8.『花と雲』米倉久枝句集　米倉久枝 著　層雲社

※ 9.『コルマの丘に眠る』—水平一線かぎるまま帰らぬ故里—　久保三八子 著　真風舎

※ 10.『下山英太郎歌集』　下山英太郎 著　小林不未鳴 編　聴鴛亭文庫

※ 11.『一艸集』　下山英太郎 著　※ 12.『逸蒼句稿』　下山英太郎 著　※ 13『下山英太郎句集』　下山英太郎 著

※ 14.『句集 沙漠の旅より』　下山英太郎 著　※ 15.『霧笛』　下山英太郎 著　※ 16.『海へだて』　下山英太郎 著

※ 17.『層雲 本誌』　層雲社　※ 18.『層雲句集』　層雲社

『抒情文芸』『きやらぼく』『茉莉花』『新墾』『萌』『花野句会会報』『二弦』『青穂』『群妙』『層雲自由律』『水燿通信』『でんでん虫の会』『周防一夜会秋号』等、お便り、句評、句誌をお寄せいただき、ありがとうございました。

投稿の目安

一、投句数は自由と改めます。
一、選評をお願いいたします。
一、近況、評論、エッセイ等 およせください。
一、各自の原稿用紙を使い楷書で願います。

以上マイペースにて願います。

沖　縄　の　獅　子

自由律句報 常磐ネットワーク
平成二十八年十二月発行 増刊号
デジタル版第一版

【編集室】
〒 305・0035 茨城県つくば市松代
4・28・429・104 松岡方
電話・ファクシミリ 029・853・1945
メール:matsuoka0002@icloud.com

本誌からの無断転載を禁止いたします。